
異世界で我が儘に

片翼の龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で我が儘に

【NZコード】

N8462U

【作者名】

片翼の龍

【あらすじ】

大学の帰りに交通事故に遭った主人公・桐谷龍司（22）目覚めたら全裸で森の中に。人里を探していると魔物に襲われる少女を見つけ、知恵を絞つて戦います。肉体ステータスは貧弱、ゴブリンレベルに勝てません！

神様が存在し、魔物に脅かされる世界。一度目の生を謳歌するために『世界の守り手』であるギルドに所属します。

主人公の行動は、作者だったらどうするかを反映させます。

RPG風最強を目指します。がいつになつたら強くなれるのやら

⋮

最新話までの概略：主人公はこの世界の住人としての一歩を踏み出し、順応し始めています。チートに気づかないまま、ちょっとだけ強くなりました。しかし、異世界は優しいだけではなかつたようです。

第一話 異世界の森で（前書き）

作者の暇つぶしによって書かれた妄想小説です、ご注意ください。作中に登場する人名、地名、その他固有名称はすべてフィクションです。

初めて小説を書いた上、文才もないため、不快に感じた場合は速やかに退避してください。

第一話 異世界の森で

風の音がする。

寝ぼけたような状態から意識が覚醒するにつれて、それが風で揺れる木々が鳴らす音だとわかる。

穏やかな陽光に照らされながら、はつきりと田が覚めると自分が全裸で森の中に寝転んでいたことに気づいた。

「……なんぞなもし」

口をついて出た第一声。

風を受けた時の肌寒さ、そして直射日光の暖かさ、そして背中いっぱいに感じるチクチクとした感触と土の柔らかさ。わけがわからない。

誰か説明してほしい。

現状を把握するためにもなぜここにいるのか思い返す。

覚えているのは、サークルの帰りで自転車に乗っていたこと。

そして、真っ赤なスポーツカーが視界に入つて。

……ああ、事故ったのか。深夜、信号が点滅する頃だつたし車に注意するんだつたなあ。

過ぎたことは仕方ない。

では、なぜ事故に遭つた記憶のある俺が。

こんな森の中で、服も着ないで田覚めるはめになつたんだ。

とりあえず実際に自分に起きたことを確認し、考える。

事故に遭つたのは間違いない。

感じたことのない強い衝撃を受けた記憶がはつきりとある。

そして、気づいたら見知らぬ場所。

考えられるのは、死体遺棄とか拉致とか、犯罪に巻き込まれた可能

性だが、そう決め付けるにはおかしな点があった。

事故にあつたはずの体には目立つた外傷はなく、特に痛みも感じられない。

それだけではない。

「あれ…眼鏡が」

幼稚園児の頃から嵌つたテレビゲームという誘惑によつて失われた健全な視力。

最近のコンタクト派ではなく、面倒だからといつ理由で度のキツい眼鏡を愛用している。

しかし、その眼鏡は見当たらない。

掛けてるのに気づかなかつた、なんてこともなく顔に手を当てても眼鏡はない。

そして、眼鏡がないはずなのに視界がよく見える。

一新されたような体、見知らぬ場所、事故にあつた記憶。もしかしたら。

もしかしたら、俺は死んでしまつたのではないだろつか。

ここは現世ではなく俗にいうあの世で、しばらくしたら鬼か天使かなにかがでてきて案内されるんじやないか。

そう考えていた。とりあえず俺の理解の範囲の外にある出来事に巻き込まれたのだと。

こんな意味不明かつ理解不能な状況に陥れば、これは夢だと思うのが普通かもしれない。

だが、肌で感じるのは紛れもないリアル。

相変わらず人気のない森の中、日光浴を続けていると徐々に生きている実感が沸いてきた。

あの世では、足があつて心臓が動いている幽霊が一般的なのかもしない。

だが、ここまで生を感じられるなら少しへりに動き回ってもいいだろつ。

とりあえず誘拐、ドッキリ、超常現象などの可能性を頭に入れつつ周囲の探索をしてみよつ。

できるなら、どうか

家族の元に帰れますように

そう願つて

第一話 異世界の森で（後書き）

12月2日文章を手直しました。

第一話 ファーストハンカウント

森の中を歩きながら、この後どうするか考える。

もしもここがあの世なら他の靈が、誘拐されただけなら民家が見つかるはずだ。

最悪、神隠しに遭つていて、妖怪なんかがてきたとしても構わない。

いや、できるなら出てこないでほしい。

とりあえず現状を打破するために、自分以外の生命体を発見するのがもつとも手つ取り早い。

一応、沢や小川を探してはいるが、ほぼ手探りのまま森を進んでいく。

緩やかな斜面を下りながら歩いてるから、いざれば麓にたどり着ける。

大森林で遭難という可能性もあるが、希望を持って歩を進める。

歩みを進めて30分ほど経つただのつか。

足元に流れる小川を見つけた。

とても澄んでいて、上流のほうで湧き水になつてそうだ。

山くだりで喉が渇いていたため、すくつて飲む。

おいしい。

疲れが吹き飛んだような気がして、さうに一口ほど口に含む。

この後は、この小川に沿つて下つてこいつ。

流れに足をとられないうに注意しながら進んでいくと、徐々に水しぶきのあがる音が聞こえてきた。

この先に滝もあるのだろうか。

だったらまっすぐ進むのは危ないと考え、水の流れる方向を確認してから進路を斜めにとる。

予想通り傾斜がきつかつたが、あのまま進んで断崖絶壁に出くわすよりはいいだろ？

さっきまでいた場所より7mほどの高さをくだつたところで、また小川の方向へ歩き出す。

水しぶきの音はより大きくなる。

きつとこの先をいけば滝が見える。

そしたらまた川に沿つて歩き続けよ。う。そう考えながら進むと、木々が開け、大きな滝つぼが見えてきた。流れも続いてるみたいだし、ほつと一息ついたところでそれは聞こえた。

「な、なにをするつもりですか？ 変態！」

大声をあげなかつた自分を褒めてやりたい。
別段肝が据わつてゐわけではない俺が醜態をさらさなかつたのは、たまたま息を吐くのではなく思いつきり吸つたためだ。

胸が圧迫されあばらが軋んだ氣がしたが、まさかの第一村人発見である。

すぐに声がした方向に目を向ける。

「キケケツ！」

「いやつ、離してよー！ の化け物つ！」

「ゲッホ！ ホホッ……あ、肋骨が」

おい不意打ちはやめる、俺の肋骨がやばい。
見つけたのは水場を挟んだ向かい側。

緑色のちっちゃいおっさんが、少女を押し倒している。

ぼろきれを纏い、ヤバい雰囲気が濃厚に伝わってくるおっさんと、時代錯誤な洋服を着た少女。

どこの原住民だよ、もしかしてここは地獄であれは鬼か？などと考えながら少女を助ける方法を探す。

実際にこんな場面に出くわしても、喧嘩なぞしたことのない小市民には対処が難しかつただろう。

しかしこちらは一度死んだ（かもしない）身。多少は気が大きくなっていたのか、足元の石を拾い上げ全力で投げる。

「ええいー！」

向こうまで距離は約15m。

鬼が少女に覆いかぶさっているため、少女にぶつかるのではないだろ？

俺が投げた握りこぶし大の石は、奇跡的にまっすぐ狙い通りに飛んでいく。

それはそのまま、綺麗な放物線を描いて鬼の後頭部に吸い込まれていった。

「ギャンー？」

頭をおさえて動きが止まる鬼。少女を逃がすなら今しかない。

「早く逃げるー早くー！」

声を張り上げる。

こちらに気づいたのか、少女は鬼を突き飛ばして窮地から抜け出した。

少女は涙に濡れた顔でこちらを一瞬見た後、急いで逃げていく。
きっとあっちに人の住む場所があるんだろうな。

そう考えつつ、第一投に備える。

緑の小鬼はまだダメージが響いているのかうずくまつたまま動かない。

二投目を投げる。

当たらない。すぐに次の石を拾つ。

三投目を投げる。

ケツに命中。大したダメージはなし。

「グアアッ」

鬼が復活したようで立ち上がり、「こちらを向く……!?

第一話 ファーストエントカウント（後書き）

12月2日文章を手直しました。

第三話 小鬼との鬼っこ

「やっぱ人間じゃないよな……」

ブルドックのようにいかつい顔。口から覗く犬歯。高等な知性が感じられない赤い目。そして緑色の皮膚を考慮するに、ゴブリン、小鬼、オーク、オーガといった物語の中の化け物なのだろう。今まで喧嘩したことなんてなかつた俺に、狂人の相手すら出来ないのに、相手は狂った化物。

そんな奴がこちらを威嚇するように睨みつけている。流れ出る嫌な汗を感じながら次の行動を考える。

(どうしよう、戦うなんて最後の手段だし走って逃げ切れる自信もない……)

大学に入つてからめつきり運動しなくなつた今、持久力はなく、短距離走も100mを15秒はかかる。

対して相手は未知数。少女が抵抗していたことを思えば、筋力は体格通りか。

(つまりはスタミナ勝負っ……！)

奴の注意が完全にこちらに向いた今、逃げ出した少女はもう安全だろ？。あとはいかに自分の身を守れるか。

奴が落ちていた棍棒を拾い上げ、奇声を発しながら水場を迂回しながら向かってくる。直接距離はおよそ20mだったが、おかげで倍以上の時間を稼げる。

対して俺は、助走をつけて滝壺の中に飛び込む。

思ったより深いが足はちゃんと底につく。水は澄んでいて冷たく、とても気持ちいい。

そのまま化け物のいる岸と距離を離していく。

ギヤアギヤア騒いでる奴の方を見ると、棍棒を振り回しながらも追つてこない。

どうやら運はよかつたみたいだ。

水に入ったのには理由がいくつかある。

一つは奴の武器が刃物ではなく鈍器だったこと。

地上なら効果を遺憾なく発揮するかもしぬないが、水中では踏ん張りが効かず、水の抵抗で打撃は弱まる。

もう一つは身長差だ。俺の身長は178cm。対してあつちは140cmといったところか。

低身長のため、深いところでは取つ組み合いが不利なのだ。

戦えない、逃げ切れない俺に残された唯一の逃走経路が、この滝壺だつたのだ。いつまでも名前がないのは不便だし、あの緑色の化け物を『ゴブリン』と呼ぶことにする。

水に入つてから一分ほどしただろうか。

今ゴブリンと睨み合いの状況が続いている。

石をぶつけられ獲物まで逃がされたゴブリンはひどく立腹の様子だし、そう簡単には諦めてくれそうにない。

殺意を込められた視線なんぞ受けたことのない俺にとって、この状態は非常につらい。

ただ水中で立っているだけで、精神的に参りそうだ。

そのままさらりと時間が経過する。

彼女は無事に人がいる所まで行けただろうか？

目の前のコイツを見てからは、この世界が決して安全とは思えない。まだ他に化け物がいるかもしれないと考えると不安に駆られる。

（まあ人の心配よりも自分の身を案じる方が大切だよな。即刻死に繋がるわけじゃないけど、はつきりいつて詰みだし）

水に入ったおかげで戦闘は避けられたが逃げ切れたわけではない。我慢比べでもあるが結局はジリ貧だ。

（となると、あの女の子が走つていった方に行くしかないよな）現状で頼れるのは、やはり同じ人間しかいない。

ゴブリンはどう頑張つても友好的な関係になぞなれないだろうし。これから行動予定を考える。

まずは少女が走り去つた方向へ逃げる。

そして人間を探して助けを求めよう。

（簞でも物干し竿でもいいから、撃退できるだけの武器代わりになるものが見つかれば……）

あとは覚悟を決めて行動に移るだけ。

失敗したら命を賭けた殴り合いが始まり、その結果命を落とすかもしれない。

もしかしたら勝てる可能性もあるが、生死を賭けた戦いには卑怯もクソもなく、目つぶしや金的を繰り出す度胸が必要だ。

あいにくと自称ひ弱な俺には想像も出来ない。

投げる、突き飛ばすといった自衛手段をとるのが精一杯に違いない。

（捕まつたときは、そのとき考えよう）

さあ始めよう。

これがホントの鬼ごっこってやつだ！

大きく息を吸い込み、そして潜水を始める。

水は澄んでいるため上から見ればどこにいるかわかるが、岸にいるゴブリンの身長だと水面が反射する角度になる。

水底の「ゴシゴシ」とした石や岩に手を伸ばし、深い場所を泳ぐ。

目的の岸まで10m弱。

一息で泳ぎきり岸へ上がる。

振り返ると、「ゴブリンがこちらに気付き狂ったような奇声をあげながら駆けてくる。どうしようもなく恐怖を感じながら、こちらも追いつかれないように全力で走り出した。

「はっ、フッ、ハッ、ハッ……」

全速力の9割ほどで走るとゴブリンとの距離は少しづつ離れるようだ。

最もそんな速度は一分も維持できないため、今はつかず離れずだいたい20~30mを維持するようしている。

当然立ち止まれば数秒で追いつかれるだけに気を抜けない。三分はそのまま走つただろうか。

今までの獣道のような細い道から、急に木立を抜けて開けた場所に出た。

塗装されていない田舎の道路程度には整った道も続いている。ここを行けば、街か町か村か、なんにせよ人がいる場所につくはずだ。

振り返ると今まで追つてきていたゴブリンは影も形もない。

(人のテリトリーが近くなって諦めてくれたのかな)

そこそこ走り続けたおかげでかなり胸が苦しい。

最初すぐ逃げ出して、より深く森に入っていたら間違いなく逃げ切れなかつたらしい。

周囲の森は静かで気持ち良い風が吹いている。

危機は去ったと思いその場に腰を下ろす。少々疲れすぎた。

息を整えるのにも時間がかかりそうだし休憩を取ろうか、などと考えていた最中。

森から先ほどのゴブリンが飛び出した。

「！？」

だらけていた脳は瞬時に覚醒し、逃走に移れと体に指示をだす。
(やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいっ！)

心臓は全力で血液を送り出し逃走を促す。

しかし、すでにトップスピードの追跡者と今から走り出す逃走者。その場から駆け出して10mも進まないまま、背後からの衝撃で地面に打ちつけられる。

「つたあ！？くそつ痛え……」

「グギヤギヤギヤ！」

タックルをかましたゴブリンはすかさず追いつき、俺の背中に飛び乗る。

その手に持つ不格好な棍棒も、今の俺には地獄の鉄槌に見える。とつさに両腕を頭に回し守る。

頭をかち割られて死ぬのは想像もしたくない。が、衝撃は予想外の場所にきた。

最初の一撃は臀部… ようは尻だ。

尻は衝撃に強いと思っていたがやはり痛い。

コイツ、石をぶつけられたお返しをしやがった。

痛みに唸る俺を見て気をよくしたのか、先ほどよりもさらに大きな声をあげる。

この体勢はマズいと、両手を地につけ力を込め起き上がろうとした瞬間、理解できない衝撃が叩きつけられた。

第四話 情けは人の為ならず

朦朧とする意識の中、無意識に右手で後頭部を触る。その手を見ると、指先が赤く染まっている。

(俺：は、殴られ…たのか…)

徐々に覚醒する意識と共に激しい痛みがやってきた。熱い痛い熱い痛い熱い熱…初めての刺激に頭がいつぱいになる。

分かっているのは、ついに死が想像から一步現実に近寄ったことだけ。

このままでは本当に死ぬ、反撃しなくてはと思つても、頭の痛みが邪魔をする。

視界は涙でぼやけ、握る拳にも力が入りきらない。だが。

「こんな…ことで…終われるか！」

ありつたけの力で足掻き、裏拳がゴブリンにあたる。肉と肉が激しくぶつかり骨を通して振動が伝わる。

殴った俺も痛いんだ、あつちはもっと痛かろう。

ゴブリンが衝撃で横に転がったところを見て、俺は痛みに負けて意識を手放した。

s.i.d.e・ゴブリン

ツテテテ。

最後一一発デカイノモラッチャマッタ。

セツカク美味ソウナ雌ヲアジワツテカラ喰オウトシテタノ—邪魔シ

ヤガッテ。

シカシオカシナ人間ダ。

裸ノママ戦イヲ挑ムヤツハ聞イタコトモナイゼ…… マア美味クハナ
イガ食料ニカワリナイ。
頭ヲツブシテ持チ帰ルトシヨウ。

セーノ！

グシャ

s i d e · ? ? ?

「全く、あのハゲ！面倒な仕事ばっかり押し付けるんだから～もう
！」

村を出て少し歩いたあと、通いなれた小道を通つてお気に入りの場所に出る。

ここは精靈が休んでいてもおかしくないくらい綺麗な場所。
その証拠に栽培が難しい貴重な薬草も生えてるし、水も澄んでいて
水浴びにもつてこい。

薬師を嘗む両親の手伝いを始めたころ、おばあちゃんに教えてもらつた秘密の場所。

おとうさんとおかあさんには内緒なんだつて。
教えたなら薬草全部もつていきそうだつて笑つてた。

今はもう知つてるのはわたしだけ。

だからこの薬草が必要になつたときは、おとうさんがとつてこいつて五月蠅いんだ。
いやになつちやつ。

今日も渋々薬草を取りに来たんだけど、ここは落ち着くわ。

いい香りのする花に囲まれて自然を満喫する。

わたしが知る最高の贅沢。

せつかくだし少しお昼寝しましょ。…… QOO

なんだか嫌な匂いがして目が醒めた。

知らない匂いだ。

なんだろうと皿をあけると世界が緑色に染まっていた。

「キケケツ！」

（ゴブリン！？なんでこの場所に魔物が）

ゴブリンが私に馬乗りになつて、私の顔を覗き込んでいた。
私が目覚めたのを確認して、その手を伸ばし私の服を掴んだ。

「な、なにをするつもりですかっ。変態！」

ナードをされるかわらないが、嫌悪感が体中を駆け巡る。
手を振り払おうとするが、馬乗りのまま体重をかけられて上手くいかない。

「いやっ、離してよー！」の化け物つー！

絶望的な状況に目が熱くなる。

頼りになる両親も村を守る白警団もここにはいない。

私しか知らないのだ。

誰がが通りかかることもない。

おかあさんの顔を思い出す。

いつも優しく、薬師として村を守る立派な母。
おとうさんの顔を思い出す。

冒険者を引退してからも村を守り、母の手伝いをし、私に厳しくも愛情を持つて世界について教えてくれていた父。

(神様。精靈様。私の願いをお聞き届けください。どうか助けて)

もう一度両親に会いたい。

ハゲだなんだと悪態をつくのはやめよう。

早く薬師として認められるよつに頑張ろう。
だから…お願い、助けて…

「ギャン…?」

「早く逃げろ！早く！」

男の人の声がして、拘束が緩んだことに気づく。
何が起きたのかわからないが、逃げろと言われたことを思い返し、
ゴブリンを突き飛ばしてやっとその姿を確認する。

涙でよく見えなかつたが黒髪で裸の男性が対岸に立つていた。
とりあえず今は逃げないと。
お礼を言つのも忘れて村の方へと駆け出す。

小道を抜け、村が視界に入ったといひで息を切らせて走ってきた私
を見た見張りの二人もこちらに気づく。
慌てて私に駆け寄り、

「どうしたアンナ！？何か合つたのか？」

心配して声を駆けてくれる。

全力で走ってきたせいで呼吸がつらい。

なんとか一言、「魔物が…」としか言えなかつた。

顔を青くした一人だつたが、すぐ自分たちの仕事を思い出し、

「おい見習い、クレアさんとこ行つて田那呼んでこい」

「り、了解しました」

一人が指示を出し、残つた方が質問する。

「まずはこれ飲んで落ち着け。それで一体どうしたんだ。魔物を見たのか？」

腰に掛けた水筒を私に手渡して、私が息を整えるのを待つてくれる。

「ありがとう」と言って一口飲み、水筒を返す。

森でゴブリンに寝込みを襲われたこと、怪我はないことを彼に話したところ。

「アンナ——!..」

大声で私の名を呼び、凄い速さでこちらに向かつてくるおとうさん。

「アンナ、無事か？怪我はないか？」

おかあさんの手伝いをするときのエプロンをつけたまま、私の方を揺すりながら聞いてくる。

いつもなら恥ずかしがつてエプロンを人前でつけるなんてこと、絶

対にやらないおとうさんを見て嬉しくて涙が溢れる。そして私を助けてくれた存在を思い出す。

「大丈夫だよおとうさん。魔物に襲われたけど、精靈様が助けてくれたんだよ」

「なに？ 精靈様を見たのか？」

「うん！ 真っ黒な髪でおとうさんくらい身長が高くて、裸だったけど格好良かつた」

私が精靈を見たと言つたときは驚いたような顔をしたおとうさんだつたけど、次の瞬間、急に厳しい顔になつた。

「おい若造。武器を貸してもらえるか」

「構いませんが……」

おとうさんが見張りの人から槍を受けとる。

「お、おとうさん、一体どうしたの？」

おとうさんは村で一番強い。だけど、一人で魔物を退治しにいくのは危険だ。自警団のみんなが集まるまで待たないと。

「急がないと間に合わないかもしれん。」

「間に合わないって何が……」

「アンナ。精靈様に黒い髪をしたものはいない。可能性があるとし

たら、異国の血をひいた、同じ人間だ。」

サー・ツと、全身から血の氣がひく。

武器も防具もなく魔物の注意を引いてくれた男性。つくり人ではない存在だと思っていた。

そして魔物に殺されることもないと。

そして気づく。

私の代わりに死ぬかもしないことに。

「おとうさん!」

「道案内を頼めるか、アンナよ」

「うん!」

私を抱えて、おとうさんは走る。
足の遅い私は代わりに槍を持つている。

恐怖はない。

おとうさんの存在がとても心強い。

滝に通じる小道に近づいたとき、「ゴブリンがあの男性を殴つづける」というのが見えた。

(まだ生きてるー。)

ここまで逃げてきたのだろう。
しかし、まだ助けられない。

「おとうさん、急いでー。」

私を下ろし、おとうさんは槍を受け取る。

さつきまでよりも速い速度で駆け出すおとうさん。

彼の方を見ると、ゴブリンが棍棒を振り下ろしたところだった。

ここからでもわかる酷い怪我だ。

叫び声をあげそうになつたが、彼がゴブリンを殴りつけたのを見て、まだ死んでないことに安堵する。

しかしその後ピクリとも動かない。

ゴブリンが起き上がり彼にトドメを刺そうと再び棍棒を振りかぶる。まだおとうさんとゴブリンの距離は20m以上離れている。間に合わない。

絶望が頭をよぎる。

その時、おとうさんの声が響く。

「『 我に運命の祝福を』ええ給え・ブレス』」

魔法が発動し、おとうさんが一瞬光に包まれる。そして手に持った槍をゴブリン田掛けて投げる。

祝福を受け、投擲された槍は真っ直ぐにゴブリンに向かっていく。そして、棍棒が振り下ろされる直前に、グシャツと音を立ててゴブリンの頭蓋骨を貫通し絶命させる。

槍を受けた衝撃で、小柄なゴブリンは弾き飛ばされ、ロロロロと転がった。

おとうさんと私は、急いで男性に駆け寄る。

頭から血を流し、意識は戻っていない。

このままでは危険だ。

急いで手当てしないと。

傷を見て渋い顔をしてくるおとつわんを見る。
傷が深いことに気がついてる。

だから、お願ひする。

「おとつわん、傷を治す魔法は使えない?」

「無理だ、俺には時間をおいて一度使つべからしか魔力がない……あ
とは薬で治療するしか……」

「……」からじや家まで間に合わないよ。だから……ついてきて「

おとつわんに頼んで袖を裂いてもらい包帯代わりにする。
止血のため傷口を塞ぐが、すぐに赤く染まり始める。
おとつわんに彼を背負つてもらい、あの場所を田指す。
あそこには生える薬草ならきっと治せる。

待つてて、私を助けてくれた勇者わん。
今度は私が助けてみせるから……！

第四話 情けは人の為ならず（後書き）

この話でプロローグ的なものは終わりです。
感想、ご意見お待ちしております。

第 話 夢 の 中 で

一面の闇。停電したみたいに、光が消えた世界。ただそこに自分しかいないような感覚。気づいたらここにいた。

（どうしてこんなところに？いつから？自分はどうなった？日常から非日常に足を踏み入れ、女の子を助けた後どうなった？殺されたのか？誰に？化け物に…？）

そこまで思考が巡った途端、周囲にいくつもの気配が現れる。皆、埋め戻くされる。

ゴブリン、オーク、ゴボルド、オーガ、サキュバス、ヴァンパイア、ヘルハウンド、ケルベロス、ワイバーン、ドラゴン…植物のような物もあれば、岩石のようなものもある。自分が知るおとぎ話や伝説、伝承の中に出でくる悪役達。それらは闇の中につけても、濃厚な死と闇を纏いながら、存在している。

そして、声が聞こえてくる。内容は理解できない。理解してはいけない。なぜならそれは、呪詛。世界のすべてを呪つて余りあるほどの想いが込められた言葉。

頭が痛みだし、喉が乾き、胸は締め付けられ、腕は焼け、足は潰される。

そうか、ここは地獄なのだろう。どうやら一度目の死にはチャンスを与えられなかつたようだ。このまま苦痛のうちに消えるのか。すべて終わるのか。もうどうでもいいことだ。だがひとつ、気になり出している。

なぜこの声はこんなにも泣き声ついで

なぜこの声はこんなにも辛そうに

なぜこの声は助けを求めているのか

瞬間、闇の中に光が生まれる。自分の中に温かい力が声を伴つて流れ込む。

ああ、『あなた』もそうなのか。なら…死にかけの俺だけど、お手伝いましょう。何ができるかわかりませんが、『女の子』を泣かせたままなんて嫌だからね。

そして、光に抱かれたまま俺は意識を失った。

第五話 田舎に泊まりつ

「ふああっ……開こ……」

心地良い感触と柔らかな暖かさに包まれ田を覚ます。田覚まし時計代わりの携帯アラームがならなかつたな、と不思議に思い辺りに意識を向け、ここが自分の部屋ではないことに気づいた。

「え、なに……！」

呟くよひにでた独り言に答えるかのように、その部屋の入り口の戸が開く。入ってきたのは、長い金の髪に西洋風の穏やかな表情の女性、年はよくわからないが自分の母よりも若く見える美人だった。ゆつたりとした白いローブを着ていると、まるで魔法使いのようだつた。

「ふふっ、ねはよひじります。よく眠れましたか？一応、傷は完治したと思ひのですけど」

こちらの様子を見た女性が話しかけてくる。流暢な日本語で話しかけられたことに戸惑う。いくらグローバルな時代とはいえ、まるで日本で育ったかのような発音。そして忘れてはならないのが、ここは自分の知らない土地であり、『プリン』のような化け物がいる世界であること。

「あ、あの、えっと」

なんと答えるべきかわからず焦つて出た意味をなさない言葉。命は助かつたらしく体に痛みもない。痛くありません、とでも答えるか

? 日本語でいいんだよな?

化け物のことを先に聞くべきか?

「えつと……あつ、」の服をびりしたんですか?」

見慣れない服を身に着けていたことに気づき聞いてしまつ。すると、その女性は「——」しながら答えてくれる。

「ああ、それは夫のよ。裸のままじゃ大変だろつから、治療が終わつたあとに着替えたのよ?」

「は、裸……?」

言われて思い出す。自分はこの土地に何も持たずに来て、服も例外でなかつた。少女を助けたときも、ゴブリンから逃げるときも、そして怪我を治してくれていた間もずっと裸だったのだ。急に恥ずかしくなつて赤面する。

「あら? その様子じゃわざと裸でいたわけじゃないみたいね

と女性は愉快そうに言つたあと、真面目な顔になる。

「困つてゐるなら何があつたか話してくれないかしら?」

急に尋ねられ、正直に話すべきか、それとも不審者扱いされない別の話をでつちあげるほうがよいのか悩む。受け入れてもらいやすいのは作り話だらう、化け物がいる世界だ。荒んだ世界なら山賊だつているに違ひない。身ぐるみはがされて逃げ出したことにすれば解決だ。ただし、今後無知が問題になり嘘がばれる可能性も十分にある。

などと考えていると、

「まあ、まずは食事にしようかしら。ちょうど一人が帰つてくる頃
合いね」

そういうつて部屋を出て行く。置いてけぼりにされ、現状把握に努め
ぼーっとしていると、

「ついてらっしゃい」

と声がかけられたのでいそいそと部屋を出る。その際田につくのは、
どれも非現代的な物の数々。金属製の物が見当たらないし、電気も
なさそうだなと思いながら先ほどの女性のあとを追いかける。廊下
に出て、次はどこに行けばよいのか左右を見ていると、ちょうど左
手奥の玄関らしき扉が開く。

「ただいま～おかあさん。あの人の様子はどう…う…一？」

テレビでしか見たことのない、俗に言つ金髪美少女が現れ、大きな
声で帰宅を告げると共にこちらを見て固まる。たつぱり三秒経つて
からダダッとこちらに駆け寄る。

「あ、あの。お怪我は大丈夫ですか？」

「う、うん。怪我はなんともないよ。大丈夫、大丈夫」

見知らぬ女の子から話しかけられて動搖したが、なんとか返事に詰
まらず答える。少女は安堵したように息をつき、家の奥側の扉に向
かい聞く。

「もひつおかあさん。目が覚めたら伝えに来ててくれる約束でしょ

「さつき起きたところよ。今から『」飯にするから手伝つてちょうだいね」

「はーい」

そんな会話が聞こえてくる。そういうばだいぶお腹が減つている。死んでからまだなにも食べていなかつたつけ。お呼ばれしたし食事にはありつけただけど、先のことを考えると気が重い。財産のない状態は死活問題だな……

「あの、何かお手伝いすることはあります?」

大したことはできないが形式的に聞いておく。配膳なら任せろーバリバリ、ヤッテ。

「病み上がりなんだし座つていてくださいな」

はい、初アクションは失敗しました。おとなしく席につくことになります。

木製のテーブルにつき椅子に座る。

する事がないため、先ほどの続きを考える。非常に親切にしてくれる人に嘘はつきたくない。手をさしのべてくれる人は味方だ、とよく考えるのでできれば正直に話したい。よくよく考えれば不審者甚だしい自分を助けてくれたのだし、変なことを言つても受け入れてくれるのではないか。よし、まずは世間話から始めよう。なんで日本語が通じるかも聞きたいし。

考えをまとめている間に食事の準備が整つたらしく、いい匂いが広まる。少女がテキパキと配膳をし、三人でテーブルを囲む。

『…いただきます』

「…いただきます」

並べられたサラダとスープ。一切れのパン。現代人にしたら物足りない食事だ。二人の様子を伺いつつ、味わって食べる。が、やはりというか味付けが薄い。コンソメもなければ、塩も少ないのか。昔は塩つて貴重品だったもんなあ。

一人の食べる早さを見て調整しつつ、同じタイミングで食べ終える。

『…いただけました』

揃つて発声。

「さて、それじゃあ自己紹介から始めるわね。」

突然、少女の母親がそう切り出した。

「私の名前はクレア。姓はアラベルよ。薬師を営んでるわ。その子の母親よ」

「私はアンナ。家の手伝いで薬師を目指してるので、さつきは助けてくださいありがとうございます」

助けた?なんのことかと考へると、納得した。ゴブリンに襲われていた少女か。

「いえ、どういたしまして」

死にかけたけど、助けられたなら恩人だ。お互いに迷惑をかけても互いに助け合えたならいいだろう。優しい気持ちになつていて、次はあなたの番よ、と促してくる。

「俺は」

あ、名前どうしよう。そのままにしていいのか。カタカナっぽくする必要あるのだろうか。やばい、何も思いつかない。

「俺は桐谷龍司といいます」

ああ、やつらまた。どう思われるのか見当もつかねえ。と後悔していると、

「やっぱ東方出身の方なのね」

とクレアさん。普通に受け入れられた。呆気に取られつい、

「え？ 日本あるんですか？」

「なにそれ？」

今度はアンナちゃん。え、日本じゃないのかよ。どんなひっかけだよ。

「残念だけど日本については聞いたことがないわ。私の知る東方の国はゲッ！ わ。むして、名前だけじゃなく他にもいろいろ話してもうべるわよね？」

早速墓穴を掘つたらしい。残された選択肢は一つになつた。予定通りありのまま話すことにしてしまう。

「自分でもよくわかりませんが、俺はここから遠く離れた場所から来ました。ここでの常識や知識が通じないほど遠くです。なぜか言語は共通のようですが」

「ふ～む、もしかして裸なのが当たり前だつたりするのかい？」

「いやそれは違いますし。」

そんな野蛮人にはなりたくない。

「遠くつてゲッ ハウのことじやないの？」

「ゲッ ハウなんて国は知らないし、俺の国は一ホンつていうんだ」

「一ホンなんて国はやつぱり聞いたことがないし、やつなるとせりに海か山を越えた未開拓の方かしら?」

「きっとそれも違うと思います。理由がいくつかありますけど、聞いてもらひますか?」

決定打になるであろう事実を述べるため前置きを置く。

「ええ、じつぞ」

「なになに～?」

「えっと、まあここへくる理由になつたあの化け物のことなんですが」

「ああ、魔物のことね。ゴブリンに襲われたって聞いたわ」

ああゴブリンって名称まで同じなんだ。

「うう…」

アンナちゃんは思い出したのか嫌そうな顔をした。

「……実は、俺が知る限りあんなやつは、魔物は、存在しませんでした」

「魔物がいない…？」

「それに生活の様子が異なります。金属製のものが見当たらない、簡潔に言えば……文化、特に技術分野に大きな差があります」

「ここまで言えば、何を言わんとしているか大体伝わっただろう。

「それはつまり……」

「はい、俺は」

「伝説の古代人ね！」

「異世か…ええっ！？」

伝わらなかつた。なんだよ古代人つて。むしろ現代人だよ。

「えつとどういうことでしきう、その…古代人つて」

クレアさんは目を輝かしている。ふと横を見るとアンナちゃんもだ。なんだよ古代人つて。むしろ珍獣だよ。

「ええっとね、古いお話があるのよ。この世界の歴史にはね、遙か昔、神々といいくつもの種族が共に暮らし平和を謳歌した時代があつたとされてるのよ」

「街の神官様が時々お話してくれるよね」

「え、神様いるのかよ。生き返った時点でファンタジーに足を踏み入れたとは思つたけど、どんどんスケールが大きくなるな……」

「そうね。それで、その頃は魔物もいなくて、世界は今よりもっと繁栄してたの。きっと家も服も食べ物も医療も、いいえ、何もかもが優れていたはずよ」

だからあなたは古代人よ、じつちやんの名に賭けて。残念違います、わたくし神様なんて見たことありませんし、宗教は人生における世渡り論だと思つてました。

「あー多分いや間違いなく違うと思います」

声小さく否定してみる。ガーンとショックを受けて落ち込む一人。悪いけど真実はいつも一つなんだ。誤解を解くついでに伝説とやらの続きを聞いてみるか。

「それで、どうして魔物なんかができるようになつたんですかね？神様がいなくなつちゃつたとか？」

「適当なことを言つてみると、クレアさんが復活し答えてくれる。

「いい質問ね。確かに平和な世界だつたんだけど、ある事件が起き

たのよね

「事件？」

「そ。一番偉い神様の双子の娘。ルナとアウラっていうんだけど、なぜか喧嘩が始まつて、やがて大きな争いが始まるの。ルナが光を、アウラが闇をかたどつて、他の神々も思い思ひのほうに味方してね」

「なんとも壮大な姉妹喧嘩ですね……」

「ふふつ。それでね、闇の女神になつたアウラは、世界に魔物を解き放つの。世界は荒れに荒れたわ。だけど、光の女神になつたルナが、闇を封じ込めて魔物は数を減らした。ただ争い傷ついた神々は一つの陣営に別れてこの地を去つた。今日は雲もないし夜になれば見えるかもしれないわね」

長かつたおとぎ話（もしかしたら実際の話かもしれないけど）が終わり、気づいたらアンナちゃんがテーブルに突つ伏して眠つていた。

「あらあらこの子ったら。リュウジさん、悪いけど寝室まで運んでくれないかしら？お話はまた明日ね」

などと仰います。……俺が運んでいいのだろうか。クレアさんに尋ねると、

「あら～、か弱い私に運ばせる気？」

強かな女性に印象修正したが、反論できないため、「ごめんねと寝ているアンナちゃんに謝り体を持ち上げる。思ったよりも軽く、これなら余裕で運べそうだ。

「その子の部屋は一階に上がつて一番手前よ。しつかりね」

やけに一ノ一ノしてくる。俺みたいなイケメンでもない男に触られて、迷惑するだろ？し、ちつとも運んでしまおう。部屋について戸を開けようとしたとき、階下から、

「一人で寂しかつたら一緒に寝てもいいわよ～」

何も聞こえなかつたことにしよう。

アンナちゃんを部屋に寝かし下に降りると、ちよび玄関の扉が開く。

「母ちゃん、今帰つたぞ～」

筋肉質な男性が入つてくる。特徴といえば薄いことだが、個人の名譽のため言及はさける。先ほどの発言からしてクレアさんの旦那さんなのだろう。

「おお、お客人。元気そうじやないか」

「ああえつと、お陰様で」

「いやー良かつた良かつた。娘の恩人を見殺しにしたとあれば、村中の笑い者、母ちゃんもブチ切れただろ？からな。ガッハッハ」

見殺し…？見殺しといつと危険なとき近くにいたつてことだよな？つまり……

「 もしかして「ハコン」をどうにかして貰えたりします?」

「ねつ、危機一発ついせつだな。敵の治療せいでここにいるがために、せたがよ。」

おお、化け物を倒せる英雄の「」帰還じゃー！

「それがどうしたんですか！ ありがとうございます」

「なに、気にするな。娘の恩に報いただけさ」

いいなあ憧れちゃうなあ、強い男つてやつだな。

「あらおかえり。自警団の方は落ち着いたの？」

「おう、魔物に備えて見回りと警備は万全。武器の手入れも忘れず
にやらせといたぜ」

「そつ、じ」苦勞様。アンはもう寝ちゃつてるから静かにね

「むつ。てえと酒盛りは無理か。せっかく村長齋して一本頂いてきたのによ」

「明日になさい。そうそう、これが私の旦那よ。ほら挨拶しな」

「いけねえ、忘れてたな。俺はグラン」

夫婦の会話にすっかり気をとられていて反応に遅れた。

「……あ、俺は桐谷龍司といいます」

「せうか、リュウジ。何もないところがゆっくつしていい」

「そうだ、すっかり忘れていた。俺にまじめに置いておいてもりの理由はないのだ。傷も治り服ももらつた。いつまでもゆっくつしてはいられない。今後を考えないと。」

「あの、でもそんなお世話になることは……」

「心残りだが、すぐにして出で行くのが礼儀だと思ったが、予想に反した言葉に引き留められる。」

「ハッ何をいってんだ。そんなの気にしなくていいんだよ。家主の俺がいっていえば問題ねえだろ?」

「でもアンナちゃんを助けた分はもう頂いてます、傷を治してもらって服も貸していただいて……」

「あら、遠慮しちゃつてるのね。うーんそうねえ。こう考えてはどうかしら。あなたの傷を治したのは、娘を助けるためのもの。それ自体は等価かもしれないけど、まだ私たちはあなたに報いなければならぬものがあるの。アンナを助けてくれたその勇気に対してもうね」

と最後にウイングまでつけて言われて、氣恥ずかしくなつて何も言えない。

「せうこつことだ。俺たちの気が済むまでゆっくつしてこくしかなれやうだな」

グランさんも豪快に笑いながら同意してくれる。自分の勇気をほめられたことなんて今まであつただろうか。何もない自分が異世界で、初めて認められた気がして、嬉しくてちょっとびり恥ずかしくて、気づいたら両頭が熱くなっていた。

「あ、ありがとうございます」

止まらなくて泣き声になってしまったが、二人は「気にすんな」「泣いてスッキリしな」と声をかけてくれた。

こうして異世界初日の夜は更けていった。使わせてもらつた部屋から見える月を眺めながら、今日一日を思い出し、気づいたら眠ってしまっていた。

第五・五話 田舎に泊まる・裏

side : アンナ

彼の応急治療が済んで、すぐに家まで運ぶ。家にはおかあさんがいる。治癒の腕前も設備もあるし、心配はない。

ただ気がかりなことがあって……

私が彼に助けられたとき、逃げるのに必死だったし彼は精霊様だと思っていた。私たちが彼を助けたとき、傷の手当てに集中していて他に気をやれなかつた。でも今は落ち着いて彼を観察できる。そして、彼は同じ人間で、服を身に着けてないことを意識してしまつた。

肌は綺麗で、傷はないし日に焼けてもない。おとうさんとは何もかもが正反対に見える。髪もよく手入れされていて羨ましい。異国の人つてこれが普通なのかな……

後頭部の怪我だったからうつ伏せのままだつたんだけど、手当てして村に運ぼうとしたときが問題だつた。さすがに全裸だと……その私が困つているのに気づいて、おとうさんが上着を脱いで彼の腰に巻きつけた。その際、

「アンナも気にする年頃になつたか」

なんて寂しそうにいつてた気がする。

村についたら、おとうさんが見張りの人たちに少し話をしていた。どうやら自警団のみんなを集めて話し合いをするらしい。家の診療用のベッドに寝かせた後、

「後は任せた」

つて、おかあさんと私に言つて集会所に向かつていった。

おかあさんに事情を説明して、治療に参加させでもう。薬草をすり潰し染み込ませた布を、打撲の痕があるところに巻いていく。頭部の傷には信仰呪文を唱えるみたい。対象を限定することで効果を高めることができるらしい。私が生まれる以前は、おとうさんと冒険者をしていたおかあさんは、魔法が使える。

『我が手をかざす、彼の人の傷を癒せ・キュアウーンズ』

薬草の効果と癒しの魔法で、もう完治に近い状態まで回復した。あとは経過を見るだけなんだけど、ちょうどおとうさんが帰ってきた。ゴブリンを見た私の話を聞きたいらしい。ほんとはずっと彼の看病をしていたいんだけど仕方ない。彼が目覚めたらすぐ知らせてね、とおかあさんにお願いして、おとうさんと出掛ける。自警団のみんなに話をして、一人で薬草を取りに行かないことを約束し家に戻る。おとうさんは、みんなのリーダーとして見回りの指示や村の防備の確認のため残るらしい。

家のドアを開けると、心配していた相手と目が合つた。いつの間にか見慣れた服も着ている。ビックリしちゃつたけど、すぐに状態を確認する。本当に大丈夫みたい。そのあとは、三人でご飯を食べ、初めて彼の名前を聞いた。私の知らない国の人らしい。名前の順番も逆で、私たちの流儀だとリュウジ・キリタニ。忘れないようにしなきやね。

そうしていろいろな話をしていると、おかあさんの悪い癖が始まった。

知識に自信があるからか、人に教え始めると止まらないの。小さい頃からよく聞かされた伝承だったから、だんだんと眠くなつて……

気づいたら次の日の朝だった。そのあと、リュウジさんが私を部屋まで連んでくれたと知つて、ちょっと嬉しかった。

第六話 初めてのお使い（前書き）

だれにも～ないしょで～お・で・か・けなのよ

第六話 初めてのお使い

スッキリと田が覚めた。昨日は死にかけたといつて、以前よりもむしろ体調がよくなっている気がする。固いベッドから抜け出し、安いボロ靴を履く。服とついでにこれも頂いた。窓から外を見て、太陽の位置から大体8時くらいかなあとぼんやりと考える。この世界で時間を確認したり、お金を稼いだり、ようは生きていくための常識を得るにはどうしたらいいのだろう。普通に考えて、この一家にお世話をなりながら、一般常識を教えてもらうのが最善だろうか。

部屋でゴロゴロしているわけにもいかないし、今後の相談をしようと夫妻に会って部屋を出る。部屋の向かいにはアンナちゃんの部屋があるが、もう起きて薬師として手伝いにいつてるだらつ。階段を下り居間を抜け、作業場に向かう。薬の匂いが広がる中、薬品を調合しているクレアさんを見つける。

「おはようございます」

「あい、おはよう。よく来れました?」

「はー、体調の方も、前より良くなつたくらいで」

「それは良かったわ。今アンナと夫が薬の材料を取りに出掛けてるから手が放せないの」

「あ、いいんです。何か手伝つことがあるか聞きたいだけですから」

「あ、あります。ん~えつと、薪割りつてできる?」

「…経験がないので判断しかねます」

「慣れないうちは危ないから、薪割りはダメね。じゃあ水汲みに行つてもらおうかしら」

「水汲みといつと、井戸ですか？」

「ここは近くに澄んだ小川が流れてるからそちらに行つてもううわ。場所は村の正面から見えるくらいだし大丈夫でしょう」

つまり以前見つけた滝から続いてるのかな。あれは確かに冷たくて澄んだ水だった。

「わかりましたー!さっそく行ってきます」

「家の裏手に水瓶と運搬用の小さめの桶があるから」

「ラジヤー!」

初めてのお使い（異世界版）に気合いが入った俺は、勢いよく駆け出した。クレアさんが驚いた顔をしているにも気付かずに。

「桶と聞いて、風呂のやつを思い浮かべても悪くないよな……」

予想より大きな水瓶と予想より遙かに大きな桶が、俺の目の前に存在している。まあ仕方ないか、多少きつてもお仕事なんだし。まだ軽い桶をもつて村の正門を目指す。木製の家が建ち並ぶ穏やかな村だ。時折小さな子供たちが遊んでいたり、農作業に精をだす大人

を見かける。正門らしき場所を見つけると、一人の武装した男性が目に入る。簡単な防具と手には槍を持っている。防具は皮製なのか、ゲームでしか連想できないが。

向こうから元気付きたくて口を開いた瞬間、

「おお昨日の不審者じゃないか」

「ええっーーっ！」

いきなりの不審者扱いに度肝を抜かれる。どうしたことかとわたわたしていると、

「先輩ダメですよ。あんまりからかっちゃ。俺は構いませんが、旦那にぶつ飛ばされますよ」

「冗談に決まってるじゃねえか……。俺は軽く緊張をほぐしてやろうとしただな」

「はいはー」

どうやら軽いジョークらしい。村を追い出されたフリガ格かと思つて焦つたぜ……

「えっと、初めまして。君のことは聞いてるよ、アンナちゃんを助けたんだって」

「もしくは裸で行き倒れていた病人つてな」

ああ、確かに裸で頭に怪我して運ばれてたなら、不審者に見えるわ。

今の境遇が非常に恵まれて「」とに改めて感謝しよう。

「まあ田那のとこに世話をなるらしげ、血口紹介しつくか。俺は
サント、いの村の自警団の一員で家は、ほらすぐそこだ。んでこいつ
がトラン。はい血口紹介おわり」

「……って俺にはせてもらいえないと改めて感謝しよ。

「名前だけ分かればいいだらう別に」

仲のよいコンビなのだらうか。息があつたいい漫才師になりそ
うだなあ。

「はは、ええと俺は桐谷龍司です。リュウジが名前なのでちりで
呼んでください」

「へえ、髪の色が真っ黒だから珍しいと思つたが、姓名逆と。東方
出身の方だったか」

「ええ、訳あつてちりぢりになりますが

「そつか。深くは聞かねえ。あんた悪いやつには見えないしな。水
汲みなら、ほら向いに見えるだらう。いじで見ててやるから安心
していつてこい」

「はい、ありがとうございます。魔物に襲われたら助けて下さいね
」
笑いながら任せると喜んでくれるサントさん。さすが水を汲んで
います。

「ではまたあとで」

「おひ

別れを告げ、桶を持ち直す。川まで50mくらいか。一分もかかるず水辺に到着し桶を川に浸す。一度水を大量に入れたら持ち上げるのにも苦労したため、半分程度で様子を見る。これでだいたい20kgくらいか。

「お、重いけどまだ平気かな」

とりあえず距離は近いのだから足りない分は往復するとしよう。ヨイシヨヨイシヨと門に戻る。頑張れよ、と笑いながら励ましをもらいくそのまま家まで向かう。大きいほうの水瓶に中身を注ぎ込み、一息つく。そういえばどれくらい必要か聞くのを忘れていたな。ちょっと聞いてくるか。

「すいませ～ん、クレアさん。今大丈夫ですか？」

家の中に声をかける。少しして返事があつたので家に入る。

「ちょうどキリがいいから休憩にしたわ。水汲みはどうだった？」

「問題ありませんでした。門の見張りをしてる方もいい人達でしたし」

「そつ良かったわ。じゃあ昨日のお話の続きをしましょ」

「え、あの、まだ水汲みが」

「いいのいいの。急ぎじゃないから。一回分あれば昼食の用意は大丈夫よ」

強引に引き留められてしまった。またありがたいO HANASHIが始まるのか……

「それで昨日の続きをとつのは？」

クレアさんはすでに気合に十分でスタンバつていてる。

「昨日は神々が消えた話までしたわね？」

「はい」

「そして向かいつたさきが空に見える双子月なのよ」

なるほど、だから夜に見えると言っていたのか。しかし、

「月が一つあるんですね……」

新たな常識にカルチャーショックを受ける。しかも月にはウサギではなく神様が住んでいるのか……

「そうよ。で、これからが本題なんだけど、神々が地上から去ったときに他にも失われたものがあるの」

失われたものか。なんだろう。

「それって何なんですか？」

「『言語』よ。それもただの言語じゃなく神々が使っていた言葉。その失われた言語は光の女神ルナを表す月語と呼ばれているわ」

なるほど、ゲームでよくいう古代 語ってやつか。じゃあ今話してゐる日本語はなんなんだろう?聞いてみるか。

「それじゃ、今使われている言葉は?」

クレアさんは質問を受け、さらに日が輝く。ああ黙つて聞いてたほうが良かつたかな。でも一般常識を知るいい機会なのか。

「ふふふ。そう、今話している言語はその時代、神々と縁の薄かつたとされる東方の国、ゲッコウを発祥とする言葉なの。月語が人々の記憶から薄れ、代わりに必要とされたために世界中に広まり、今では共通語になつたわ。そして、月語と共通語の間にもう一つ。月語を辛うじて記憶に留めた人達によつて作られたのがルーン語。私たちの名前を表したり、魔法を使うために利用されたりするわ」

なるほどなあ、日本語かと思つたけどやはり似て非なる言語なのか。ゲッコウってところは日本みたいな文化なのかもしれないな。そうか、どうか。月語とルーン語と共通語か……名前を表すとすると、アンナ、クレア、グラン、サント、トラン……カタカナつてことなのか。ルーン語もわかりやすくていいや、魔法にも使えるしなあ。

……魔法だと!?

「クレアさん!」

「ひゃー!」

勢い余つて身を乗り出す。驚かせてしまつたようだ。

「魔法が使えるって本当に！？」

「え、ええ使えるわ。二二つかその二二つって話すつもつだったのよ」

「ん? どんな話なんですか?」

「リハウジくん、出掛ける時に『ラジヤー』なんていつてたじやない？」

「確かに言つたような……」

「あれ、共通語じゃなくてルーン語だよ」

「
^
?」

どういうことだ。共通語があつて神様言語の月語があつて、その間にルーン語があるんだよな。この場合変換すると

共通語・日本語（平仮名・漢字）、ルーン語・カタカナ、つまりその先は

英語・月語

なるほど、この世界は英語が落ちぶれて日本語の時代が来たのか。元の世界と似た言語が主力なのは嬉しいが、世界中で日本語が通じるつてのが日本人として一番嬉しいな。

「あのクレアさん、ルーン語と月語って大きな違いがあるんでしょうか？」

英語をカタカナで読めるようにしただけならあまり変わらない気がするのだが。

「大きな違いどころか全くの別物よー！ルーン語が魔法に使われるのは話したわね？魔法についても知らないみたいだから教えてあげるけど、神々がいたころの魔法は今よりも遙かに優れていて、その理由が月語による魔法発動率なのよ」

そろそろ置いてけぼり感がしてきた。魔法があるよーと言われても使い方もわからなければ仕組みもわからない。

「すいません…魔法について全くわからないのでもっと簡単なところからお願ひします……」

「コホン…魔法とは生命がもつ魔力を媒介に世界へと意志を伝え、思いのまま世界を改变する技術、をいうわ。簡単にいえば魔力を使って望んだ効力を得るということね」

「先生、魔法が使えれば何でもできるんですか？」

「（先生…いい響きね）本質はそうなんだけど、そのためには方法に問題があります。それが先ほどの魔法発動率です。私たちの意志を世界に伝える際、ちゃんと伝わらないことには魔法は使えません。最も認識されやすいのが月語、ついでルーン語、最後に共通語ですが、月語とルーン語には大きな差があり、また共通語も発動補助程度の効力しか得られません」

「つまりルーン語で魔法を発動させるけど共通語はおまけなのかな？」

「そう考えるのが普通だけど、共通語には他の使い方があるのよ」

「他の使い方？」

「言語は世界に対する魔法発動率に関わるけど、共通語はさらにつける意志をより明確にするために使われる。あなたの怪我を治したときもそうだったのよ」

傷がすっかりなくなつてたのは魔法のおかげだつたのか……

「その魔法というのが『クレアさん、急患だーー』……ちゅうじいわね。実際に見せてあげましょ」

玄関に大声をあげた人と、その人に支えられながら苦しそうにしている男性がいる。

「いったいどうしたの！？」

クレアさんが駆け寄る。

「村の外壁の補強をしてたんだが、老朽化してたのか、材木ごと崩れできやがって、脚を挟まれたんだ」

そりいつて怪我をしている男性のズボンの裾を捲ると、赤黒く変色した肌が見えた。

「ひどい内出血ね。骨も折れてるかもしない」

「ぐつ…こつ…ん」

「つめき声をあげる男性。

「リュウジくん、あなたは知らないかもしないけど魔法というのは私たちの生活にとつてとても重要なものの……。ひどい傷には薬師の腕をもつてしても対応できないこともあるわ。そして、魔力は無限ではないの。いまから使いつからよく見てるのよ」

クレアさんが男性の足に向かつて手をかざす。そして力ある言葉が紡がれるのを目撃する。

『我が手をかざす、彼の人の傷を癒し給え・キュアウーンズ』

呪文とともにクレアさんの手が淡く発光し、男性の怪我に変化が表れる。まず赤黒い皮膚がみるみる健康な状態へ戻っていく。それと共に呼吸も落着き、怪我が確かに治っているのだとわかる。

「これでいいかしら。もう痛みはない?」

「はい、大丈夫っす。どうもありがとうございました、クレアさん」

「お代は自警団の経費に上乗せしておくわね~」

礼を言つて帰つていいく一人を見送つて、クレアさんがこちらに向き直る。

「どうだつたかしら?初めてみたんでしょ魔法」

「ええ、凄かつたです。正直気持ち悪いくらいです……」

映像の逆再生をみて凄いなーと思つことはあるが、それが現実に体感できるところで行われると得体のしれない恐怖感もある。

「なるほど、面白い感想ね。今見せたのが信仰呪文よ。傷を癒す目的を持つた呪文がキュアウーンズなんだけど、効果範囲を限定することで必要魔力をコントロールすることができるわ」

「今のは手が光っていましたけど、共通語の『我が手をかざす』ってのが意志に反映されたんですか？」

「その通り。個体全部に作用するのが普通なんだけど、あなたのときや今回みたいに、一部分がひどい怪我を負ったときはこいつやって魔力の節約をしてるの」

「そうだったんですね」

魔法だけで全部治してるわけじゃないのか。それで薬師の技術も必要なんだなあ。だけど、今までまた聞きたいことができたな。

「えっと、また知らない言葉がてきたんですけど、信仰呪文ってなんですか？魔術を使う呪文を信仰呪文っていうんでしょ？」

「半分正解、半分外れね。信仰呪文のほかに、魔術呪文があるのよ。その違いについても知りたい？」

知りたいかと聞かれて、考える。無用の知識なら別に聞かずとも問題ない。しかし、重要な点がひとつある。

「俺も魔法が使えるんでしょうか？だとしたら知りておきたいです」

「クラアさんはいかがをじつとみて答える。

「魔力がある人なら誰でも魔法を使うことは可能よ。そして人に限らず全ての生命は魔力を持つて生まれてくる。だけど、リュウジくんは魔法を知らなかつた。つまり魔法を使えない、使う文化ではないところから来たのよね？」

「そのとおりだ。俺はこの世界で生を受けていない。生まれは地球で、そこには魔法なんてなかつた。いや、確かに怪しげな儀式とか伝承とかはあつたけど一般社会にはありえなかつた。そして、意志を世界に伝えるなんて考えはどこにも存在しなかつた。……おそらく、世界の仕組み自体が違うのだろう。そう考へると、俺は魔力を持つていない。魔法は使えない。」

「昨日、神様のお話を聞いたときうやむやになつちやつたけど、たぶん俺はこの世界とは別のところから来ました。ちゃんと言つときますけど古代人じゃないですからね」

だから残念そうな顔をしないでください。このカミングアウトだって結構重要なことなんですから。

「俺の世界は魔法とは無縁とまでは言わないけど、あくまで空想の產物で、実際にはありえないものでした。だから、その世界で生まれた俺には魔力なんてないと思います」

「そうね、そう考へるのが妥当かもしれないわ。だけど、可能性に賭けてみるのも悪くないはずよ」

「なにか方法があるんでしょうか？」

「まあ試してみるのが早いわね」

「それはまたなんとも」

しかし、これで魔法が使えるようならこの世界でやつていく足掛かりになるかもしない。いや、なつてもらわないと困る。そう思つた矢先、

「だけど、今のあなたには魔法を教えることができないの。正確には権利を持つていないとこりね」

いきなり問題が発覚した。

「えー、それはどういづ……」

クレアさんは困った表情を浮かべ、じつ続ける。

「一番の理由は人材確保、ついで安全保障といったところかしさ。よつは魔法を使える者を必要とする組織があるのよ」

「その組織つて一体……？」

そして俺は、これからこの世界の争いに足を踏み入れる、最初の入り口の名前を知ることになる。

『『神に守られぬ残酷な世界の守り手（God - Unassisted - II - Land - Defender）』、通称ギルドよ

第七話 クレア先生のパーフェクト教室（前書き）

世界設定の話が続きます。細かい名称は未定ゆえ、読む上で適当に覚えてもらえば十分です。たぶん私もうりおぼえ設定になります。

第七話 クレア先生のパーフェクト教室

「ギルド……」

「ギルド、中世において商人達が自分達の利益を確保するために発足した団体を指すんだったかな。

「ギルドとはその目的から冒険者ギルドとも呼ばれ、その下部組織として戦士ギルド、盗賊ギルド、そして問題の魔術ギルドがあるわ。そして目的は、神の直接的な加護が届かない世界で、魔物から生命を守ること」

「そうか、この世界では利益を確保する以前に自分達の命を守る」と
が重要なんだ……

「リュウジくんが魔法を使うためには、魔術ギルドに加わり、承認されることが必要になるわ」

「わざわざそういうダメなんですか？」

「まあ、はぐれ魔法使いなんてのもいるけど、登録をする理由が魔物との戦いに備えるためというのが大きいわ。急な要請があつたときに一人でも多く力がある人が必要なのよ。そのためギルド側は情報を探しておく一環として、特殊な技能に優れた人材を発掘する意味も兼ねて、魔法を志す人には登録を義務付けているの。」

「そりだつたんですか……」

「まあギルドの一員になれば、生活していく上である程度融通が利

くよりになるし、組織の目的も理にかなつたものだから登録する」と自体は悪くないわ。私と夫もギルドに登録しているし……」

そういうて懐から免許証サイズの金属のプレートを取り出して見せてくれる。

「ほら、これがギルドに登録した者に『えられる証明書、ギルドカード」と呼ばれてるわ。これは自身の身分を証明することもできるし、ギルド関連の組織を利用する際にも役立つわ」

「じゃあ、クレアさんもグランさんも依頼を受けて魔物を倒してるんですか？」

「私たちも昔は冒険者として戦っていたわ。夫が戦士、私は魔法使いとしてロンビを組んでね。アンナが生まれてからは、母の跡を継いでこの村で薬師を始めたの。今じゃもうこの村の一員だから、冒険者に戻ることはないわね」

クレアさんはこの村出身で、冒険者の頃に夫であるグランさんと知り合い、寿退社みたいな形で故郷に戻ってきたらしい。冒険者としてはぼちぼちの実力で、この村の守護という理由で、ギルドから招集がかかつたりはしないそうだ。つまり、力を示して有名になればなるほど、人々の期待と共に義務と責任がついてまわるのだろう。

「ギルドについては分かったかしら？あとはあなたの意思に任せるわ」

ギルドに登録すれば、戦いの技術を学び、命をかけた戦いに加わることになるだろ？もしくは、どこかの村に所属し商いを始めるか、誰かに雇つてもらうのが生きていく糧を得る手段になるはずだ。ギ

ルドに入加入し、魔物を倒して富と名声を得るのは憧れるがリスクとリターンを考えないと。絶対条件は自分の命を守ること。逆にいえ、そのための自衛手段を確保することも必要になつてくる。そして、手っ取り早く生き残る手段を得るにはギルドで魔法や戦闘の基礎を学び、死なない程度に鍛えてもらうことだ。魔法については、魔力がそもそもどうなつているのか分からぬが、体力面で普通より劣っているのは漠然と分かる。なんせ生きていた世界の事情が異なるのだ。わかりやすくいえば、子供の頃から筋トレをするのが当たり前の人達の中に飛び込んだようなものだし。

いつまでもこの一家のお世話になるわけにもいかないし、何か自分に合った働き口が見つからない限りはギルドに登録することを目指そう。そう決心して、では肝心のギルドはどこにあるのか、という疑問がわく。

「クレアさん、俺、とりあえずギルドに登録するだけしてみます。魔法にも興味があるし、自分に何ができるかもわからないから。それで、ギルドに登録するにはどこに行けばいいんでしょうか？」

俺がギルドに参加する意思を聞いたクレアさんも、それが今の最善だと思っていたのか安堵の表情を浮かべる。

「ギルドは大きな街や村に行けば、だいたいは支部が設けられているわ。あいにくこの村はないけどね。最寄りのギルドなら村を出て、街道から東にあるバルワットという隣町に行けばいいわ」

そういえば地理については東の果てに日本ぽい国があることしか知らないけど、一人の人間の行動範囲なんてたかが知れてるし必要になれば聞けばいいか。

「その隣町にはどれくらいかかります?」

「早朝に出発してちょうど昼頃って感じね。仮にすぐ出発したくても、明日まで待つてね。まだまだ教えないといけないことがあるし、アンナも寂しがるだろ?」

「わかりました。まだまだ」教授よろしくお願ひします

「そうと決まれば仕事は休みね。さっそく続きを教えるわよ」
さらなるヒートアップを遂げるクレアさん。薬師の仕事は大丈夫なのか。

「あの、さつき休憩だつて言つてしませんでしたか?」

「大丈夫大丈夫。町に卸す分はできるし、急患でもこない限り問題ないわ」

「さいですか……」

クレア講師による一般常識講座の途中、アンナちゃんが帰宅した。グランさんはまた自警団の集まりに向かつたようだ。夕方まで続けられた結果、さしあたつて生活に困らないだけの知識を得ることができた。お金の数え方、国家及び都市の関係、魔物による治安の影響などといった内容だ。戦う上で重要なことがあるらしいが、それはギルドで直接聞いてこいとのこと。

順序立てて説明された内容はこのようなものだった。まず今いる場所について。ここは、大陸の東部で国家体制は共和国の形で、明確に権力は存在しない。大きな都市は自治領で、周辺の村と互いに協

力関係にある。国会のない日本のような状態かな。東海岸の港からは離島であるゲッコウに行けるのだが、船が魔物に沈められるかどうか運任せのため、交流が難しいようだ。そのほかにも、南部には古代に強大な魔物を打ち倒した英雄を王とした王国が、西部には小国を併合した帝国が、そして北部には亞人の国家が存在するらしい。

お金についてだがギルドは全ての権力に対し距離をおくため、ギルドが主体に共通貨幣を生産している。そのため国ごとに貨幣が変化することはないが、国は一種類の名誉硬貨を作成し、それはギルドで一般貨幣に交換できる。貨幣の種類は、金貨、銀貨、銅貨が存在し、金貨が一万円、銀貨が千円、銅貨は十円程度の価値を表している。価値比率は金：銀：銅 = 1000 : 100 : 1となる。先ほど

の名誉硬貨は金貨の上の価値になるらしい。

そして魔物について。発生原因はよく分かっていないが、おおよそ無尽蔵に発生しているらしい。また、その死骸は利用できるものも多く、ギルドでは冒険者への依頼で討伐、護衛、探索、採取などを通じて、より安全な世界を目指している。古代遺産の優れたアイテムも存在し、単に魔物を倒すだけがギルドの仕事ではないところが重要だ。

グランさんが帰宅し、一家全員プラス俺で夕飯を食べる。必要な情報はあらかた集まつたわけだし、明日にでも隣町に向かうことをみんなに話す。クレアさんには事前に話してあつたし、グランさんも事情がわかっているのか了承してくれた。だがアンナちゃんはこちらをじーっと睨みつけたまま何も言つてくれない。そして、そのまま自室に戻ってしまった。なぜに怒らせてしまったかわからず困ってしまい、クレアさんに助けを求める。

「あの、俺なにか怒らせることじてました？」

グランさんとクレアさんは笑いながら、

「まあ寂しがつてゐるんだろうつよ」

「やうひね。お兄ちゃんができたと思つたのに急いで家を出て行くなんて言われたらうね」

「あ……それは考えてませんでした」

日本でも親戚の子供達に会つたときも同じようなことが何度かあつたのを思い出した。まさかアンナちゃんにお兄ちゃん認定されたことには気が付かなかつたが。

「ちよつと話してきます」

一階に上がり、アンナちゃんの部屋の前に立つ。

「アンナちゃん聞こえる?」

「……」

返事はないが、ちゃんと聞こえてこるものだ。

「えつと……急にあんなこと言つて」めん。だけど、お別れなんてことはないんだよ。この家のみんなは俺の命の恩人だし、これからもお世話をなるかもしねり。もしギルドに行つて一人でやつていけるようになつても、忘れずに顔を出すよ」

残念ながら反応はない。あとせつとしどおへべきかと思つて、そのまま自分の部屋に戻る。明日には機嫌直してくれれば助かるんだけどな……

第八話 旅立ちの日

side : アンナ

今日は朝からおとうさんと薬草集めに出掛けている。秘密の場所も危険だから、一人でいけなくなつちやつたからおとうさんに付いてきてもらつ。

森に深く入らないように、安全を確認しながら自生する薬草を採取してまわる。

おかあさんは家で調合作業をしてるから、リコウジさんの様子を見るようにお願いした。

やけにおかあさんの機嫌が良かつたので、どうしたのか聞いたら、「家族が増えたみたいで嬉しい」んだつて。

そしたら、私のお兄ちゃんになるのかな。

一人っ子だった私はお兄ちゃんがどんな存在かわからないけど、あの優しくて私を助けてくれた人がお兄ちゃんになるのは、とても嬉しい。

一緒に遊んだり、勉強したり、また私を助けてくれるかもしれない。それに、彼の近くにいるとなんだか気持ちが安らぐのだ。まるでおかあさんみたいな優しい存在に包まれているような。

家に帰ると、昨日みたいにおかあさんが彼にいろいろ話をしていた。やつぱり当たり前のことを知らないみたいで、お金のこととか物の値段を聞いたりしてた。

昨日、遠くから来たつていってたから、すぐいなくなつちやわないか心配だつたけど、いろいろ勉強してるつてことはきっと、ずっとここにいることにしたんだよね。

それじゃあ、明日から『お兄ちゃん』って呼んでみよう。

驚くかな？喜ぶかな？できれば嫌がられないといいな。

だけどその夜、思いがけないことになつた。

お兄ちゃんはここをでて、隣町にこへつて言ひ出した。

私たちの家をでて生活していくよ、ギルドに向かうんだって

……

私は何も言えず、ただじつとお兄ちゃんの顔を見ていたんだけど、泣きそうになるのが我慢できなくて急いで部屋に駆け込んだ。

そしたら、お兄ちゃんが追いかけてきてドア越しに声をかけてくれた。

これはお別れじゃない、いつでも会える。

わかってる、わかってるけど、なんだか胸のもやもやが取れない。別に離れたつてお兄ちゃんはお兄ちゃんだ。私を助けてくれて、死にかけて、それでも私を大切してくれる。

そして思い出した。お兄ちゃんが怪我をしたとき、私が何を思ったか。

あのとき私は……

「おはよおはよ」

居間にこくと、クレアさんがグランさんに弁当を持たせてこないとひるだつた。

「おはよおはよ。俺はこれから出るから見送りできなくてすまんな

「こえ、おはよなさいなでくだせこ」

村の近くに魔物が出たせいで、安全が確保されるまでは住しこりし

い。

「あの子、今日はまだ起きてこなこのよ。拗ねてないでお見送りくらこしてあげねばいいのに……」

「昨日のつけに、伝えたいことは言つておきました。きっと笑つて見送つてくれますよ」

やれやれといった感じのクレアさんだが、すぐに本題に戻る。「さて、出発にあたつてお願ひがあるわ。バールワットには馴染みの薬剤店があつて商品を卸しているのだけど、注文を受けてる分を届けて欲しいの」

そういうて共通語（俺にとつて日本語）が書かれた紙と、ナップサック程度の袋を渡してくれる。

「構いませんがこの紙は？」

「注文書よ、その紙と袋を渡せば報酬が貰えるわ」

「分かりました。ギルドに向かつた後、お返しにきます」

半日かかる距離らしいが恩人からの頼みを断る理由にはならない。体力が心配だが最悪お金借りて次の日に帰ろう、と考えていると、

「いいのよ、急がなくとも。家計には余裕があるし、リュウジくんの好きなときにまたこの村に来たときで」

「それって……」

「どこまでやれるか頑張ってみなさい。もちろんいつ帰つて来ても構わないけどね」

つまりこれを俺の支度金にしてくれると言つているのだ。もしかしたらもう戻らないかもしねれない自分に。俺としては世話になつた恩を忘れるつもりはないので杞憂だが、今後何があるかわからない。クレアさんの心遣いに感謝し、ちょっぴり気合いが入る。

「それじゃ。行ってきます。お世話になりました」

頭をしつかりと下げる。そして、玄関の扉を開けようとしたところ
で大きな声をかけられる。

「待つて！」

「アンナちゃん?!」

階段を駆け下り、背中にリュック、腰にポーチ、遠出用のしつかりとした衣装に身を包み姿を現したアンナちゃん。見送りに来てくれただけとは思えない様子に面食らう。

「えと見送りありが……」

「私も一緒にいく！」

גָּדוֹלָה רַאֲתָנָה יְהוָה כִּי־עַמְּךָ תִּרְאֶנָּה וְעַמְּךָ תִּרְאֶנָּה

もしや心優しいアンナちゃんは、俺を心配して道案内をかつてくれるとでもいうのか。

「おかあさんいじりでしょ？」

「いいでしょ、ついてすつかり準備してのを見ると断つても聞かないでしょ？」

アンナちゃんの問いかに半分笑いながらクレアさんが答える。

「アンナちゃん。道案内役ありがとう。でも家の手伝いとか大丈夫？」

「何いつての？道案内はするけど、家の手伝いはいいわ。だってしばりくは帰らないんだし」

一緒に行くつてやつちの意味か！

「一緒にいて急にまた……」

「昨日、ドア越しに話してくれたから。余おつと思えばいつでも会えるつて。だけどね、そうじやないつて思つたの」

ひらりを真剣に見つめていう。その真剣さに鳥を呑む。

「森で手当としたとき思ったの。絶対にこの人を死なせはしない、私の命の恩人が死ぬなんて許せない。何がなんでも助けるんだって。そのときはちゃんと助けられたけど、心配なの。この家を出て行って、昨日までのこの世界のこと何も知らなかつた人が生きていけるのか

はつきりと言わるとあまり自信はない。頼りにできるのはこの家の家族しかいないのも事実だし。

「だから、私が近くにいてあげる。大したことは出来ないかもしない。だけど、私の知らないこと」ついで、お兄ちゃんが危険な田に合うのはだめなの！」

想いを爆発させて宣言したアンナちゃんの言葉。頼りない俺を見ていられないとも取るのが普通だらう。そして頼りないのは自覚している。今俺が取る行動は一つしかない。

「クレアさん、本当にここんですか？」

「仕方ないわ。大切にしてあげてね。あと、いつでもと言つたけどなるべく早く顔を出すよ！」

「はは、わかりました。…じゃあアンナちゃん。これからよろしくお願いします」

「うんー。」

アンナちゃんが一ツ口と笑つて返事をする。今後の身の振りが決まるまでアンナちゃんと一緒に生活することになるのかな。宿の手配とか大丈夫かな……

「そうそう、住所なら心配しなくていいわよ。例の薬剤店に住み込みで働けばいいから。本当はリュウジくんの部屋だけ借りる予定だったけど、一人でも問題ないでしょうし」

「ほんと何から何まですいません……」

その薬剤店の空き部屋を借りて、俺はギルド通い。もしくは、何か

職探し。アンナちゃんは住み込みのアルバイトみたいになるのが。
……拠点が隣町に移つただけで相変わらずお世話になりっぱなしな
気がする。

「では、これで出発します。グラントさんもよろしくね」「さくべださ
い」

「ええ。一人とも元氣でね。アンナも満足したら帰つてくるのよ?」

「はー」「わかつた~」

短い間だがお世話になつた家を後にす。今日も見張りをする自警團の一人にも挨拶し、別れの言葉を告げる。

「何もない」とだけび、また来いよ~」

「エハモ元氣で~」

一人に見送られ村を出る。さあ、隣町のバールワットまで出発だ!-

多少舗装された街道を田舎して歩き始めるが、アンナちゃんから声をかけられた。

「あの、ココウジや~」

「ん、なに?」

「えつとですね……これからはお兄ちゃんて呼んでいいですか?」

「お兄ちやんか~。うそ、いこよ」

年齢的にもそれくらい離れてるし、生前妹がいた身としてはあまり違和感はない。家族を思い出し、俺が死んで迷惑かけたなと少し後悔する。

「では兄妹らしく、私のことをアンナ、って呼んでくださいね、お兄ちゃん」

「う、わかった。えと……アンナ？」

「はいーこれからよろしくお願いします、お兄ちゃん」

義兄弟の誓いならぬ義兄妹の誓いか……てことはあと一人枠があるな、なんてことを考えながら再び歩き始める。新しくできた小さい妹に、あまり迷惑かけないよう頑張らないとな。

隣町そしてギルド。不安だけどアンナがいてくれれば何とかなる気がする。そして、そういえばアンナが出て行つたことをグラントさんはどう思つただろうとふと思つた。

第九話 隣町バールワット

あれからしばらく歩くと、地面が多少舗装された場所にでた。舗装といつてもコンクリートとか、ましてや石畳ですらなくただ草が生えていない程度だ。道中、分かれ道があつたりしたが東へと迷わず歩く。少し気になったのでアンナに聞いてみる。

「なあアンナ。『Jの分かれ道の先はど』にいくか知ってる？」

「あっちの道をいくと、『ズ』という村がありますよ。果物を栽培しているのが特徴ですね。たまにおとうさんが買いに行つてました」

果物というと林檎とかをイメージするけど、『Jの世界の果物はどんな味がするのか興味があるな。町にいけば手に入るのだろうか？食料事情も気になるところだ。現代みたいに豊富な調味料や保存料とか存在しないのは、クレアさんの料理から想像できる。料理は確かに美味しいのだが、それはあくまで素材の味と料理の手際の良さからくるものだ。味噌や醤油など、親しみだ味はこちらには流通しない。もしかしたらこの世界の日本ポジションのゲッコウにいけば、近いものは見つかるかもしれない。……あれ、でも味噌醤油の発祥って日本で合つてるのか？」

アンナといろいろ話をしながら、1時間ほど歩いただろうか。話の内容は専ら世間話、主に俺の教養のためだが。そして、だんだんと景色が変わってきたことに気付いた。

「木が少なくなってきたな。森を抜けるのかな」

「Jあたりからは草原が広がりますね。もうしばらく歩けば町

が見えてくると思こまわ」

アンナは両親と何度か隣町に来たことがあるとのこと。これから向かう薬剤店の主とも顔見知りだそうだ。

「そのお店の人ってどんな人なの？」

「おかあさんの友達で美人な方ですよ。冒険者の頃からおき合ひがあつたって聞きました」

「もしかして、その人も元冒険者?」

「はい。リゼルさんっていうんですけど、とっても強かったらしいです。これはおとうさんから聞いたんですけどね。何回か大ゲンカしてひどい目に遭つたって」

「グラントさんと喧嘩して、いい勝負するのか……」

なんか凄そうな人だな。性格わかんないからどうともいえないが、うまくやつていけるだろ? これから会つその女性のことを作れ想像していると、

「あ、見えてきました。あれがバルワットですよ、お兄ちゃん」

言われて前を見る。見えない。目を凝らす。……見えた。かなり遠くにだが。そうか、もうしばらくでつくんじゃなくて、見えるつていつてたもんな……

「あはは…まだ結構あるんだね」

「 わうですか？お兄ちゃんと一緒にすがつこむらやこううだけどな
あ」

話しながらだと退屈はしないけど、歩き通しだと足腰に負担が来るよ……。ギルドで働く以前の問題として、体力作りが必要になりそうだ。それに話自体も、今は教えてもらつことがたくさんあっていいけど、それが終わると話題に困る。ただでさえ話題を見つけるのが困難なのに、ましてこの世界でのパワーネーション力なんて全然身についてない。アンナといつまでも仲良くしていければ文句ないけどね。

「まだ時間はありそuddash;、今度はあの町について教えてもらつていいかな？」

「うん。何が聞きたい？」

「うーん。建物の場所とかは、直接探したほうがよさそうだし、どんなものがあるか知りたいね」

「わうだね～。おにいちゃんがいくギルドでしょ、それに最初にいく薬剤店、町の入口近くには宿屋があつて、大きな食堂もあるね」

「まつまつ

「あと、まわりの村でとれた物を集めて販売している市場があるよ。それと領主様が住んでるおつきな館も」

「へえ、市場か。なにか売り物があれば利用できそうだ。まあお密さんとして顔を出すくらいだらうけど。」

「わかった。他にもいろいろ教えてな？」

「はい」

魔物との遭遇もなく、途中馬車と一度すれ違った程度で、ようやく町の入り口にたどり着いた。町には8mほどの外壁が備わっており、出入り口は制限されている。この門は幅5mくらいで、横に衛兵の詰め所も見受けられる。ここにも見張りが立っていて、その格好は体の要所を含めた広い範囲を鈍い色の鉄製の防具に覆われ、如何にも衛兵という気配を漂わせていた。顔が分かる距離まで近寄ると声をかけられた。

「ようこそ、バールワットへ。お一人は近くの村の人かい？そっちの君は東方の出身のようだが」

おや？ 東方って単語がここで出るということは、やはり黒髪は珍しいのか。困ったな。そんなやつが急に村に沸いたなんて少し怪しく思われるか……

アンナにチラリと視線を向けると、任せてと言わんばかりに一步前に踏み出した。ここはアンナの機転に任せてみよう。

「はい、私はラピの村から薬剤を届けに来た薬師です。この人は私の村に滞在されてた商人の息子さんなんですが、先日現れた魔物に襲われた私を助けようとして……」

そうきたか。いや無茶振りじゃないかこれ。えーっと、子連れの商人が不慮の事故で亡くなつたと、あと俺は商人の息子か。アンナを助けたときの俺が父親の設定か。じゃあ、俺がこなす役割は……

「私、この少女の村にてお世話になつておりました、リュウジ・キリタニと申します。父のツテもなくなり商人として生きていけど、また父の無念を晴らしたく、冒険者になろうと出向いた次第です」

「それは…、なるほど商人の。『親族の勇氣に敬意を表します。つらいでしうが、冒険者になろうと決意されるとは。一人の男として応援します』

「ありがとうございます。立派な父に負けぬよう頑張りたいと思いまます」

「冒険者を始めるとなるとギルドに登録なさるのですね？ギルドの場所は？」存知でしょうか？」

「いえ、よければ教えていただきたいです」

「ここから見える大通りの先に、棘のついた盾をあしらつた看板を掲げた建物があります。勘違いされやすいのですが、冒険者ギルドは盾の看板を、戦士ギルドは剣の看板を掲げております」

「わかりました。盾の看板ですね」

「ええ、では」健闘を」

「どうもありがとうございました」

一連の会話をこなし、門を抜ける。見張りの方に声が届かないあたりまで歩いてからアンナに話しかける。

「やつらのは緊張したよ。なかなか際どい振りだつたね」

「やつらへお兄ちりやん元壁に役になつきつてたと思ひながぢ」

「ああいつ状況はいろいろ経験してるからね、知識の上でだけ。今後は打ち合わせなしにはやらないでくれると助かる」

「はーい」

「さて、それじゃリゼルさんのお店に向かおう」

「お店は宿屋の裏通りにあるよ。つこてきて」

アンナの案内を受けて家々の間を歩く。やがてアンナの家で嗅ぎなれた匂いがしてきた。ついたよー、と、いつもアンナの声に答える建物を見る。一階建てで周囲の家とあまり変わり映えしない。これらお世話になる大家さんとうまくやれますようにと祈りながら、その家の扉をノックした。

第十話 優勝者ギルドへ

「は～い、どうひらせま？」

芯の通つたハスキーな声と共に扉が開けられる。顔を出したのは、金髪ロングの女性で、クレアさんに負けず劣らずの美人だ。クレアさんはお母さんオーラが出ているが、この人はまだお姉さんで通じるだろう。こちらを見て一瞬怪訝な表情を浮かべるが、俺のすぐ後ろにいたアンナに気付くと途端に笑顔になる。

「あ～ら、アンナじゃない～よく来たわね。今日はお母さんと一緒にないの？」

と凄い速度でアンナに抱きつき、辺りを見回す。なんだこのお姉さん、アクティブすぎないが……

「リゼルお姉ちゃん、お久しぶりです。今日はお母さん達はいません」

「あら、あのハゲがいないのは構わないけど、クレアがいないのは残念ね」

ハゲって言った！今ハゲって言ったよ！

「で～？こちらの冴えない野郎は一体何様なんだい？」

「えーっと自己紹介の前にひらせを。クレアさんからの預かり物ですか？」

クレアさんの名前を出した瞬間、依頼書が奪い取られる。なんだよ畜生、速すぎて手が見えなかつたぞ…怖え。

「なになに……。ああ、薬剤の搬入か。それにはまだ付け加えてあるな……」

気付かなかつたが、裏面にはクレアさんがなにやら書き足していたらしい。それを呼んでリゼルさんは溜め息をつく。

「はあ…アンナがうちに泊まつてくのは大歓迎だが、なんでこんな奴まで面倒みないといけないんだい」

と言いつつ、じつじを見てくる。やべえ、フレンドリーとは無縁だよこのお姉さん。今すぐ追に出されるんじゃなかつたか。などと内心ビクビクしていると、

「リゼルお姉ちゃん、リュウジお兄ちゃんは私の命の恩人なんだよ！お願いだから仲良くしてー！」

とアンナが救いの矢を放ってくれる。そして、リゼルさんはなぜか絶望したような顔をしてアンナと俺を交互に見てくる。

「あ、あの～どうかしたんですか？」

「…ハツ、いや、な、何でもないよ。ちょっと嫌なことを思い出しただけや。そうかい、アンナの命の恩人ねえ。そういうことなら多少の便宜を図つてやってもいいか

何かのショックから立ち直り、やつれててくれる。どうやら泊めてもらつことには成功したようだ。

「それじゃ空いてる部屋に案内する前に、持ってきた荷物出しな

言われて、リュックから薬剤をまとめて出す。確認が終わつたのか、リゼルさんが部屋に入つていつた。戻つてきたときに、その手に何枚かの銀貨が握られていた。「面倒だから細かいのは、サービスしどくよ。とりあえず銀貨8枚、無駄遣いすんじやないよ!」

薬代を受け取り、ポケットにいれる。その後、アンナは一階の、俺は一階の部屋にそれぞれ案内された。アンナが、俺も一階の隣室に泊まるようにお願いしたが、

「冒険者として働くんだ。疲れきつたやつに階段はきついだら」

とのことで認められなかつた。じゃあ一緒に部屋で、なんて言われたら俺の一生が終わりそうな気がしたので俺からもアンナを説得した。

とりあえず一息ついて、早速ギルドに向かおうと思つ。時刻は昼過ぎ。先ほど町の中心から大きな鐘の音がしていた。時計はあるにはあるのだが、個人が所有するものは数が少なく精度が悪い。俗にいう時計塔がその町の時間を管理しているらしい。冒険者ギルドは、役場の受付みたいなもので、依頼の受注、斡旋、素材の売買まで何でも屋に近い形態で運営しているらしい。朝は依頼の斡旋、夜は依頼報告や素材の買い取りで忙しくなるからスムーズに登録したければこの時間がベストだとリゼルさんに教えてもらつた。

「えつと、初期登録及び訓練に銀貨3枚を忘れず、しっかりと説明を聞いてくること、か

俺は今、銀に輝く盾の真下にいる。冒険者ギルドを表す看板のすぐ真下だ。リゼルさんに言われたことを思い出し、勇気を出して扉を開け放つ。

「す、すいませ～ん」

……反応がない。これは想定外だ。あれ？ ここギルドだよね、空き家とかじゃないよね？ 気合いで空回りし、呆気に取られていると、広いロビーの向こう側、カウンターに見える場所で誰かが突っ伏している。……あれ寝てるのか？ 一応、声をかけようと近くに行く。

「あの～起きてください」

呼んでも反応がないので、仕方なく揺すって起いちゃうと思い、肩に手をやる。そして頭をわずかに揺すった瞬間、

「ね、寝てませんーだからお給料下げないでー！」

「グハツッ！？」

いきなり顔をあげたため、俺の顎に華麗な頭突きが炸裂する。畜生、心配してやつた礼がこれかー己の不幸を恨みながら痛みがひくまで地面にピクピクとうずくまる。

「あ、あの～大丈夫ですか？」

そんな俺を見て声をかけてくる居眠り事務員。顎に受けた衝撃がひくまで、もうちょっと待つてください。

「はあ… 酷い目にあつた」

「あう、すいません… てっきり上司が起こしにきたのかと……」

身長は小さく、アンナより少し大きいくらいか。髪はショートで、薄い水色の髪が綺麗だ。日本人の俺からしたら、西欧人に見えるこの世界の人は大概美人に見えるが、彼女は綺麗というより可愛いと表現すべきか。

「まあ悪気があつたわけでもなし、痛みもひいたからよしとします。で、こっちは冒険者ギルドで合つてしまふよね？」

「すいません…。確かにこっちは冒険者ギルドですよ。どのよくな御用でしょうか？」

「よかつた。ギルドに登録したくて来たんですが」

「な、なんと…冒険者志願者さんでしたか！」

いきなりテンションをあげてくるミルザさん。志願者が珍しいのだろうか。

「そんなに驚いて、志願者が珍しいんですか？」

「いえ、ノリで驚いてみただけです」

誰だよこの子可愛いとか言ったの。アホの子じやねえか。……いや、アホの子だから可愛いのか？

「……まあいいか。それで登録の方は大丈夫ですか？」

「はい、『J』覧の通り暇ですので早速始めましょう」

そうこうでカウンターのトマトから電子を取り出す。

「それでは説明させて頂きます。まず、ギルドの名称・及び目的についてですが」

「あ、知ります」

先ほどのお礼に少しかつてやるうと茶々を入れてみる。

「あにゃ～なり飛ばしてもいいですね～」

……いやよかないだろー…そこ一番重要なとこじゃないのー…? まだこの子、下手に弄ると不利益を被りかねん……おとなしく聞いてるか。

「で、ですね。ギルドには関連組織として戦士ギルド、魔術師ギルド、ギルド、盗賊ギルドが存在しております。あ、これも知っています?」

「いいえ、全く知りません。詳しく説明お願いします」

とキッパリ言つと、残念そうな表情でこちらを見たあと手元の電子をせつせとめくつだす。お前、やつぱりサボりたいだけなんじゃなかろつか。上司とやうに会つたら一言文句を言つてやひつ。

「ええつとですね。冒険者ギルドは多岐に渡る業務内容のため、専門分野ごとに関連組織が存在しております。戦士ギルドは、冒険者の育成から武具の販売・強化まで、主に戦闘に関する組織です」

「冒険者の育成ってどうこいつものでしょ」
「

「ああ、それは熟練した戦闘技術を広め、若手の戦力の増強を目的としたものですよ。戦士ギルド所属の人なら安い料金で参加できます」

「なるほど」

「では次に魔術師ギルドですが、個人の魔力を測定したり魔法の基本を学ばせることで強力な魔法使いを育成し、知識の収集により薬学や鍊金術などの発展にも貢献しています」

田当ての魔術師ギルドは魔法学校みたいなものなのかな?これなら魔力があればなんとかなりそうだ。

「最後に盗賊ギルドについては、泥棒集団ではなく、特殊な技術や情報を扱い、戦闘以外での補助を扱う組織です。中には非常に高額で取引されるものもあります」

盗賊ギルドはよく盗品を売りさばく場所ってイメージがあるけど、ここでは情報屋の側面が強いな。特殊な技術つてのが気になるけど、よくある鍵開けとか罠解除とかなのかな?

「以上の組織が冒険者ギルドの下位に存在しており、冒険者の基本は冒険者ギルドに登録後、自分に合った分野にも続けて登録ですね。登録料金が増えますが複数の組織に所属も可能です。登録までは以上ですが、続けてギルドランクの説明に移つてよろしいでしょうか?」

「ギルドランクですか?是非お願いします」

「はい。ギルドランクとは主に冒険者の格を表す基準であり、依頼実績、ギルドへの貢献などにより左右されます。高位のランクになれば、組織での権限も増します。ランクはS A B C D の用記号のどちらかと1から5の数字で表記され、D 5が駆け出し、S 1が最高実力者、権限でいえば下つ端とギルドマスターの違いがあります」

「冒険者をやつていれば自然とランクが上がっていくんですか？」

「ランクの査定方法ですが、各ランクで100P^{ポイント}を獲得したら昇格試験を受けることができます。これに受かれれば晴れて次のランクになります。高ランクは実力に見合った報酬に加え、名声を高めることにもなるため、是非最高ランクを目指して頑張って下さいね。まあ才能がないとA 5になることも難しいですけど」

D 5から始まつてS 1まで目指すと24回も試験があるのか。まあ才能なんてないし、冒険者やつてくならよくてB 1が目標かな。

「わかりました。他に聞いておく」とつてあります？」

「あとは、ギルド加入の注意事項ですね。えーと、ギルドは冒険者の怪我や死亡に対して責任を持たない、ギルドに不利益をもたらす者は警告ののち追放、ギルドからの正式な依頼は断つてはいけない、などなど…」

「いやいやいや、省略しちゃダメでしょそこ

「うう、だつて無駄にたくさん書いてあるんですよー重要そうなやつだけわかれば問題ないですー！」

「重要なだから記載されてるんじゃ……仕方ない。ちょっと見せてください」

駄々を「」ねるミルザさんから手札をひつたくるよつて奪い文章に田を通す。……確かに似たようなありきたりな内容だな。オンラインゲームでよく規約とか読んだけど、それとあまり変わらないかな。

「はい、ちゃんと読んだので大丈夫です。これで終わりならギルドに登録したいのですが」

「わかりました。では登録料として銀貨三枚いただきます」

銀貨三枚をポケットから取り出し、カウンターに置く。

「はい。ではついてきてください」

そういうて席を立ち、横にある扉から別の部屋に移動する。置いて行かれないように後ろを歩く。隣の部屋は広めの部屋で、地面に英語で掘られた魔法陣があった。英語もとい月語は失われたのではなかつただろうか?なぜこんなところに……

「来ましたね」

いきなり背後から、落ち着いた男性の声。ビビってその場を飛び退く。

「ああ、驚かせてしまい申し訳ない。私、このギルド支部の代表を勤めます、シグナムと申します。ギルドカード発行に立ち会いますゆえよろしくお願いします。ミルザくんは受付に戻ってくれたまえ」

現れたのはひょろりとした体格の男性。歳は四十代くらいか、よく漫画に見る執事のような穏やかな感じがする。素敵なおじ様つてやつか。ミルザさんが一礼して部屋をでる。

「あ、はい。よろしくお願ひします…」

しかし、立ち会つて何かあるのかな。そういえばこの魔法陣つてギルドカードに関係あるのだろうか。

「それではこのカードを持ち、あの魔法陣の中心にお立ちください。カードは絶対に手放さないようお願いします」

差し出されたのは、クレアさんに見せてもらつたのと同じカード。だが、名前など何も書いてない。触つてみてわかつたが、プラスチックのよつな軽い金属でできていた。とりあえず言われた通りカードを受け取り、魔法陣の中心に立つ。

「よろしい。では始めます」

『神々の英知よ、我らを写す鏡の欠片よ、彼の者の真実を刻み給え：イノセントミラー』

シグナムさんが唱えた呪文に呼応して、足元に光が満ちる。その光はやがて光の筋になり俺の体を這いつづるように照らしだす。初めて魔法を見た俺は、最前列でマジックショーを見たかのように感動しその光景に圧倒されていた。やがて光は体を通つて手元に集まり、そのままカードに吸収されていく。光がおさまり、立ち尽くす俺にシグナムさんが声をかける。

「『苦労様でした。無事ギルドカードの発行が完了致しました。どうぞ』」確認ください」

言われてカードを見る。左側に自分の名前、性別、職業などが彫り込まれ、右側には大きくD5と表示されている。

「ではギルドカードについて説明致しましょう。素材は魔力鉱を溶かし込んだ鉄でできており、軽く丈夫でかつ魔力伝導率に優れています。傷がつきにくいため多少は粗野に扱つても問題ありませんが、紛失にはご注意くださいませ。その際は再発行にお金がかかります」

特別な金属なのだろうか。じっくりカードを見ていると、裏面にも何か書いてある。アルファベットと数字が表のように分けてあって、よく見るとそれはSTRやVITと書いてある。

「シグナムさん、この裏の文字と数字は一体何なんですか？」

どれも見慣れた単語であり、確かに期待を持つてシグナムさんに確認する。

「ギルドカードは、表には名前や職業、ギルドランクといった一般情報が。裏には個人の力量を表すための数値がステータスとして表示されます。一度作成されたカードは本人と魔力で繋がっており、所持していればそのつど更新されていきます。これは自身の適性を知る上でも参考になるので、よく見ておいてくださいますよ！」

やはりこれはステータス表なのか！スポーツテストや学力テストをしなくとも、自分の能力がわかるじゃないか！ああ…シャトルランでヒィヒィいいながら走つてたのを思い出しちまった。

「STRは筋力を、INTは知性を、PIEは信仰心を、VITは耐久力を、DEXは器用さを、AGIは素早さを。そしてLUCは

運気を表します。数値は0から100まであり、高いほど優れています。それから……」

英語を理解しているため説明は不要だったが、一応ウンウンと頷いておく。今は自分の能力を確認するのに夢中だった。予想通りといえばそうなのだが、筋力と耐久力、器用さと素早さがくそ低い。反して知性と運気は悪くないのだが、一番すごいのは信仰心だ。その信仰心なんだが……1と表示されていた。確かに異世界の神様なんて知らないから仕方ないといえるのか、この1もクレアさんの話を聞いたおかげなのだ。

「もし、ちゃんと聞いておられますか？」

「は、はい！聞いてます！」

びっくりした。途中から全く耳に入らなかつた、なんて言えずそう答えた。

「説明は以上で終わりです。何か質問はござりますか？」

「いえ、大丈夫です」

「では、このあとは名ギルドで訓練を受けるをお勧め致します。依頼は山のようにあるので、お急ぎにならずとも大丈夫ですので」

シグナムさんと部屋を出てロビーに戻る。受付小姐姐さんが、今度はちゃんと座つている。しっかりとして声をかけてくる。

「お疲れ様でした。これで依頼を受けることができますね。早速見ていきます？」

「残念だけど、まずは魔術師ギルドに向かいたいんだ。場所を教えてもらつていいかな？」

「魔術師ギルドは、この通りを右に向かっていけば魔法陣を描いた看板が見えるので、そちらへどうぞ。あ、魔法陣は、ギルドカードを発行した部屋でご覧になりましたよね？」

「はい、それならすぐわかりそうですね。ではこれで失礼します」

魔術師ギルドの場所もわかつたし、冒険者ギルドをあとにしようとすると、

「あ、そういうえば名前。良かつたら教えてくれません?」

そう言われ、まだ彼女に名乗つていなかつたことに気付く。これからお世話になるのだからちゃんと挨拶しておくべきだつた。振り返り改めて自己紹介する。

「俺の名前はリュウジです。なれるかわからぬ魔術師志望ですが、よろしくお願ひします」

「はい、リュウジさん。新人同士、これから頑張つていきましょー！」

こいつやかな表情で送り出され、これからギルドでの活動に期待が膨らむのだった。

主人公ステータス表

リュウジ・キリタニ（桐谷龍司）22歳 男

STR	30
INT	60
PIE	1
VIT	30
DEX	40
AGI	30
LUC	60

近接戦闘は苦手。異世界出身ゆえ信仰心が低い。ファンタジーな魔法にはゲームで慣れ親しみ、科学的な知識も多少あるため、魔法のイメージがこの世界の人間よりも遥かに得意。余談だが、信仰心は信仰呪文に、知性は魔術呪文に影響する。

典型的な魔術使いになる可能性を秘める。

最初のゴブリン戦ではLUCの高さに助けられ、VITの低さゆえ死にかけた。

第十話　冒険者ギルドへ（後書き）

指摘のあつた矛盾を修正。

第十一話 魔術師ギルドへ

冒険者ギルドを出て、次は魔術師ギルドを目指す。自分のステータスを見る限り、知性と運くらいしか誇れるものがない。ゲームでいえば、知性は魔法攻撃力、運はクリティカル率とか確率調整な気がするが、実際にはどうなんだろう。あとでミルザさんに聞いて……いや、冊子を借りた方が早いな。とりあえずあとは魔力が備わっているか確かめないと。どうやら冒険者ギルドではギルドカードには魔力を表示できず、魔術師ギルドにて測定する必要があるらしい。シグナムさんの説明がうろ覚えなので、まだ何か言っていたかも……

考えごとをしていると早いもので、目当ての看板を見つけた。魔法陣とさらにその中心に田字が描かれた、少し不気味な看板だ。どうやらこれが魔術師ギルドの建物のようだ。

ギイと軋むドアを開けて中に入る。冒険者ギルドに比べて小さなロビーには紫色のローブを着た女性が一人。やはり受付は女性なのはこの世界もかわらないのか？

「ようこそ、魔術師ギルドへ。初めて見る顔ね。どんな用件から？」

とりあえず魔術師ギルドにも登録しておかないとな。

「さつき冒険者ギルドに登録したばかりなんですが、魔法に興味があつて参りました」

「そう……見たとおり新人さんなのね。ギルドカードを見せてもらつていいかしら？」

胸ポケットからカードを取り出し、彼女に手渡す。

「リュウジ・キリタニ。魔術師としての素質は高めだけど、信仰心が恐ろしく低い。これじゃあ魔術呪文専門かしらね」

また魔術呪文という言葉が聞こえた。クレアさんには聞けなかつたし、ここで確かめておくか。

「あの、魔術呪文って何なのでしょうか。信仰呪文といつのもよくわからないのですが……」

「あら、系統をご存知なかつたのね。魔法を扱うには一通りの方法があるのだけれど、一つは術者自身の意思とイメージで魔法を発現させる方法。これが魔術呪文になるわ。もう一つが、イメージしにくい効果を発現させるために、神々にお願いする方法。これが信仰呪文よ」

「神様にお願いするんですか?」

「ええ。信仰する神によつて得意不得意はあるけれど、傷を癒やしたり運勢を変えたり、目に見えない現象を扱うことができるの。もつとも理解できれば同じ効果を魔術呪文で行使することも可能よ」

理解できるつてことは、体の仕組みや細胞のことを知つてれば回復魔法が使えるかも知れない。なんせ信仰心が1しかないから、耳を貸してくれる神様なんていないんだろうなあ……魔術呪文しか可能性が見えない。

「えっと、それで魔術師ギルドには登録してもらえますか?」

「まだギルドの説明もしていないのに、焦らないで。魔術師ギルドでは魔法の初步的な訓練や鍊金術の基礎を学べたり、魔法の発展を目指し協力することができるわ。魔法は高位の者になれば強力な力を發揮するため、魔法を使う者の情報を管理する組織でもあるわ。この説明を聞いて、所属する意思はある？」

「はい、是非お願ひします。魔法を使えるか試したいんです」

魔法という可能性のためにここまで来たのだ。やめる道理などない。

「よし、それじゃあ魔力測定をしてカードに登録しちゃいましょう。これから別室で、魔力の測定を始めますがいいですね？」

「はい！」

「それではこちらへ」

促され、部屋を移動する。冒険者ギルドのときは魔法陣に出迎えられたが、今回もそうなのだろうか。廊下を移動し、部屋に入ると予想とは違い、小さな部屋の中に水晶のような丸い球が安置されているだけだった。

「ギルドカードには魔力値は記載されないので、しっかり確認する必要があります。精神の成熟などによつて魔力値が増大することもあるので、定期的な検診をお勧めします。一応見届け人が必要なのでしばらくお待ち下さい。受付を空けたままにはできないので交代を呼んできます」

そう言つと紫ローブの女性は俺をおいて部屋から立ち去つた。見届

け人というのも情報統制のために必要なんだな。待ってる間暇だし、気になる水晶に手を伸ばしてみる。見た目はよく占い師が持つてそうな外見で、大きさはボーリング球くらいある。重いのかな、と思って両手で支えようとした瞬間、部屋の扉が開けられると共に、目の前に真っ白な光が現れ両目を焼かんばかりに照らした。

「うわっ！？」

焦つて手のひらを離す。雷でも落ちたような光だつたが特に変化はなく、入ってきた人も気づかなかつたようだ。

「まったく。研究の最中に呼び出しあがって……。おたくが測定希望者かい？見ててやるからさつせと水晶を両手で持ちな。あ、持ち上げる必要はねえぞ。触るだけだ」

今度は緑のローブを着用した男性だつた。眠たそつたるゝい表情をしながら作業の説明をしてくれる。しかし、両手で触るのはさつきやつて、凄い光が発生したような……。

「グレイライトか、つまらん。見届けは終わつたから俺は戻る。聞
きたいことがありや 受付にいるローザに聞きな」

と言い残し、さつさと帰ってしまった。……とりあえず男性がいつたグレイライトの意味を聞きにロビーに戻ろう。

「それで、グレイライトって言われたなんですが」

受付に戻つて、新たに魔術師ギルドに登録した証が刻まれたギルドカードを受け取るついでに質問する。

「魔力値を計つたときに生じる色や輝度によつて、名称が付けられてゐるよ。くすんだ白い光はグレイライト。ハツキリいえば魔力値としては最低クラスね。」

「最低クラスですか……」

宝くじを買つよつなものだと思つてたが、どこか期待していた分残念だ。

「まだ駆け出しだから、可能性がある分悲觀しなくていいわ。一応言つておくと、グレイライトの次はブルーライト、イエローライト、レッドライトと変化して輝きが増していくって、確認された最高峰クラスのピュアライトも存在するわ。ブルーライトくらいなら可能性はあるし、気を落とさないでね？」

慰められたが、やはり天性の才能といつか生まれ持つたものが大きいのは仕方ないことなんだろう。まあ、魔力がゼロでないことは確認できたし、次は魔法の使い方だな。

「わかりました。頑張つてみます。それで、早速魔法の使い方に聞いて教えてほしいのですが」

「ええ、わかつたわ。それじゃあ明日、朝9時の鐘がなるころにまたいらしてください。簡単な座学と毎から実習を行いますので」

「了解です。では失礼します」

魔法の講義を受けるのは、かなりありがたい。魔術師ギルドを設立した人に感謝だな。次は明日の講習の結果を見て、魔術師の実力を考えてから身の振りを決めるところ。

魔術師ギルドを後にしてリゼルさんの店を目指す。気づけば、夕日が見えお腹も減ってきた。早く帰って晩御飯をいただくところ。

side・ローザ

久々に新しい子が来た。ステータスと魔力値が釣り合つてないのが残念だけど、今後に期待するしかない。明日の講習に備えて資料をひっぱりだしとかなきやね。

受付の込み合う夕方も過ぎ、あたりがすっかり暗くなろうとした頃、廊下を歩いていると部屋から光が漏れてることに気づいた。

「あら？測定室に誰かいるのかしら」

うちの誰かが使つてるのかもしない。戸締まりをしつかりしていくれるなら問題ないし、そのときは気にせず部屋を離れた。

次の日の朝、講義室に資料を運び準備をしているとギルドの研究者の一人が訪ねてきた。

「なあ、さつき魔力測定器を使おうとしたんだが、壊つたままで光らねえんだが壊れてないか？」

「えつ？壊つてるつてどうこうじよ」

「いやな…触つてもないのにすりと曇つたままだし、いざ触つても反応しねーんだわ。予備のやつ倉庫から出しどいてくんねえか？」

「ナヘニハリとならいいですけど……」

「おう。じゃあようじく頼むわー！研究室にこるから、準備したら呼んでくれよな」

じゃ、と言い残し去っていく。一体いつから壊れてたんだろう？ 昨日新人の測定のときは問題なかつたみたいだし、もしかして昨晩の明かり……

いや深読みは意味ないわね。わざわざ機材を壊す人なんていないだろ？ はあ、余計な仕事が増えちゃつた。九時の鐘が鳴る前に終わらせないと。

第十一話 魔法使い始めました

「それで、ギルドには無事登録できたわけだ」

「はい。こりいろ説明が多かつたけど、なんとか

「おめでとうお兄ちゃん!」これで一步前進だね」

リゼルさんの自宅で夕食を取りながら、ギルドでの出来事を話す。リゼルさんは料理は苦手らしく、アンナが来たおかげで美味しい料理が食べれると喜んでいた。

「しかし、ステータスの割りに魔力が絶望的だねえ。その辺の課題をクリアしないと魔術師としてはつらいよ~」

「やつぱりグレイライトだとダメなんでしょうがね……」

「ん~説明されたらううけど、魔法を発現させるイメージとそれを伝える手段が洗練されればされるほど、魔力の消費量は減るからね。うまくやれ、としか言えないよ。あ、ちなみに私はブルーよりのイーローライトね。中の下つてとにかく」

「はあ……つまり俺は下の下だからやつぱり上手じゃないとダメってことですね」

「大丈夫、いざとなつたら薬師になればいいよ!私がしつかり教えてあげる」

「ありがたやありがたや……しゃしゃく

アンナの方は上手く手伝いをこなしているようだ。リゼルさんはアソナに激甘で、孫を可愛がるおば……なんでもない。とりあえず問題なく過ごしたとのこと。アンナの世間話に付き合っていると、気づけばだいぶ時間が経っていた。明日は遅刻しちゃいけないし、そろそろ休むとしよう。

「そろそろ寝ますね。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ。もし寝過ぎしても呴き起ししてやるから安心しな」

「おやすみなさい~」

こちらに来てから規則正しい生活をしてるなあ…夜は暗くて仕方ないってのもあるけど。明日は九時に集合だし、八時前には自然に目が覚めるだらうし問題ないかな。それじゃあおやすみなさい……

次の日、何事もなく時間通りに魔術師ギルドに到着した。九時を知らせる鐘の音がまだ鳴る前に受付を済ませてしまおう。

カウンターに座るローザさんに挨拶し、講義室へと案内される。黒板といくつかの座席があり、慣れ親しんだ大学の講義室を連想させる。講義室にはすでに何名か集まっていて、こちらを見る人もいれば全く気にかけない人もいた。

「さて、今日魔法の講義を受けるのはこれで全員ね。担当官を呼んでくるので少し待っていてください」

ローザさんが部屋を出て行く。講義が始まると、まだ時間があり

そうだな。他の人たちに興味があり、チラつと見てみる。部屋にいた人数は三人の男女。男一人に女一人だ。まず特筆すべきはその年齢だろう。皆、俺より若く、14～16歳くらいに見える。冒険者を始めるのは、だいたいこれくらいの年齢からなのだろうか。だとしたら俺は相当ずれてることになる。気にすることでもないけど。これで年齢が近ければ話しかけられたりもするのだろうが、一人大人がびている俺に話しかける人はいなかつた。

少しして誰かが講義室に入ってきた。四十代くらいのおじさんで、なかなか渋いイメージを醸し出している。

「皆、おはよう。私が本日初級指導を担当するデビッドだ。新たな同士の誕生に立ち会えて光栄に思つ。まずははじめに、名前と魔力等級を自己紹介代わりに述べてくれ。では、窓際のほうから始めてくれ」

魔力等級って何だ?と考えていると、一番窓際に座っていた少女が起立してしゃべり出した。

「グリシーヌです。魔力等級はイエロー」

そう言つと席に座つた。それを見て次の少年達の自己紹介が続く。

「俺はディオ。魔力等級はブルーつす」

「僕の名はアラン。魔力等級はレッド」
アランと名乗る少年の自己紹介で、担当官を含めた、俺以外の三人が驚いたような声をあげる。

「ほう、レッドライトか。これは逸材かもしけんな」

「レッド……」

「すげえな、最初からレッドかよ」

話をまとめるが、魔力等級は最初に測定したあの魔力値のことだな。しかしブルーイローレッドと揃い踏みか。俺だけグレイってのは残念だ。

「俺の名前はリュウジです。魔力等級はグレイです」

「よし、これで自己紹介は終わりだ。魔力等級に差があるからといって差別はしないから安心しろ」

ところを見ながら語る「ビッグだもん。まあレッドとグレイを比べたら凄い差があるのはなんとなくわかります……」

「では座学から始めよう。わからないことがあればどんどん質問してくれて構わん」

それからしばらく、魔法についての授業を受けた。今まで聞いたことの復習であつたり新たな知識を得たりと有意義な時間だった。魔法とは意思の力で世界を改变する術である。魔力とは意思を世界に伝える糧である。これを基本として、魔術呪文と信仰呪文、さらには精霊呪文が存在すること。精霊呪文は召還魔法のように精霊を呼び出し使役することを示す。

次に、呪文について。言語体系については以前聞いた通り、月語が最高言語、ルーン語が中級、共通語が下級の位置付けだ。魔法を使いたいならルーン語をいくつも知る必要がある。日常的に利用され

るドアとかなら認知度は高いが、火、氷などは分かるが、火炎、凍結となつた途端わからないらしい。なんだか日本の年寄りみたいな語学力だ。うちの祖母を思い出した。アイスはわかつてもフレーズはわからない。ファイアはわかつてもフレームはわからない……。呪文と魔力の関係だが、簡単に表すと呪文は魔法の設計図であり、明確であればあるほど効果が高い。そして魔力は設計図を書くためのインクだ。魔力が高ければ、多少あやふやな設計図でも輪郭がハツキリするためカバーできる。もちろん設計図を読み取り実行するのは世界そのものだ。信仰呪文は、神様に設計図を作成してもらつ分、魔力の消費量が増えるが、魔術呪文は完全に己の力量が試される。

最後に魔力の扱いについて。魔力はインクだと先ほど言つたが、それの使い方は言葉に乗せるイメージらしい。具体的には、明確な意思を持つて発声することで、言葉は魔力を伴う呪文となり、魔力が消費される。じゃあ寝言で魔法が発動したりするのかと聞いてみたが、よほど意識がハツキリしていないと無効みたいだ。が、過去に発動した実例が存在すること。

ここまで教わつて、質疑応答の時間や休憩を取つたりしていると昼飯食つて気合い入れとけ

ギルドには職員が利用する食堂があり、一般人も利用可能なのでそこに案内された。他の三人はすでに打ち解けたようで同じテーブルに座るみたいだ。

「おばちゃん、この日替わり定食お願い」

「あこよ。銅貨十枚だよ」

「ほー」

「テーブルで待つてな。出来たら呼ぶよ」

とつあえず料理ができるまで適当な席で待つか。そう思つてこると、先ほどの三人に声をかけられる。

「なあアンタ。一人なんだろ?俺たちと一緒に食おう」

確か、アラン…じゃない、ディオと黙つてたな。

「いいの?」

「なに遠慮してんだよ。みんな初対面だし、同じギルメンだろ。いいからここのよ

促され同じテーブルにつく。

「で、リュウジは少し歳上みたいだナビモアじゃないよな。
俺今16だし」

「まあ俺は気にしない方だからいいけど

「だよなーほら言つた通りだろ?意外と親しみやすいタイプだつて

「……意外」

「ティオの言うとおりだったね。」「めん」「めん

「どうやらトライオの提案で招いてもらえたようだ。少し感謝。

「しかしグレイかあ。俺たち三人とも魔術師を目指してるんだけど、リュウジも魔術師志望？難しいんじゃないかな？」

「わうだね。魔力が低いところのは大きな課題になりつつある

「レッジのアランが言つるのは嫌み……？」

「あはは。確かに魔力は低いけど、力仕事も苦手だからね。せめて体を鍛えるまでの繋ぎにでもと思つてたんだ」

「なるほど。では僕からも聞きたいのですが、その年齢まで冒険者以外のことをやっていらしたのですか？」

「うん、何をやつていたか、ね。アランの質問に正直に答えていいかな。嘘はつきたくないし。

「最近まで学生をやつてたんだ。今は働き口を探してる」

「ほつ、一体何を学ばれていたか気になりますね。その歳の学者といつとなかなかの所におられたのではないでしょうか」

「え？どういう意味だ？もしかして学者つて珍しい？」

「いや大したことじゃないよ。他にすることがなかつただけだし

「では何をなさつていたかだけでも」

アランがしつこく聞いてくる。興味があることには妥協しないタイプか！適当にはぐらかすしかないか。何言つてるかわからないだろうし。

「えへと、ファイナンスとかマーケティングとかアカウントとか……」

三人の顔が固まる。やつぱりわかんないよなー現代の学問は。いや、古い時代からある学問だし、専門職になら通じるかもな。しかし、それは見当違いで大きな失敗をしたことに気づかなかつた。そして、次の一句で自分の失敗に気づかされた。

「あなた……ルーン語を研究してたの？」

物静かにしゃべるグリシーヌが、ひときわ小さな声で聞いてきた。

「なるほど。それで納得しました。ルーン語の学者であれば魔力等級によらず魔法に携わろうとしても可笑しくありませんね」

「お～リコウジって頭良いんだな」

「いや、研究つてほぢじゃ」

「（）謙遜を。先ほどのルーン語はどれも僕が知らないものでした。いざれご教授願いたいものです」

お、俺はいつから語学研究者（しかも英語）になつたんだ……いまさら経済用語ですなんていえないぜこれ。

「そこにテーブルの連中、料理できたから取りにきな～」

「ほー、料理できたみたいだし取りにいー」「はやく食べなこと」「ビッグドさん」に怒られるかも知れないし

ナイスおばちゃん。いいタイミング。これ以上の追求を避けるため、いそいそと料理を運ぶ。皆も食事が先決と考えて質問は終わつた。

食事のあとは逆にこちらから皆のことを聞いてみた。ビッグドさんの世界は成人というか一人だちするのが早く、15歳ほどで職につき始めるらしい。冒険者見習いもこの時期から、と言われいかに自分が場違いかよくわかる。

「お、戻ってきたな。それでは実験を始めよつ」

講義室にはすでにビッグドさんがいた。みんな席について集中して話を聞く。

「まずは簡単な魔法で、魔力の流れと魔法の発動に必要な意思を把握してもらつ」

『我が前を照らさせ…ライト』

ぽつりと小さな光の玉が現れ宙に浮いている。電球のようなシャボン玉…いやシャボン玉のような電球？

「ライトとは光を表す。これは簡易的な光源を発生させる呪文で、暗闇などでの探索に役立つ必須呪文ともいえる。まずはこれを真似てもらおう

やつてみなさこと言われ、皆が呪文を唱える。俺もやつてみると
よ。」

「我が前を照らせ、ライト」

……なにも起きない。横を見ると三人の前には豆電球が。おい、お
前ら。あからさまに皿をそらすな、傷つくな。

「ふむ。リュウジといつたか。呪文はただの発声ではない。言葉に
意思を込めるんだ。グレイライトでもライトの呪文は発動可能だ。
しつかりとした意思を持つのを忘れるな。ではもう一回」

意思ねえ……なかなか難しい。現實にはできるはずもないことをやる
んだから、常識が邪魔をしているのか？

非現実的といえば、夢か。夢の中ならなんでもできそうだしな。イ
メージするのは夢の世界、夢の中、夢の自分……と。

不意に不思議な光景が思い出される。真っ暗闇の中での何か不気味
なものに囲まれる光景が。

黒……闇……呪……魔……渴……壊……死……

自分の体が壊れしていく、死んでいく。呪文が、呪いが染み込んで、
精神が病んでいく。こんな光景をいつ体験したんだ。それともただ
の夢だったのだろうか？

最後に光に包まれてその光景は途切れた。その時、確かに聞こえた
声。

『助けて』

「おい、ビヘした？ビヒが調子悪いのか」

「はつ！？だ、大丈夫です」

「そうか？じゃあもう一度やつてみる」

先ほどの光景がまだ頭にちらつく。あのときの声は…そう、こんな感じで

『我が前を照らせ…ライト』

体から何か流れ出す感覚と共に田の前に光が灯る。

「あ、でた」

『皆』を見ていたようだった。

「よし、全員できたな。魔力の使い方は覚えられたか？次は今の灯りを消してみる。魔法が持続している間はある程度操作が可能だ。光を消すイメージを持つんだ」

言われたまま、光が消えるところをイメージする。すると、スワード全ての光は消えた。

「初步的な魔法の使い方はこんなもんだ。次は上の句と下の句についてだ。下の句であるライトはそのままで、上の句を変化させることで魔法の性質を変化させてみるぞ」

そういってビヒさんは再び呪文を唱え始めた。

『我が命に従い道を照らせ・ライト』

光が同じようにデビッドさんの前方に現れる。しかし、その後デビッドさんの周囲をコラコラと漂い、本人から離れたところを行ったり来たりし始めた。

「今のは、出現した光を操作することを可能にする呪文だ。操作性以外にも、光量や個数なども変化対象にできる。上の句と呼ばれる部分は、イメージを確定させるために非常に重要だ。各々が最も使いやすい呪文を唱えるのが最善だが、とりあえず今は俺の真似から始めるようだ」

魔法の練習が続けられる。皆が先ほどの呪文を思い出し、一斉に唱える。

『我が命に従い道を照らせ・ライト』『』『』『』

それぞれの目前に、先ほどと同じような光の玉が現れる。デビッドさんはこれを動かしていたな。光を消すときもイメージが必要だつたし、これも意思によって操作できるはずだ。

光を睨みつけて、動け~と念じる。眩しくて直視は難しいため、実際はそのあたりを見るだけだが。最初だからか、光の動きは緩やかでゆっくりとしたものだった。

「なんか、デビッドさんみたく自由に動かないんだけど…どうすりやいいんだこれ?」

「俺も、動きは速いんだけど軌道が定まんねえ~」

ディオも苦戦しているようだが、アランとグリシーヌはすでにある程

度コツを掴んだようで、自分達の周囲で光をクルクルと回していた。

「これが才能の差か……」

「ふう。ココウジは卑屈すぎると思つよ。これはあくまでイメージの問題や」

「重要なのは…魔法を扱うときの意図」

「この二人はしっかりしてゐよなあ。しっかり魔法の扱いを心得ちやつてるよ。

「その通りだ。自分が魔法を使いこなしている場面をイメージしてみる。あとは、いかにその理想に近づけるかだ」

デビッドさんのアドバイスも受けて、訓練再開。理想とする魔法の姿か…正直、光の玉が浮いてる時点でイメージは難しい。どうやって浮いてるのか、とか、移動するときの推力はどうするのか、とか疑問があるとうまくいかない。いっぽ、電球に羽とスクリューでもつけてみるか。いやそれは流石に魔法じゃねえな……うーん。グラユラ動く光…人魂？いやいやファンタジーなら、妖精……！…そうだ、ティンカーベルっぽい妖精ならイメージできる！

ようやくイメージが固まったところで、周りが静かなことに気が付いた。

「ん？ ディードの皆？」

こちらを呆れて見てゐるディオに声をかける。ディオはなんともいえない表情で、

「いや…お前の様子が気になつて見てたりよ、その」

「僕らも驚いて声をかけられなかつたんですが、まああんな光景を見てしまつと…ね」

「…意外」

「ははっ、いや～確かに驚いた。飲み込みがいいというかなんといふか」

またなんかやらかした…？いやでも今は頭抱えて悩んでただけなのに。

「一体何が…」

「リュウジが悩んでる間がスゴかつたんだよ。ほら、今はフェアリーの姿になつてるけどその前が」

「見たことのない造形の羽やら靈魂のような不定形、ある種の曲芸にも思えますね」

目の前、視線を上に移すと淡い光を放つ人型があつた。ああ、考え中のイメージが即座に反映されてたのか。そのシルエットは妖精と呼ぶにふさわしく、二対四枚の小さな羽と体にフィットした薄い羽衣。直視できなかつたはずの明るさが、今は螢光灯程度に収まつている。

「生命の形になぞらえたところが興味深い…リュウジ、早く動かして」

「飛んでいるところがみたい」というグリシーヌのリクエストに答え、光の妖精に指示を出す。

「三回まわって…ジャンプ?」

思いつきで言ってみたが、彼女は指示通り、俺の周りをクルクルと周り、最後に俺の頭の上に飛び乗ってきた。

「おおひ… わきまでとは使い勝手が全然違う

最初に指示しただけで、その後は考へなくともある程度持続する操作が可能だった。さらに軌道も速度も光の玉の頃より洗練された。

「なかなかに見事な魔法の行使だ。生物の模倣と口頭による指示は別分野で見たことはあるが、こんな適用が効くとは

「あの、結局のところこんなので大丈夫なんでしょうか?」

「ああ、もちろんだとも! 本来は上の句の変化で目指すものだが、そこを意思の力で変化させたに過ぎない。難度は上がるが、あくまで正攻法だよ。まあ、強いて言えば、声に出さずとも操れる感じかな

「デビッドさんからOKをもらひ、安心した。俺の魔法を参考にしたのか、ディオは虫羽をはやした光の玉を飛ばしている。

「おお、すげ。ちゃんと動くようになったぜ」

「ディオも何とかこの魔法をものにしたようだ。あの一人は困つてないようで、球体のまま自在に動かしている。ついでましくなんてないんだからね」

しばらく魔法の詠唱と解除を繰り返し、ライトの呪文に慣れたころディオが疲れを見せ始めた。それに気付いたデビッドさんが気遣う。

「む？ ディオ、大丈夫か？」

「はは、ちょっとだけ疲れが」

「う～む。すまんな、やめどきを誤ったようだ。魔力量的にリュウジを意識していたが、個人の技量差を失念していた。一度練習を切り上げて、講習の締めに入るぞ」

「どうやら、グレイライトの俺が最初にへばる田論見だつたが外れたらしい。普通なら魔力量が先に底をつくのは俺なんだが、やりくりがうまくいったのかな。妖精型にしてむしろ使い込んでる気がするのに。」

「最後に、魔法のレパートリーを増やしてもらつ。部屋の後ろの本棚にある魔導書から呪文一つを選び、実演してもらつ。それが済んだら講習は終わりだ。以降好きなときに、ギルドで魔法を学べばよい」

デビッドさんはそう言つて、本を取りに行かせる。俺も適当な魔法を探すとしよう。

「な～アラン、何やるか決まったか？」

「な～アラン、何やるか決まったか？」

「ん、そうだね。典型的だけど火を起こす魔法を使おうかな。火に関する本は…これだな」

「ふうん。じゃあグリシーヌは?」

「…私は冷氣を発生させるのを選ぶ」

「…『』とは、その持つてるのは水に関する本?」

「うん」

「そつか~、じゃあそれ以外でか。火はアランに取られちまつたし、雷でも調べるかなあ…」

ディオは雷、アランが火、グリシーヌが氷か。ちゃんと、攻撃魔法らしい魔法つてのはあるんだな。他に残つてる本は何があるのやら。

「えつと、『土に関する魔法の影響』に『風に関する魔法の影響』…いろいろあるにはあるけど、まず一つ選べって言われてもな……」

う~ん、必要なのは攻撃魔法というより便利系な魔法だよな。水や火も役立ちしそうだけど、他にはなんかないか。

「『肉体に対する魔法の作用』『光に関する魔法の影響』ねえ…ん?肉体に対する魔法?」

一番興味深い本を手にとり中身に目を通す。内容は、人体の構造から始まり、腕力や脚力、まあ筋肉の話を経て、魔法による強化を試みるという物だった。自分なりに要約すると、筋繊維を強化、増幅

をイメージすればいい訳だ。細胞で考えれば、密度が重要か。この世界じゃ科学的な考えは進んでいないのか、そういう単語は載っていない。しかし、魔法はなんでもできる可能性がある」とは示してくれた。

「でもこれ、呪文が載つてねえ……」

隣でアランが手のひらに火の玉を出していて、後ろからは僅かながら冷気が漂い始めるまで本を読み進めてみたが、肝心の詠唱のキー・ワードが載つていない。ルーン語に該当するものが無ければ呪文の効果は薄くなる。一応マッシュルって書いてあるが……これ和訳で筋肉だよ。これは呪文には向いてないんじゃないだろうか。しかし、これは筋力不足の自分にはどうしても必要な魔法だ。どうにかして……いつそ自分で考えてしまおうか？

頭の辞書をひっくり返す。筋力、筋肉、力、腕力……思いつく単語をとりあえず英訳する。語呂の良さ、イメージのしやすさが魔法発動率に影響するのはすでに習つた。あとは、実際に試すだけだ。

「よし……やってみるか

呪文を構築し、心の中で反芻する。一度、二度と繰り返し、詠唱に問題ないことを確認して、今度は実際に唱える。

『我が力は増大す・マッスルインラージ』

ライトの呪文のときのように、意思を持つて、魔力を込めつつ詠唱する。呪文の詠唱の完全と同時に、体に違和感が現れた。服の腕部分を捲つて確かめてみると、明らかに以前よりも発達した筋肉が見て取れる。しばらくすると勝手に魔法の効果は

切れるのだが、今はとりあえずすぐに消してみる。すると筋肉がしほみ、見慣れた太さの腕に戻った。

新たな魔法の成功に嬉しくなり、早速「トビッシュさん」と即座に報告する。

「トビッシュさん、魔法の習得できました！」

「お、これで全員だな。早速見せてもらおうか」

「トビッシュさんの前で呪文を詠唱し、筋力は増加するとこりを見せる。

「！」の状態なら以前より重いものも持てるようになるし、こりこり役立つと思います」

「せへ、あの本から！」こつを覚えたのか。合格だな

「合格がもうえたといつことは、これで講習は終わりか。

「トビッシュさんの話は続く。

「みんな終わったからいっが、実はあの本はどれも未完成なものでな。限られた情報で魔法を成功させられたお前らならこの先もきっとうまくいくだろう。これをもって本日の初期講習は終了とする

！」

『ありがとうございました！』

あのあと、みんな基本的な魔法を成功させたことを聞き、お互に情報を交換しあった。難しい魔法なら秘匿性もあるだろうが、こんな初級魔法であればそんな心配もいらない。

アランからは火の玉を打ち出すファイアーボールを。グリシーヌからは、氷の破片をぶつけるアイスエッジを。ディオからは微弱な電力を体に纏うエレクトリックスキンを教えてもらつた。

そして、こちらは例の筋力増大魔法を教えようとしたのだが、認識の違いから上手く伝わらなかつた。変わりに増大を意味するエンラージという単語を教えて、許してもらつた。

「機会があれば会うこともあるでしょう」

「楽しかつた。さよなら」

「じゃあなー元氣でな」

別れの挨拶をして去つていく三人を見送つて、家に帰る。今日はとても大きな収穫のあつた一日だつた。アンナとリゼルさんにも安心させてあげられるな。

夕方の鐘が鳴るのを聞きながら、そういうえば魔力切れについて聞き忘れたことをふと思い出し、まあ切れないように気をつけるかと考えそのまま歩き続けた。

第十一話 魔法使い始めました（後書き）

魔法がいくつか登場しましたが、基本魔法は誰でも作れます。しかし、望む効果や威力によって必要とされる魔力の絶対値が変化し、さらにその魔法に対する理解度も影響してきます。火が起きる仕組みを知つていれば、もしくは経験で理解していれば、その分その魔法が得意といえるでしょう。

では次の更新でまた。

ご意見・ご感想お待ちしております

第十一話 お仕事しましょ！（漫畫モード）

え？ 危険なんてしませんよ。でも危険を冒す奴が無くとも、巻き込まれる」とはあるかもね！

第十二話 お仕事しましょう

「良かつたじやないか。明田から冒険者の仲間入りができる！」

「ええ。びっくりするような奴もいましたけど、俺でも平気かなっ

アランみたいな魔力量が高い奴がいても、筋力増大が可能な分、雑用仕事にも手を出せる。日雇いバイトなら見つかるだろう。

「で、お友達があんたより先に参っちゃったとはね。やつぱりステータスの差かねえ」

魔力量に違いがあるはずのディオが、俺より先に疲労を訴えたことを話すと、ギルドカードに記載されたステータス表が関係していたのではないかとリゼルさんは言う。俺のギルドカードを見せると、その数値について話し始めた。

「筋力30つてのは男としてどうかと思うけど、知力が60あるのは誉めてもいいね」

「ハベハ…セハマツコロヒトニキニドスカ」

「ああ、それじゃ残念ながらこの男に揃られちまつよ」

うわー弱えー。筋トレしそうかと思いつつ先延ばしにしてた自

分が憎い。

「あんたくらいの歳で力仕事してりや 40くらいかねえ。一端の戦士やつてくなら50はないとダメだつてグランのハゲが言ってたかな」

「一端の戦士で50……？」

あれ？ ジヤあ俺の知力60ってのは

「そ、そ。だから知力だけ見ればなかなか優秀なのよね。これなら魔力低くても魔術師やつてけるかもね」

な、なるほど。何が災いしたかは知らないが、この世界の知力に該当部分は意外にイケてるのか。

「お兄ちゃん、頭良かつたんだー！ それなら薬師のお勉強もカンタンだね」

「いや、それはちょっと勘弁してください…」

アンナ「ごめん。思つに記憶力とかは大して変わんない気がするんだ。だから、薬草図鑑マスターさせるレベルはちょっとついていけそうにない。種類を絞ればまだ身に付くかもしれないが、とても本職にかなう気がしない。

薬師に乗り気でない俺を、恨めしそうに睨みつけるアンナ。でも、頬が膨らんで可愛く見えちゃ意味ないぞ。現にそれを見たりゼルさんが嬉しそうにしてるし。

「とりあえず、明日からギルドで依頼を探しながら魔法の練習を始めたいと思います」

クレアさんからいただいた仕度金がかかる前に、ある程度魔法を使いこなして働くようにしておかないといけない。昔から無駄遣いはしないほうだったけど、最低限の生活費というノルマが存在する今、急げてはいられない。

「最初のうちは無理しちゃダメよ？ ギルドの依頼なんてピンからキリまであるんだし、一番報酬安いのを探すんだね」

「やうだよー危ない依頼は絶対受けちゃダメだからね！」

一人に釘を刺されるとことになつたが、俺だつてそんな無茶はしたくない。雑用だよ雑用。冒険者らしい冒険なんて自殺願望がある奴がやればいいのですよ。

「わかつてるぞ。危なくない簡単なやつにするよ」

笑いながらそう言つて、一人を安心させたつもりだった。

いや、まさか

漫画じゅあるまこし

死亡フラグなんてのがこの身に降りかかるとは……

確かに、今思い返せばあの会話の流れは振りだつたのかもしない。押すな押すなの要領で、簡単簡単セーフセーフいってたからな……いや、でも、なんで、こんなことになつちやつたかなあ……

例の会話の次の日、さつやく朝一で冒険者ギルドの方に顔を出した。

「おはよー」「わあ

「おはよー、おはよー!」「わあこます。リュウジさん

受付、ではなく横の掲示板りしき所で作業中のミルザに声をかける。何度もみても水色の髪といつのは現実味がなくてわずかながらテンションがあがる。

「それって、何してるんですか?」

ペタペタと画鋲で紙を貼り付けてこべミルザさん。作業の手を止めずに答える。

「これはですね~ギルドに持ち込まれた依頼書を冒険者用に貼り付けてるんですね~」

ペタペタペタペタと手際よく依頼書をさばいていく。

「へえ～なかなか手慣れたものですね」

「いやはは、いつのまには得意なんですよ」

まあ冊子とこらめっこしてるのは、この作業の方が捲りそうだ。
せつかだし依頼について聞いてみるか。

「実は魔術師ギルドで魔法を覚えたので、簡単な雑用仕事を探して
るんですが」

「へ？ 魔法を覚えたのに雑用なんですか？」

ミルザさんが、手を止めて頭に？マークを浮かべながらじりじりに向
き直る。

「覚えた魔法が力持ちになる魔法だったもので、そういう雑用を探
したいんですよ」

「ああ～そういうことでしたか。わっかりました。今探しますから
ちょっと待っててください」

「よろしくお願ひします」

貼り付けた紙と手に持った紙の両方に目を通し、条件に合つ依頼を
探し始めてくれた。本来は自分で探すのがスジだと思つたが、初心
者は初心者らしい甘えられるところは甘えておいつ。

「あ、これなんていいかも…」

一分ほどでミルザさんは一枚の依頼書を取り出し、俺に見せてくれた。

「なになに……『依頼内容・荷物運び』引っ越し作業の手伝いをお願いします。力仕事ができる方なら誰でも歓迎です、か。確かに問題なさそうですね。これお願ひできますか?」

「はい、それじゃこの依頼書を持って行つてください。これが依頼を受けた証になりますから。あと、裏には依頼者の家までの地図が載つてますから、なくさないでくださいね」

「あ、ほんとだ。わかりやすい地図ですね」

「結構大きな町ですからね~きちんとした地図じゃないと迷う人が多くて……」

依頼書の裏にはこの町の一部だが、しっかりとした地図が載つていた。一部というのは、この冒険者ギルドから依頼者宅までの通り道周辺しか載つていなからだ。

「ミルザさん、ありがとうございました。今から行つてきます」

「初仕事頑張つて~」

ギルドを出ると、ちらりと仕事を受けに来た冒険者達とすれ違つた。腰に剣を下げ、革鎧をつけ、マントをなびかせる姿はまさに俺がイメージする冒険者だった。魔物退治とか探検とかするのかな~、ちょっとカッコイいな……ま、俺は安全に引っ越し作業に精を出すとしますか。

第十四話 お化けの出ぬ家

「イージが依頼主の家で合つてるかな」

目の前には、周りの家と続いた西洋風の建物がある。
日本で言えば、長屋つていうのかな。

まあ一軒一軒が二階まであるから集合住宅つていつたほうのが豪華さに合つてるかもしれない。

依頼書には、依頼主の名前が書かれている。

勿論カタカナで。人名や魔物、たまに物をカタカナで書いたり発音するのは、カタカナ、つまりルーン語が真名を表すものと広まっているかららしい。

より世界に親密性のある言語を重要視するから、そういう文化になつたんだな。

ああでも、ゲッコウ出身の人は日本語、つまり共通語で名前とか表記するから、地球のときとあんまり変わらないな。

ともかく、今回の依頼主、シオンさんといつらしい、に念つとしょう。

トントンと一度ノックしてから、少し反応を待つ。誰かが出てくる様子はない。

改めてノックをしてから、今度は声をかける。

「シオンさん、いらっしゃいますか？冒険者ギルドのものですが」

すると、ドタバタという足音とともに、玄関のドアが開かれる。

現れたのはおそらく依頼主であるうシオンさん。

俺と同じ黒髪でセミロングの若い女性だった。

同じ年くらいだろうか、などと考えていたら、

「 も」

「 もへ」

「 も、キター――――――」

何を言い出したかと思つたら、いきなり狂喜乱舞し始め、呆気に取られて何の反応も出来なかつた。

なんとか我に返り、依頼主かどうかを確かめる。

「あ、あの、冒険者ギルドに依頼なさつたシオンさんですよね？」

「助かつた！助かつ……ハツ」

その女性も落ち着きを取り戻し、よしやく話が通じるよつになつた。

「ええ、シオンは私ですが。あなたが依頼を受けてくれた冒険者さん？」

「はい、コウジ・キリタードこります

「もう、私はシオン・コクヨウ。シオンでいいわ。よしやくね、リコウジ」

「あ、はい。よろしくお願ひします。シオン… もん」

自己紹介を済ませ、家にあげてもいい。テーブルに案内され、お茶を「」馳走になる。

「それで、依頼の内容についてなんだけば理解してゐるかしら?」

「理解どころか、引っ越しの手伝いとしか知らないんですねが……」

「まあ、そりゃそりやうよね。そう書いたんだから」

「はあ……」

なんだか疲れる人だな……苦手な相手だ。

「実はね、引っ越しは引っ越しなんだけど、一晩泊まつてこつてほしいのよ」

「実はね、最近、出るのは『この家』

「え?」

「え?」

「え? じゃなくてーそこは『何ができるんですか?』って聞きなさいよ!」

いや待つてほしい。俺の思考はその前の泊まる泊まらないのところで停止している。そんな状態で流れに乗れというのは酷ではないだろつか?

「ああ、えっと、で、何ができるんですか?」

「……幽靈よ」

「…え？」

「だーかーら、幽靈が出るのよー」

俺が引っ越してきて幽靈が出て一晩泊まる? いかん、混乱してきた。
落ち着け俺。

「えーと、引っ越すのは幽靈がでるからですか?」

「わづみ」

「じゃあ一晩泊まる必要があるのは何故?」

「私以外に幽靈ができる」とを証明する人が欲しいのよ

「あの…依頼にはそんなこと一言も…」

「いいじゃない、ついでよついで。それに幽靈ができる」とを証明する
ために冒険者を雇つても無効なのよ

「無効?」

「この家に幽靈がでたら、解決費用は大家持ちになるの。引っ越し
先も安く提供してくれるし。でもその条件として赤の他人が無償で
協力してくれる必要があるのよ」

「あー、なるほど」

「夜中怖くて眠れない日々が続いて、もう限界なの! お願い、人助け
だと思つて! この通りだから」

人助けをしに来たのではあるが、この通りって、片手で『ゴメンネ』的なポーズ取られても誠意が感じられねえ。その発言は普通、頭下げながら言うもんじやないのか。

「はあ…まあいいですよ。てことは、今日は泊まるだけで、明日引っ越し作業ですか？」

「そうなるけど、一階の部屋、結構荷物あるから今から始めていいかもね」

「今からつて、一人暮らしなのにそんなに荷物あるんですか？」

「ううん。今は両親が旅行に行ってるのよ。しかも旅行に出掛けてから急に幽霊が出るし……」

サイアクだー、と叫ぶシオンさんは放つておいて、今後の予定を立てる。一度アンナのところに戻つて泊まりがけの依頼を受けたことを伝えるかな。それから一階の整理を始めよ。

「シオンさん、一度帰つて仕度してきますね。そのあとから作業を始めようと思います」

「わかつたわ。でも今更だけど、力仕事大丈夫？あまり力があるよう見えないけど」

「見た目によらず力持ちですから」

心中で涙し、早いうちに筋トレしようと改めて誓つのだつた。

「トロツワカで、今晚は帰らなーから」

店の受付をしているアンナに依頼の説明をする。ふりふりエプロンが似合つていて、とても可愛らしい。リゼルさんの趣味だらうか……

「幽霊かあ。魔物じゃないと呪うナビ、『氣をつけてねお兄ちゃん』

「わかつてゐる。危なーことはしない。それじゃリゼルさんにもよろしく」

「こつてらつしゃーい」

あとほシオンさんの家に向かうだけだな。シオンさんの家の場所をまだ完璧に覚えてないため、行きも帰りもギルド経由だ。冒険者ギルドの前を通りかかるとき、声をかけられた。

「おーい。リュウジじやねえかー元気か?」

「ティオー!」

煤けたマントを身に付け、外出用の出で立ちになつてゐる。つまり、これから外で活動することになるのか。

「ティオも依頼受けたの?」

「ああ、街中の警邏をやるんだ。なんでも最近盗みが横行してゐるしこぜ」

「泥棒？」

「空き巣ってとこかな。犯人見つけたら追加報酬がでるから、怪しげやつ見つけたら連絡してくれよ！」

「それはいいんだけど、連絡手段がないよ。ギルドに言付けでもすればいい？」

「おま、ギルドに伝えたら意味ないだろ。町の入り口に、月熊亭って宿があるから、そこに頼む」

「わかった。じゃ、俺も仕事あるからまたね」

「おひ。お互い頑張りつけ」

ディオと別れ、シオン宅へ急ぐ。それにしても空き巣か。うちはいつも誰かいるだろうし安心かな。

「ただいま戻りました」

「おかえり。これから大家さんと二行くから、留守番してて

会うなり出掛けるシオンさん。

そんな簡単に家を空けてもいいのか？

依頼で来てるとはいえ俺は他人なのに。別に何かするわけでもないけど。

とりあえず引っ越し作業進めるかな。

あ、でもダンボールとかないよな…この世界じゃ木箱とか樽で運搬

すると考えるのが妥当か。
使えそうな容器、あればいいんだけど。

第十五話 幽靈をひらひしゃい

二階に上がる階段を見つけ、二階にあがつてみる。

階段をあがつたところで振り返ると、隅に木箱が山積みされていたのを見つけた。この木箱を使えばなんとかなりそうかな。

木箱の目処がついたので、次は部屋に目を通す。

二階には一部屋あり、シオンさんの話によれば御両親が使っている部屋と物置代わりになつてている部屋で中には各地を回つて収集された品が置かれていて、さながら展示室の様相を見せていた。

「なんか博物館に来たみたいだな」

部屋には風景画が数点壁にかけられていたり、用途のわからないアクリセサリーのようなものがガラスケースに入れられてたり。これをいちいち運び出すのは大変そうだ。

美術品なんかは衝撃に弱いから、注意が必要だし。

タンスとかテーブルみたいなでかいだけのを運び出すには苦労しないんだけど、割れ物ばかりだときついだろうなあ……

それにもしても、幽靈なんて本当に出るのかなあ。

幽靈物件とか日本じゃお祓いをしたりお清めするイメージがあるんだが、ここは俺の知らない世界だし、今は幽靈を信じてないけど、魔法やら神様が存在するとなると、心霊現象もあり得そうで困る。もしかしたら、本当にできるかもしねえ。

そうなつたら駆け出し冒険者にはお手上げだし、素直に引っ越し作業に精を出すとしよう。

『我が力は増大す・マッスルインラージ』

美術品の扱いがわからないため後回しにして、大まかな家具を運ぶ準備を先にする。

魔法の効果を確かめつつ、大小様々な家具をまとめていく。

明らかに重たそうな物でもこの状態なら問題なく運べそうだ。ギルドで使ったときは自分で効果を消したので、実際の効果時間はわからない。

せっかくだし実験もかねて大体の時間を計りながら作業することにしよう。

念のため重そうなものから先に手をつけておこう。

そのまましばらく細々とした作業が続き、魔法の効果が切れ掛かる度に新たに掛けなおし、おおよその時間を把握していくと五分程度で強化された体は戻ってしまうことがわかった。

幸いにもデュオがみせた魔力切れのような疲労状態にもならず、気づけば三時間ほど経っていた。

外は徐々に夕焼け空になり、少々お腹がすき始めた。

「ただいま」

晩御飯について思考が飛びそうになつたとき、出かけていたシオンさんが帰ってきた。出迎えるため部屋を出て一階に向かう。

「おかえりなさい。結構遅かつたですね」

「引越しの打ち合わせと晩御飯の材料買つてたら思つたよりかづちやつて」

そういうつて籠に入った食材を見せてくる。名前のわからない果物、

野菜、少々のお肉。ぐう、とお腹がなるのがわかつた。

「ははっ。せつかだし食べていきなよ。一人でいるのもつまらないからね」

「いいんですか? ジャあお言葉に甘えて」

「その代わり手伝つてよね」

「…頑張ります」

台所に立ち食材を切るシオンさんにまず言われたのは、火を起こすことだった。これ使って、と渡されたのはよくわからない石一こ。どうすればいいかわからず睨めっこしていると、

「もしかして、火打ち石使つたことない?」

「は、恥ずかしながら…」

「火打ち石使えないなんてどんな生活してたのよ、あなた」

あきれた顔で火打ち石と呼ばれる物の使い方を説明してくれる。

ああ、火打ち石ね。子供の頃、河原の石と石をぶつけで火花だそうとして全く意味がないことに気づかされてからすっかり忘れていた。余談だが、火打ち石はフリントと呼ばれる硬い石を用いて火花を起こすのが一般的で、手渡されたこの石も専用の物で、とりあえずぶつければ火花が出るから、それで消し炭などの火口ほくちに点火すればいいとのことだった。

とりあえず、世間知らずなもので、と曖昧に誤魔化しておいた。嘘は言つていない。むしろ普通の世間知らずのさらに上をいつてゐるわ

けだし。

無事に火をつけて、料理の準備を進めていく。
完成したのは具沢山とは言えないスープ、それとサラダにパン。
感謝して晩御飯を頂く。

食べながら気になつた点について話をしていく。
いざ引越しになればとりあえず運ぶのは大丈夫。
あとは美術品らしきものの取り扱いについてだ。

「ああ、あれね。そこそこ値打ち物らしくて壊されるのは困るから、
あの部屋の物については私が運ぶわ」

「やつですか。じゃあ俺は他のところと重くて運べないやつを

「ええ、よろしくね。それで、今晩寝るところなんだけど一階の私の部屋でいいかしら?」

「別にどこでもいいですけど…ん?」

おかしい、聞き間違えたか。今シオンさんの部屋がどうとか聞こえたが。

「え、あのシオンさんのお部屋ですか?俺が寝るとこやつて

「そうよ、幽霊問題に関するも、私が聞いたのは部屋で寝てるとき
だつたんだし同じ場所じゃないと」

「あーやつですけど…いいんですか?」

同じ部屋で、と言ひ掛けて、こちらにひびひつ微笑みながら

「あ、でもベッドじゃなくて床で寝てね。それと私が一階で寝てる間に部屋を物色するのもだめだからね？」

うん、まあそうですね。わかつてましたよ。はは。

夜はあまり騒がしくしたら近所迷惑とのことで作業は中断し、寝床の準備をしておいた。

地球でいう西洋文化なため、床を雑巾で水拭きし、毛布で寝転べるよつに掃除する。

部屋の明かりはランタンや蠅燭といった消耗品なので、夜更かしはできないし、とつあえず時間が過ぎるのを待ちながら幽霊対策を考えておくことにした。

シオンさんには世間知らずのレッテルを貼られたので、開き直つていろいろと質問をすることにした。

それでわかったのが幽霊を含めたアンデッドと呼ばれるモンスターのことである。

人に限らず生物全体の死や不幸、恨み辛みなどは負のエネルギーを発生させ、それはときおり生きる者に害をなす存在として現れる。御伽噺のようなものには死者の行軍や死者の都など、ぶっちゃけホラー話が半分実話になっているものまであるらしい。

もつともこいつた存在は、靈感がないと倒せないわけではなく、魔法で対処可能かつ実体がある相手なら殴り倒すこともできるので、地球で考える悪霊や惡魔といづれはちょっと変わってるモンスターーという認識でよさそうだ。

ここで問題なのが、この家に現れる幽霊である。

これがこの世を彷徨う魂なのかアンデッドに属するモンスターの類なのか。前者なら神様にお祈りという神官任せになるだけで特に問

題はないが、後者なら無用心に熟睡するわけにはいかない。

幸いシオンさんはまだ襲われてないので安心だが、念のため今晩は寝ずの番をすることになる。

ここまで話して時刻は10時くらいだろうか。

幽靈騒動のおかげで寝不足だつたとシオンさんはさつと一階にあがってしまった。

こちらも寝床で横になりながら今度はひとりで幽靈対策を考える。今の俺は武器はなく防具もない。

できるのは駆け出しレベルの魔法少々であり、この状態で戦うとなると、筋力をあげて近くにある包丁なり箒なりでぶん殴るか、火事を覚悟でファイアーボールを撃つか、アイスエッジを撃つことしかできない。

お金がないため武器・防具はまだ集まらないし、戦闘技術もすぐには身につかない。

となれば、荒事対策のために早急に魔法技術を上達させる必要がある。

幸い魔法の構成要素であるルーン語にはある程度馴染みがあるし、実験と実践を繰り返していくしかないだろう。

そういうえば、クレアさんが使ってくれた回復魔法も習得できるかな。

信仰心が1しかないけど…。

いつそ呪文だけ流用して魔術呪文にしたほうがいいかもしれん。

あとは新しい魔法だな。特に身を護る術となる魔法。直接的なのが盾や鎧、結界で概念的なのが守護や防御といったところか。

英語ならシールドにアーマー、バリアーにディフェンス、ブロック、ガードあたりが対応してそうだ。

ゲームだと膜つて意味でスクリーンも使われた記憶がある。

候補となる単語はおいといて、求める効力についてどうするか考え

る。

身を護る防具代わりになるのが重要だが、自身が理解・想像できるようなものでないと魔法は発動しない。絶対防御壁なんてものはおそらく無理だ。

いくらファンタジーが可能になるからといってイメージが難しい。それこそ神様に発動プロセスを丸投げしてようやく可能性が見える代物だ。

となると、衝撃吸収を元にした障壁や火や水などの他の要素を媒介としてエネルギーを分散させるものを連想したものがよさそうだ。衝撃吸収のイメージは何がいいだろう。

卵が割れない低反発クッションとかテレビでやつてたのを見たことがある。

他にはゴムとかスライムとかは打撃を無効にするなんてのが定番だ。しかし、その仕組みについてはどうなんだろうか。

これもまた難しそうだ。

仮に理解できてイメージも可能になつたとして、次は魔法の実体化についても疑問が出る。

「筋力アップは直接体に作用してるみたいだけど、概念的な物も扱えるのかなあ……」

身を護る魔法が発動したとして、盾や鎧のように実体があるものを身に付けることになるのか。

それとも、その効力だけが一定時間得られるのか。

鎧や武器を召喚して身に付けるのもかつこよくていいのかもしれないけど、重かつたり動きを阻害して大変な気がする。できれば概念だけを効果として得られれば嬉しいんだけど……

うーんうーんと悩み続けていると頭が疲れてきたのか、徐々に睡魔

が押し寄せてきた。

時間はもう深夜といつていいだろう。

これじゃあ朝まで起きてるのは大変だなと思っていると、カツーン
と、何かが響く音が聞こえてきた。

第十六話 お化け騒動の決着

『カツーン…カツーン…』

明かりは消えて暗がりな部屋の中。窓から差し込む月明かりのおかげで、目が暗闇になれてるのもあって一応辺りは見える。

本当なら異変があつたらすぐに明かりをつけるべきなんだろうけど、得体の知れない音に対する恐怖でその場から動けずにいた。背筋がゾクゾクとするのを感じ、毛布に背中を押し当て心を落ち着かせる。その間も音は繰り返し響いている。この音は一体どこから聞こえてくるんだろう。

これがシオンさんの言っていた幽霊のことなのか？

怪談話で、『家鳴り』というのを聞いたころがある。建物が軋む音が聞こえてきて、それが何かいるのではないかと恐怖心を煽つてることだ。

気温の変化やねずみなんかのせいに発生した音でも夜中に聞こえてくると人間は得たいの知れない恐怖を感じてしまう。では、これもその類なのかと考えがよぎつたが、明らかにおかしな点に気づいた。この音は、完全とは言えないが同じような感覚で繰り返されていて、僅かにではあるが徐々に大きくなっている。

そして、音の出所は部屋の外、シオンさんと一緒に食事をとった台所あたりから聞こえてくる。

いつまでもここでじつをしているわけにもいかない。

金縛りにでも遭えば目を閉じてガタガタ震えながら一晩過ごすのだが、生憎と、音が聞こえてくる点を除けば他に異常はない。念のため、『筋力増大』を自分に掛け、ファイアーボールなどの呪文の詠

唱を頭の中でもう一度予行演習し、覚悟を決めて部屋からである。

かなり怖いし本来はここまでやる必要はないかもしれないが、音が聞こえたくらいでは幽霊認定は難しく引越し交渉にも問題があるのでないか、という考え方もあるって幽霊の正体がなんなのか調べなければ明日シオンさんに何を言われるかわかったもんじゃない。

部屋のドアを首を立てないようににゅつくりと開け広間の様子を伺う。特に何もなさそうだが、月明かりが遮られ暗くてよく見えなかつた。蠅燭に火をつけてこようかと思ったところで、あることを失念していたことに気がつく。

「ああ、気が動転して忘れてたよ…『我が命に従い道を照らせ… フェアリー ライト』」

魔術師ギルドで使ったときは異なり、光の玉を経由することなく最初から妖精の姿で現れるように呪文に手を加えた。予想通り、詠唱の完成と同時にあの時姿を見せた妖精が現れる。

「それじゃサポート頼むよ」

一言声を掛けると、返事をするように俺の周りを一周する妖精。

俺が使った魔術は光源を出すものだったはずだから、この子も本物の妖精ではなく意思とかはないと思うけど一人ではなくなつた気がして恐怖心がいくらか和らいだ。

周囲を照らしてもらいながら音の発生地点に近づく。

どうやら足元、地下から音が聞こえてくる。

そして、近づくにつれて大きくなるのは音だけではなかつた。

カツーンとなつていた音はよく聞けばカン、カンと打ち鳴らす音で、それ以外にも振動が感じられた。もしかしなくとも、地面の下に何かいるのではないだろうか。

一番音と振動が大きくなるところに見当をつけ床に耳を当ててみると、音はもう耳に痛いくらいだつたが、その音に紛れて人の声も僅かに聞き取れた。

「大脱走ながらのトンネル工事やつてるみたいだな、なんて落ち着いてる場合じゃない。」

幽靈騒ぎの原因はわかつたが、なぜ深夜に人様の家の地下を掘つてゐやつらがいるのかという新たな問題が発生した。とりあえずシオンさんをたたき起こしてこのことを伝えないと。

バキッ

「うひうおおおおおおおおおおおおおおおお...」

いきなり立つていた部分の床が抜けて2メートルほど下に落下した。こんなアクシデントに対応できるはずもなく、見事に着地に失敗して盛大に尻餅をつく。

「イツつてー...」

激痛に涙を浮かべながら顔をあげると、そこには筋骨隆々としたスキンヘッドのおっさんが一人。手にはつるはしとシャベルが。突然現れた俺を見て呆然としているようだ。

周りを見ると目の前はおっさん一人、左右は土壁、後ろはトンネルが続いている。

ここまで理解したところでおっさん達が話し始めた。

「…おい、ここの上は空き家の庭じゃなかつたのか？なんで人が降つてくるんだよ」

「お、おかしごつすね。距離は間違つてないと思つたすりけど」

「バカ野郎！ちゃんと空氣穴用の目印付けとけつていつただらうが！適当に掘り始めるからこいつなるんだよ！」

「いや、あつてると思つたんですよ！ただちよつとだけずれただけで…」

「ふざけんなー危づく生き埋めになるかと思つたわー！」

ギヤーギヤーと口喧嘩が始まつた。

なんだこの状況は。

会話の内容から推測するに、あの家の地下から空氣穴を作るために堀りあげたら俺がいたせいで崩れ落ちたのか？異世界だし土台工事がしつかりしてないのは仕方ないか…

「まあこいつなつちまつたもんは仕方ねえ。面倒が増えたが田撲者には消えてもらひとするとか」

え？

「親分にばれる前に片付けないと、またぶん殴られますしね」

は？

そういうて凶器に変貌したつるはしとシャベルを手に、こちからこち

じり寄つてくるおつやん。

そうだよな。こんなところで余つやつが真人間なわけがないんだ。
身の危険を感じてすぐ様そこから飛びのく。

身体強化のおかげで尻餅状態からでもパッと起き上がれたのは幸い
だった。

ブンツと田の前を凶器が通り過ぎ地面に叩きつけられる。

「なんだ、見た田の割りによく動けるじゃねえか」

「そんな」と言われても嬉しくもなんともない。

「いきなり何するんですか！？犯罪ですよー。」

殺されかけた相手に「犯罪ですよー」というのもどうかと思つたが、
問答無用で反撃するのは小市民である俺には難しかった。

「アア？ 犯罪なんてとつてやつてるよ。数え切れなーくらーなあ」

「なんたつて俺たちは泣く子も黙るぞーー盜賊団ですからね」

盗賊団の方でしたか。こことはトイオが言つてた空き巣つてこいつ
らなのか？いやしかし、空き巣と人殺しではだいぶ差があるわ。

「あの、空き巣の方たちですよね。人殺しはちょっとやめておいた
ほつが…」

「ぐつ。空き巣なのはその方が楽に盗めるからで、別に人殺しを嫌
つてゐつてわけじゃないんだぜ」

そう言いながら、つるはしを振りかぶりにやにやと笑つてゐる。ど

「やうやく穩便に済ますわけにはいかないよつだ。

「ナリナリとなら…仕方ないですな」

「おうおう。仕方ねえ。だから…ソレで死んどけ！」

それほどよりも速く、そして踏み込みは深く。
確実に殺しにかかつってきたおっさん改め盗賊その1。
強化済みの今の俺なら腕で防げば、大怪我はするだろ？が死にはしないだろう。
筋肉の強化はそのまま肉体の頑丈さに繋がるからだ。
まあ、そんなことするくらいなら逃げの一 手だが。

最初の攻撃を避けた時から、こうなる予感はしていた。
だから逃げるための準備も欠かしていない。
この場で撃退のために詠唱しても、間に合わずにやられるだろ？
なにせ漫画みたいに戦闘中に長い台詞をいうなんてのは現実的に有り得ない。
だから、今言えるのはシンプルな一言だけ。

『光れ』

その瞬間、頭上から飛び出してきた愛らしい妖精によつて、地下のトンネルは束の間眩い光に包まれた。

「ぐうう、田が」

キック田を閉じ、さらに手でしつかり覆つっていたおかげで、田の前の苦しんでいる盗賊一人のようにならずに済んだ。この粗末な地下トンネルはところどころに蠅燭で明かりが灯されていくくらいで、

どちらかといえば暗いほうだ。

余計にこの明るさは耐え難いはずだ。

失明の危険があるため完璧とはいえないが、暴徒鎮圧にはやはり閃光は優秀だな。

とりあえずある程度の無力化には成功したが、少ししたら復活するだろう。詰めの作業に取り掛かるとしよう。

『我が纏うは紫電の鎧・エレクトリックスキン』

詠唱が終わり、周囲にバチバチと火花が現れる。結構痛いかもしれないが、反省の意味も込めてあきらめてもらおう。

「それじゃあ、いきますよー」

まずはつるはしを振り回していたおっさんの方に。セーの、と両肩に手をおぐ。

「ぎゃあああああああ

「あ、あにき——————」

ドサッ!と氣絶して倒れる盗賊1。

安らかに眠れ。

そもそもて目覚めたら罪を償え。

その後もう一人の盗賊2のほうも電気ショックで氣絶させる。

対象に直接触れないと使えないけど、まあ悪くない魔法だったな。

当面の危機は去ったが、どうしようか。

このままトンネルを進んで、残りの盗賊もどうにかするところのもありだが危険だらうな。

とりあえず俺にできるのはここまで。

一度家に戻つて夜警の人を呼んでこよ。

ぐつすり寝ていたシオンさんを起こして事情を説明し、パトロールしていたディオ達に連絡をいれてもらつた。

ロープで縛るやり方を知らなかつたので、目を覚ましそうになるたび、電撃をお見舞いしておいた。やまあみる。

現場に到着したディオ含む冒險者達によつてトンネルの先の空き家を根城にしていた残りの盗賊一味が一網打尽にされ、やつと一息つけると思つた頃には夜が明けよつとしていた。

「フュウジ。お手柄だつたじゃんか」

「まさか盗賊に絡まれるとは思つてなかつたよ、ほんと

「へへつ。おかげで依頼が無事達成できたし感謝するぜ」

「いつも教えてもらつた魔法が役に立つたよ、ありがとうディオ」

冒險者ギルドの広間でディオと談笑する。

その後、引越しの目的がなくなつたため依頼は完了し、無事初仕事を終えることができた。

盗賊団確保に一役買つたとして冒險者ギルドからも報酬が得られたが、それはシオンさんに渡しておいた。なんせもともと依頼を出し

た原因が盗賊団にあつた上、床にまで穴を開けられていは損しかして
いない。

依頼の報酬は受け取らないといけないため、床の修理費と依頼の報
酬分を盗賊団がらみの報酬から差し引いた形になる。
それでも銀貨10枚が得られたんだし満足しておいつ。

「じゃあまた何かあれば

「おひ、元気でな~」

ディオと別れ、アンナとリゼルさんの待つ家に帰る。

時刻は朝10時くらい。薬剤店の受付をしてるアンナが見れるかな。
土産話もあるし、今日は家でゆっくりするish。

と思っていたが、家にいるなら手伝えとリゼルさんこしき使われる
ことになったのは言つまでもない。

第十六話 お化け騒動の決着（後書き）

初依頼達成でちょいだし一区切り。

閃光の効果は、軍隊で使われる閃光手榴弾がイメージしやすいでしょうか。

「閃光手榴弾を投げ撲なつちゃった軍隊の突入訓練」というのが面白いので一見の価値あります。

ここまで読んでくださりありがとうございました。ご意見・ご感想・評価等、お待ちしております。

第十六・五話 一方、地下では

「ガン、ガン、ザク、ザク

「まだつかね、兄貴」

「ガン、ガン、ザク、ザク

「いや当分終わんねえだろ」

二人のおっさんが狭いトンネルを堀り進めている。トンネル内は薄暗く最低限の光量しかない。眼下、街から出るために秘密の地下トンネルを製作中だ。

「なんでこんな面倒なこと…」

「仕方ないだろ。門が使えなくなつちまつたんだから…誰かさんのせいでな」

「う…」

先日、忍び込んだ豪邸にて金目の物を頂戴したところ、ペアを組まれたコイツが見つけた宝石箱を持ち帰つたはいいが、鍵が開けられず叩き壊したら魔法の罠が仕掛けられており、アジトにいた仲間全員が呪われてしまった。

その呪いは、近寄ると対応した魔導具が光るというものなんだが、そのせいで仕事がやりにくくなり、さらに街の出入口に検問がひかれ、逃げるのも難しい。

その職として、親分から言に渡されたのがこの穴掘りである。

「ふう…ちょっと休憩するか」

「じゃあ、あつしも」

「ばか、お前は休まず働け。いつまはお前のじじに付き合わされてんだ。」

「ええ~そんなあ…」

「…わかったよ。とりあえず息苦しいから空[穴]だけ先にあけちまおう。したらじまひらく休憩だ」

「合点承知」

他の連中は手伝いもせず、ぐつたり寝てるんだし、無理することもねえ。あと2日も掘れば外壁を超えるはずだし、ボチボチ頑張るとするか。

「兄貴、ソノサクサク掘れますね」ザクザク

「大穴あけないよつに気をつけろよ。小さい穴でいいんだからな」

「くへっわかっていますって……ん、なんか固いのが」ガチッ

「くそつーあけつての」ガチッガチッ…バキッ

バラバラと周りの土砂が崩れ落ちる。

「お二、気をつける。ソリ土が柔らかいみたいだぞ」

「いや、でもなんか硬いやつが邪魔で……」ガチッガチッ……バキッ

「お、おい！ それ以上は」

バ
キ
ン

「あ、やつと開い

「うわああああああああああああああ！」

ああ、なんで俺は「いつと組まれたんだろう。」
や……「んなことには。」はあ……

『盜賊1の独白より』

第十七話 買い物ついで

盗賊騒動の翌日。

「それじゃ、いつできます」

「こつてらっしゃーい」

Hプロン姿のアンナに見送られ今日も冒険者ギルドに向かう。元気である。

可愛らしい姿に癒され、活力がみなぎってくる。

どうやらそれは俺だけでないらしく、リゼルさんも張り切っている。

ギルドに向かう最中、ポケットからギルドカードを取り出し眺める。昨日までと変わったところが一箇所。ランクを示すD5という表示の下に小さく10という数字が加えられていた。

話は昨日まで遡る。

「い」苦労様でした。無事に達成できましたね

受付に座るリルザさんに依頼の達成書を手渡す。

これは依頼主が所持してるので、依頼が達成されたと思われたとき依頼主から冒険者に渡されるものだ。

「おかげさまでなんとか。予想外のおまけもついてましたが

「ふつふつふ。聞いてますよ～盜賊団の検挙に一役買つたつて。さすが魔術師です」

「の卵ですよ。で、これで報酬をもらひるんですか?」

「ええ。ロランクの依頼達成おめでとうござります。ギルドカードを提示してもらひて構いませんか」

そう言われて、いそいそとポケットを漁る。

「えつと…あ、あつた。はい、どうぞ」

「あつがとつござります。では失礼して」

べたり、と台に置かれたカードに向かつて判子のよひなものが押される。

「はーい、お返しします。評価点が10点になりましたよ

「評価点?あー100点貯めるやつですか?」

「はーい。依頼を完璧にこなしたと見なし満点です。この調子で頑張つてくださいね」

満点とはどうこいつだろ?。点数に何か影響されるのかな。

「完璧じやなかつたらどうなるんですか?」

「簡単に言えば10点が1点になつたりします。だから依頼主には誠意を持って対応してくださいね」

つまりとにかく、文句があると達成書に注意書きが加えられ、それに伴って減点されることもあるらしい。

「なるほど。気をつけます」

「依頼主を脅したり、捏造なんでしたら大幅減点や依頼受理の停止などの罰則がありますからしちゃダメですよー」

「へいへい」

そして、初仕事は無事満点の10点となりカードに記載される」となつたのだ。

この計算だと最短で10回の仕事でランクがあがり、50回でランクになれる。

でもまあ依頼を完璧にこなすのは難しいって話だし、実際はもっとかかると思う。

冒険者ギルドに入ると、カラソカラソと扉につけられた鈴がなる。中には依頼書を眺める冒険者や、パーティで談笑する人達もいる。受付には昨日と変わらずミルザさんが座っている。

こちらに気づいたようでニコニコと手を振ってくれた。社交辞令で俺も小さく手を振り返す。

「さて、今回は自分で探さないとな」

掲示板に近寄ると、さつきまで眺めていた冒険者らしき人とすれ違う。

手に一枚の依頼書を持ち、受付に行つたのでその依頼を受けるのだ
る。

他人の仕事がちょっと気になった。

モンスター退治とか受けるんだつたらちょっと憧れる。

男子として。

まあこつちは変わらず安全第一ですけどねー。

『依頼内容：討伐』

R:D3。街の外の魔獸を減らしてほしい。対象はラージマウス、
ホーンラビット 報酬は一頭あたり銅貨10枚 識別部位必須

これは屋外の実戦か…バス。
でも識別部位ってなんだろう。

『依頼内容：採取』

R:D4 指定した薬草の採取。街の周辺部に自生。対象はレッド
ラベンダー、ブルーラベンダーを規定量。報酬は銀貨一枚

ラベンダー…あるんだ…あ、でも名前しか知らないや。
どんな見た目だっけ。

見た目がわかれれば楽そうでいいんだけど、報酬はおいとくとして。
ちょっと聞いてみるか。

困ったときのミルザさん頼みや。

受付が空いてるのを確認してミルザさんに質問する。

「ああモンスターの識別部位ですか。あっちはテーブルありますよね。その本棚に備え付けの辞典があるので確認しておいてください」

「あんなところ……あと、この記号についてなんですが」

「Rはランクの意味で、横のランクは依頼の難度を表します。現在のランクより3つ以内の範囲のみ受理可能です」

「なるほど。じゃあ俺はR3までなら受けついんですね。教えてくれてありがとうございます」

「ふふっ新米なんですからいろいろと聞いてくださいね」

「わーん、でもせうことは登録のときに説明するもんなんじゃ」

「あ……はい、次の方どうぞー」

誤魔化された。

なんだか他にも知らされてないことがありそつだが、いいか。

本棚から辞書を引っ張り出し、テーブルにつく。

ひとつは一般的なモンスターについて記述、スケッチした魔物図鑑。もうひとつは、これまた一般的な植物や素材について記述、スケッチした植物図鑑。

ゲームの攻略本のモンスター一覧を眺めるようで楽しそう、と思いきや情報はあくまで主観的なもので絵も上手くないためつまらなかつた。

まあ、実際にはこれが限度だろうし、仕方ない。

とりあえず、ラージマウス、ホーンラビットは名前どおりのやつだとわかり、識別部位はねずみの尻尾と兔の角と覚えた。

他に重要な点として、素材としての価値についても載っていた。ラージマウスについてはまったく価値がないが、ホーンラビットについては角が薬の一種、肉は食用としての価値がある。

参考までに図鑑の最後に載っていたドラゴンなるものについては、素材価値＝全部と書かれていた。

ねずみとの格差にちょっとほろつときた。

目当ての植物図鑑に関しては、調べるのが簡単だからか、綺麗にスケッチされしつかりと図鑑の役割を果たしていた。

二種類のラベンダーについても絵、自生区域に田を通したから問題ない。

今日はラベンダー集めの依頼を受けることじつよ。

「それで帰ってきたわけだ」

「ええ、まあ、はい」

目の前にはリゼルさん。アンナは今店先で受付をやっている。その後、依頼を受理してもらつて裏面の地図を見ながら移動するとなんだかよく知つてる道で。

そして案の定たどり着いた先は仮の我が家であるリゼルさんの薬店だった。

「まあ依頼は誰が受けても変わらないか。あんたでもできるでしょう」

「ラベンダー一種類とも規定量集めればいいんですね」

「ええ、そうよ。花の部分を集めてもうえばいいわ。はい、これ」

そうこうして巾着袋のよつなものを一つ渡される。

「それ一つこっぽににしてきてちょうどだいね。多かつたら報酬に色つけてあげるわ」

「居候のみとしては頑張らざるを得ないです……」

「どこのでも群生してるから集めるのは楽だと思つけど、街道を離れるなら注意しなさい。安全圏は決して広いわけじゃない」

「やつぱり街の周辺にもモンスターは出るんですか？」

「出るに決まってるじゃない。街の外に出るならそれなりの準備をしていきなさいよ」

それなりの準備、ね。

E・素手、E・布の服（支給品よりアラベル一家）E・装飾品なし

足りない、圧倒的に装備が足りない。

今自由に使えるのは銀貨クレアさんからもつた残り銀貨5枚と昨日の報酬の銀貨10枚、合わせて15枚。

これで武器と防具は確保しなければ。

「ちなみに、このままいつても大丈夫ですかね？」

「…間違いなく街の出入り口の衛兵に止められるわね」

これでケチることは許されなくなつた。

武器は包丁でもなんでも誤魔化せるだらうし、見ためがちやんとした防具を買いにいこう。

いくらくらいくらいするんだらうか…

第十七話 買い物について（後書き）

副題に番号振つたり、本文を書き直したりなど手直し中です。

書き方があかしい、わかりにくいなどの感想お待ちします。参考にさせていただきます。ではでは

第十八話 初装備

現在の全財産は、銀貨15枚。

この世界の物価についてはまだ把握していないが、銀貨一枚あれば一日分の食料は十分得られる。

食事に関してはリゼルさん宅にお世話をなっているため、銀貨数枚をキープしておけば残りは使つてしまつて構わないだらう。さつそく、必要なものを探しに街を練り歩こう。

家を出てまず向かうのは、アンナが言つていた市場ということじうだ。武器や防具を見る前に、身の回りのものを探すことにする。例をあげれば、財布やリュックだ。

今も銀貨は服のポケットにそのまま入つている。ついでにギルドカードも。

少ししてたどり着いた市場は昼前といふこともあって、とても活気付いていた。

肉や魚、果物に野菜を売る屋台があつたり、ポーチのような小物を出しているところもある。

武器や防具といったものは見当たらぬが、生活に関係するものは一通りここで揃えることができそうだ。

「なあ、そこのあんちゃん。買ってかないか

ふらふらと辺りを眺めながら歩いていると、肉を燻製にして売つている店の親父に声をかけられる。

「あーえつと、すいません。まだ買えないんです」

「まだ?」

変な断り方をしたせいで首をかしげる店主。

「実は財布なくしちゃって。財布がないと小銭が持ちきれないし」

やつこつて、ポケットから銀貨を見せる。

「財布をなくすとは、抜けてるなああんぢやん。財布なら、ほれ。
向ひの店で使えそつのが売られてるよ」

笑いながら店主が指をさした方を見ると、ベルトやポーチ、ポシヨ
ツトなどが並べられた屋台が見えた。

「安くしてやるから、財布買つたらまた寄つてくれよ

「ええ、そのときはひやんと」

店主に軽く頭を下づけ、教えてもらつた店に足を向ける。

まずは財布となる入れ物を選ぶ。

どれにしようかな、といくつか手にとって考えているとの屋台の
番をしている少女に声をかけられた。

「いよいよ、どのよつな物をお探しですか?」

「ああすいません。財布を探してまして」

急に声をかけられて少し驚き、持っていたものを元の場所に戻す。

「見かけない方ですが、冒険者の方ですか？」

黒髪を見ながら訊ねられる。
やはり黒髪は目立つのか。

「ええ、つい先日から」

「でしたら頑丈な物のほうがよろしいですね。」

そうこうで並べられている商品の中からひとつ取り出す。

「こちらは破れ難く、紐で縛つておけるのでお勧めです。街では首にかけておけばスリの心配もありません」

ポシェットのような外見でカードもしまえるようすで、説明を聞く限り悪くはないそうだ。

「じゃあ、それにします。いくらでしょうか？」

「銀一枚でどうですか？」

「わかりました」

ちょっと高いかなと思つたけど、ポケットから銀貨一枚を取り出す。すると、少女は驚いた顔でこちらを見て「ここに気づいた」とに気づいた。

少し不審に思ったので聞いてみる。

「あの、どうしましたか？」

「ああ、いえ。値切られずに買われたのにすよっと驚いてしまって…」

納得した。

そういえば、先ほども『どうですか?』と聞かれていた。
ついつい提示された値段で買うのが当たり前だと想っていたが、文
化の違いはどこにでもあるもんだ。

ここでは密と店で値段の交渉を行うのが当たり前のだろ?。
しかし、こまさら撤回するのは恥ずかしいだけなので顔にはださず
支払いを済ませた。

支払いを済ませたところで、リコックも必要なことを思い出した。
せっかくなので、このお店にあるか聞いてみる。

冒険者向けの荷物入れも扱っていたようで、一通りは交渉によって
銀貨2枚を1・5枚にしてもらつた。
もちろんお釣りは銅貨だ。

「ありがとうございましたー」

少女に見送られて店を後にする。

銅貨50枚は少しかた張る気がしたので、さつきの親父の店にお邪
魔することにしよう。

「ヒーリー、武器とか防具つてこの辺に売つてないの？」

一口サイズの燻製を齧りながらの情報収集。

約束どおり値引きしてくれた親父に、ついでとばかりに質問していく。

「わういったのはこの通りにはないよ。向こうの通りに鍛冶屋があるから、その辺で探してみな」

「つか、ありがと」

「また買いにこい」

軽くなつた財布を確認しながら通りを抜ける。残つたのは銀貨12枚に僅かな銅貨。

言われたとおり、紐は首にかけて懷こしまつ。

これでようやく武器と防具を見て回れる。

通りを渡り、やつてきたのは先ほどまでいた場所とは違ひ少々荒れた感じのする場所だ。

ここは酒場、武具、鍛冶などが存在するらしく、冒険者向けの地区になつてゐるようだ。

そういえばこちいらに来てから、アルコールをとつてない。

もともと酒は飲まないほうだったので気にならなかつたが、酒場にお世話になる時がくるのだらうか。

できれば酔つ払いに絡まれるような治安の悪い場所でないことを祈る。

通りを進むと、見栄えのよい剣が飾られた店が見えた。

近くには『武具をお探しなさいこちらへ』と書かれた看板も立てられてるので、ここで間違いないだらう。

窓越しに見える展示用らしき武器は、無骨な感じのする斧や棍棒、大小様々な剣が並べられており、どれもしっかりと望まれた役割を果たすことができるといつ迫力があった。

武器の良し悪しなどわからないが、ここにあるのは命を左右する存在であることは間違ひなかつた。

ギィッと音のなる扉を開け店内に入る。

奥のカウンターには壮年の筋肉質な男性が一人。

赤毛が攻撃的な印象を与えてくるが、雰囲気は落ち着いていたんだいな感じだ。

チラツとこちらを一瞥し、興味ないかのように視線を戻す。

近寄りがたい雰囲気になってしまったが、こちらは武器なんて買つたことも使つたことすらない身である。

そういう場合は店の人聞くべし、といつのがショッピングの定番であるので、この男性に話しかけようと口を開いたとしたときである。

「悪いが、ここにお前が使えるような物はない

落ち着いていて、諭すような口調で話しかけられる。

開幕で売買拒否に陥つて、一瞬呆然とする。

何を言えばわからず、おろおろとしていると続けて声が掛けられた。

「とはいへ、お密せんであることには違ひない。され、用件は聞こ

う

と、促されよいかげく武器と防具を探してこることを伝えた。

「なるほど。最低限の装備で構わないと」

「はい。今は街の外に出るのが目的なので」

「それであれば見繕つてやることができるが、君の体ではやはり武器を持つには難しい」

もしかして、店に入ったときにこちらの実力を見抜いたのか。
それであれば納得だ。自分でも剣を振るう力も技術もないのは承知している。

「わかつてます。魔法を扱うので問題ありません。まあ…体は鍛えたいですけど」

「そうか。では防具についてだが、少し待つていろ」

そういうてカウンターの裏に消える店主。戻ってきたとき、持つてこられたのは一着の防具。

「革製の防具を補強したものだが、近隣の魔獣程度の爪と牙を防ぐなら十分だろう」

軽さを重視しているのだろう。頭を守るのはヘッドギアといつか、鉢巻のような外見。

手はライダーグローブのような腕の一部を守る形。体を覆う防具も下半身を覆う防具も、急所を重視して保護するデザインになっている。

「軽い…」

「やうだらう。鉄製の物に比べ、防御力は落ちるが重くては満足に動けんだらう」

「店主のこいつは、今の俺にはこの防具が最適だらう。

「おこへらでじょつか?」

「革製一式で銀10枚。交渉は受け付けん」

防具で銀10枚消えると、手元には銀2枚しか残らない。
しかし、この防具なら文句は言えない。
店主の話も間違つてなどいなさそうだ。

「わかりました。ではその値段で買います」

「よし、サイズを合わせてやる」

10分後、そこには防具を着込んだ姿の俺がいた。

防具をつけるつてのは剣道着を着たときくらいじゃないだろうか。

「問題ないか?」

「はい、ぴったりですね」

「やうか。といひで、お前はこの店へくるのは初めてだな?」

「? ええ、そうですが

「駆け出しへ対する鑑別だ。こいつをくれてやる」

ガタンとカウンターの台におかれる一本の短刀。

「こねは？」

「変哲もないダガーさ。生憎、お前が使えそつた武器はこいつへらいしかない」

「でも、最初俺が使える武器はないって」

確かに『こい』にはお前が使えるような物はおいてない』と面倒われた記憶があるのだが。

「もひつていいんですか？」

「ああ持つていけ。好きに使って構わん。剥ぎ取りや料理でもな。その代わり、いつかまた来い。ちゃんとした男になつてな」

「わうこい」としたら、ありがたく。また来ます

革防具についているベルトにダガーを差し、店を後にする。もちろん深々と頭を下げるのを忘れない。

店を出て扉を閉める。

「気配と見た日がこいつまで違う奴がいるとはな

店の扉が閉まる前にそつ囁かれたのが聞こえた気がした。

第十八話 初装備（後書き）

感想・評価お待ちしています。

第十九話 街の外へ

武器と防具は揃つた。

これでようやく冒険者として見える格好になつたかな。

正午を示す鐘が鳴り、賑わう食堂を横目に街の出入口に向かう。さつき燻製を齧つたからそこまで空腹ではないし、残つた路銀は僅か銀2枚。

しばらくは節約しなくてはいけないだろう。

外へでる門が見えてきたあたりで、月熊亭という看板が目にに入った。確かディオが泊まっている宿屋、だつたと記憶している。

今頃何をしてるのだろうか。

中にいるのか、それとも俺と同じでギルドの依頼を受けてるのか。

「ううこのを『噂をすれば』というのだね」

「よつ。今日もあつたなリュウジ」

後ろから声を掛けられて振り返る。

「やあディオ。ここんとこ毎日、顔合わせてるな

「そうだな。で、今何してる?」

「これから『外』に出るつもりだよ。薬草採取の依頼を受けてね

「そつか。俺も同じ。依頼は討伐だけども」

よかつたら一緒に行かないか、といつトイオの提案で臨時のパーティーを組むこととした。

トイオの受けた依頼は、例の鼠と兔の討伐で街の周辺をぐるっと回るつもりだつたらしい。

安全なところでは薬草を摘む人が多いため、満足に集まらない可能性があることに気づき、この提案は有難かった。

「なるほど、この世界のことが少しわかつたよ」

目の前に倒れるモンスター、魔獣ホーンラビットの亡骸を見ながらつぶやく。

一人で向かったのは街の周辺にある森、街道から離れたところ。人の手が加えられていない場所には、予想通りラベンダーの花と数匹の魔獣がいた。

外見は角の生えた兎、もつとも小学校の頃学校で飼っていた兎より一回りは大きかったが、そいつらが牙をむいてこちらに飛び掛ってきた。

好戦的でないモンスターがいるかもしれないが、確かにこの世界は危険に満ちている。

トイオは本来、戦士になるつもりだつたらしく、身の丈にあつた振りのショートソードを振るい、ホーンラビットに斬り飛ばす。年下の少年に前衛を任せるという、なんとも情けない状態だが、そこは向き不向き。

運動不足の現代人として割り切つて、安全を確保してもらつた後衛としての役割を果たす。

森の中、それにあの兎の肉や毛皮に価値ありとこいつのを思い出し、氷の魔法を選択する。

『模るは飛翔する氷柱・アイスエッジ』

魔力を吸い顯現した魔法は、鋭い氷の破片となつて目標へと飛ぶ。その数は3つ。

トスツと軽い音を立てて地面に突き刺さる。

残念ながら上手く当てるのは難しい。

「じつかりしてくれよー」

体を張つてゐるディオからツツ「ミミが入る。確かにこのままじゃ面目が立たない。

しかし、動き回る敵に対して距離をとつて撃つ魔法があたりにくいのは仕方ないだろう。

対処としては、近寄つて撃つか数を増やすか何かしら工夫する必要がある。

さて、ディオが一匹切り殺したのと俺が使つた魔法を見て、残りの兎どもは距離をとつて様子を見ている。
少し試してみるか。

「なあディオ。詠唱に合わせて一気に下がつてくれ

「一体なにすんだ?まあわかつたぜ」

これからやることを再確認して、詠唱を開始する。
同時に、ディオが下がり俺の方に向かってくる。

そしれ、それを見て行動に移ったホーンラビット3匹が追いかけてくる。

『まるは落下する無数の氷柱・アイシクルエッジ』

瞬間、魔力は言葉となり世界を改変する。

見上げれば頭上を覆う大量のツララが、先ほどまでティオがいた位置を中心広がっている。

洞窟にできたツララとは違い、宙にできたツララは重力に引かれて自由落下を始める。

ちょうど、前にでてきた獲物の上に。

気温が数度下がったような光景が、時間とともに修復されていく。地面に生えた無数の氷の花は搔き消えるように溶けていった。残つたのは穴だらけになつたモンスターだけだ。

「なんとまあ……」

正直、やりすぎた感がする。

やりたかったのは正面からの攻撃ではなく、視野外からの攻撃による不意打ちだったのだが。氷柱でいっぱいになつた洞窟をイメージしたのがまずかったのだろうか……

「なんか凄かつたな……魔力大丈夫か？」

以前、魔力の使いすぎで気持ち悪くなつたのを思い出したのか、こちらを気遣ってくれる。

「ああ平氣だよ。ただ……あれを見るほうがきつついかな……はは」

「識別部位を集めるのは俺だし、任せてくれよ」

そう言って残骸の剥ぎ取り作業を始めるディオ。
悪いがそちらは任せて、周辺のラベンダー採取に専念する」と元気よく。

場所を変えながら、同じようなことを続けていった。

魔法に関しては発生させる氷柱を数本だけに変更して、頭上を警戒させて動きが鈍ったところをディオが攻めるスタイルに変えた。ときおり直撃することがあって、完成するオブジェはあまり見たいものではなかつた。

戦闘が終わつて安全が確保されればまた周辺の薬草を採取する。その結果、夕方になるころには満足な量のラベンダーを集め終わつた。

ディオのほうもリビットの角や、なんどか大量にでてきたねずみ共の尻尾を集め、他の素材もカバンにいっぱいになつていた。

「俺は一度依頼主のほうに向かうけど、ディオは？」

「この依頼はあて先がギルドだから、特に寄るところはないぜ」

モンスターの討伐は一人で共同でやつたことだとディオがいつので報酬を山分けすることになつた。

それなら一緒にギルドに行こうとこつこつと、ディオをつれてリザルさんの店に向かうのだった。

「ただいま帰りました」

「あら、おかえり。そっちはなぜいらっしゃったの？」

「仲間のディオです。今日は一緒に依頼を

そこまで言ったところ、受付に立っていたアンナがやつてきました。

「おかえりお兄ちゃん」

そういって抱きついてくる。

過剰ではないかというスキンシップに一瞬固まるが、ただいまと返事を返す。

せつかくだし、アンナにもディオを紹介しようと横を向くとディオも同じよつと固まっていた。

「あつしめんなさい。いらっしゃの方は？」

「ああ」こつは友達の

「ディオ・キストといいます。どうぞディオと呼んでください、お嬢さん」

「お前大丈夫か、キャラ違つぞ」

「ディオさんですか、私はアンナ・アラベルです。アンナで構いませんよ」

「わかりました、アンナさん」

「いや、だから」

「ちょっとお兄さんをお借しますね」

ダダダッと俺を引っ張り、店の外に連れ出すデイオ。

「こつたこどうしたんだよ」

「ココウジ、誰だよあの子!...?」

「誰かと言われたら難しいんだが」

実際どんな関係かと聞かれても返答に困る関係である。

「いやだつてお兄ちゃんて、お前と全然似てねえし髪の色も...」

「まあ血は繋がつてないしな」

「まあかあんな子と兄弟プレイをしてくるなんて...」

「いや、だから落ち着けよ」

拉致があかないでの、何があつたのか説明する。

もうひん異世界うんぬんは抜きに、門番に話した内容をだ。

ディオは俺とアンナの関係を理解したのか、やつと落ち着きを取り戻したようだ。

「ココウジの親父さん、神様だな」

「故人にその評価はどうかと思ひそ」

「固い」と「うなよ兄さん」

「やつぱり落ち着」うか

面倒になつてきたので『アイシクルエッジ』の詠唱を開始する。

「『模るは無数の』わー、ちよつとまつた、[冗談だよ]冗談」

いろいろと疲れてきた。

「ならいいぞ。荷物もあるんだし、早くギルドにいかないと」

「おひ」

リゼルさんに袋を渡し、達成書を受け取りギルドへ向かう。
この時間は込んでるのか何人もの冒険者が広間に集まっていた。
受付も一人ではなく、何人かで分担しているようだ。

「すいません、依頼完了の報告に来ました」

「はい、承ります」

ミルザさんの姿が見えないが、裏で雑用でもしてゐるのだろうか。

「ギルドカードの提示をお願いします」

「あつ、はい」

以前と同じく判子が押される。

するとカードに変化が現れ、評価点10が20に变成了。今回も依頼は完璧と判断されたらしい。

「次の方、どうぞ」

「はーー」

並んでいたディオが依頼書とカバンをだして報告し始めた。

5分後、無事換金が終わつたようで、討伐数27体（ホーンラビット13体、ラージマウス14体）の銀貨2枚銅貨70枚を報酬として受け取り、半分を取り分として受け取つた。

「素材の分もいれると結構稼げたな」

ディオのほうはホーンラビットの肉や皮も換金対象にしたので依頼の報酬より実際は多い。

「討伐も効率的には悪くなさそつだなあ。一人でやる気にはならないけど」

「それじゃあ俺と一緒にパーティー組もうぜ」

「それもいいね。でも基本はまだ一人でやるよ

結局、お互に必要があれば助けを呼ぶということにして、もうしばらくソロで活動することにした。

他人の命を預かるには、まだ自分の力量が不明だからだ。
パーティーでの依頼となると危険度の高くなると考えられるので当然の考えだ。

ディオと別れ家に戻ると、リゼルさんに話があると呼びだされた。
いわく、アンナに付く悪い虫は実力をもつて排除すること。

俺にいわれてもなー

第一十話 波乱の兆し

「いつてきまーす」

「いつてらつしゃーい」

恒例となりつつあるアンナの見送りを受けてギルドへ向かう。まだ数日しか経っていないが変わり映えのしない光景。この世界に来てからまだ一週間程度だが、家と呼べる場所ができる声をかけてくれる人ができたことに感動を覚える。

この世界は地球とは文明の進み方に大きく差があるからか、またモンスターの影響で人工的な拡大ができないからか、自然が色濃く残っている。

そのため、空気は綺麗だし街の近くを流れる川の水はとても澄んでいる。

そして、住んでいるのはモンスターだけでなく、普通の動物も住んでいる。

街を歩けば、小鳥の囀りが聞こえ、街の一部では飼育されている家畜を見る事もできる。

モンスターがいなければ、きっと文明はより発展するのだろう。その先が地球のような科学に富んだものか、魔法によるSF染みたものになるかはわからないが。

この世界に対する考察をすすめるには、まだ知らないことが多すぎる。

自分が住む世界のことを知らないでいては、いずれ困ったことになる。

今後は、自分を鍛える以外にもやるべきことが多くあるだろ？

そんなことを考えながら、あつといつ間にギルドへ到着する。

今後やるべきこととしては、鍛錬以外にもクレアさんにもらつた支度金である銀8枚を返しにいかなければならぬ。

なるべく早く顔を見せろと言われてゐし、早くお金を集めたいものだ。

そしたら休日がほしい。

もつとも、リゼルさんのところにいる限り安息はなさうだが。家賃を要求されないだけましである。

ギルドの掲示板には、なくなりそうにない程の数の依頼書がびっしりと貼られている。

ギルドの職員の手によって、ランク分けされて貼られているので俺は隅のほうを見ればいい。

ギルドの依頼は、前回あつたように街の安全を守るために、ひいては人類全てのためになる討伐系の依頼のほか、武器や防具、薬などの素材を集めるための採集、収集系の依頼がある。

それを基本として、他にも輸送、護衛、調査など必要があればなんでも依頼となる。

最初の依頼も緊急性は低いが立派な依頼である。

受注可能な範囲はD5からD3までだが、Dランクのものは大抵が危険度が低く、特殊なスキルが必要とされないもので構成されている。

それがランクが上がるにつれ、緊急性の高いもの、危険度の高いもの、失敗が許されないものなど、依頼はより困難になつていく。

そして、低ランクの冒険者が上のランクを受けるのに制限があるようだ。高ランクの冒険者は低ランクの依頼を受けることに制限がある。

かつている。

そのため、依頼の中にはランクが設定されていない一般にフリーと呼ばれる種類のものも存在する。内容は、ある特定の技術を持つていたり、条件を満たせば可能となるような依頼だ。

ステータス 以上や魔力値がレッドライト以上といった制限が加えられているのが多い。

以上が今日、ミルザさんから新たに聞かされた内容である。

「じゃあこれなんかも、受けついんですね？」

「……ええ、問題ありませんよー」

手に取るのは、フリーに分類されていた一枚の依頼書。

『依頼内容：行事手伝い』

『明日行われる式典にて、働き手を募集します。詳細は現地にてお話しします。本日正午までにお越しください。報酬：5銀 領主館より』

「なんかさつき説明された内容と違いますが」

「うーん。明日までつていう期日があるから、依頼主の希望でフリーに分類されたんじゃないから」

「なるほど。ところで明日の式典って何ですか？」

「あれ？知らないんですか。明日はこの街の領主様をお祝いするお祭りがあるんですよ」

「お祭りですか」

「ええ、領主様にご子息がお生まれになつたので街をあげてのお祭りです。他の街からも多くの人人が集まるので、ギルドの依頼も街道警備や討伐のものが増えてますよ」

「こここの領主の人は愛されてるんですねえ」

「ええ、ひどい政治もないし街の発展を気にかけてくださる人ですから」

ちなみに、高ランクのところには屋敷の警備や領主の護衛の依頼が加えられているらしい。

報酬も十分だし、魅力的な依頼だ。
迷わずこの依頼に決定した。

「何者か」

「ギルドの依頼で参った者です」

街の中心にある領主の屋敷に到着し、門に立つ衛兵に止められる。

荷物袋から依頼書を取り出し、衛兵に見せる。

「確認した。まっすぐ進んで、左にある部屋で執事に詳しい話を聞くよ。警備が厳重になつてゐるからうひうするなよ」

「わかりました」

門を開けてもらい、庭の先にある大きな屋敷に向かう。中に入ると正面には一階につづく吹き抜けの大階段。左右に廊下がありいくつもの部屋に分かれている。言わされたとおり左の部屋に進む。

「すいませーん、ギルドの者ですが」

部屋の中には書類を手にお茶を飲む初老の男性がいた。

「ギルドの、というと依頼を受けた方ですかな」

「はい、この依頼を受けました」

衛兵にも見せた依頼書を取り出す。

「よろしい。では仕事の説明をしましょ。お座りなさい」

「はい、失礼します」

促され、部屋の中央にあるソファーに座る。

「ギルドの審査をクリアなさつてるのでお話ししますが、任せたいのは『子息の護衛です』

「……はい！」

第一十話 波乱の兆し（後書き）

じわじわとお気に入り登録件数が増えてきています。気づいたら100件超えました。読者の皆さんに改めて感謝を。

誤字脱字などは発見次第修正していくます、「意見」「感想もお待ちしております。

第一話から第三話を12月2日に大幅修正しました、といつても読めたもんじゃない所を変更しただけですが。

第一十一話 羅刹の行進

「あの、依頼書には行事手伝いって書いてあるんですけど…」

依頼書を確認しても確かにそう書いてある。

雑用かと思っていたのに、護衛という単語がでてくるのは予想外だつた。

執事さんは落ち着き払つた様子で、理由を説明し始めた。

「本来はこちから駒を用意したかったのですが、何分急なことで。まず依頼の目的からお話ししましょう。明日の式典の場でご子息の安全を確保することが本依頼の内容です」

「ええ！？でもそんな大層なことはございませんも」

「その通りです。これは極秘に行われる必要があるため、本来の手順とは異なる方式をとりました」

「一体なぜそんなことに…？」

「私のほうからギルドへ提示した条件は、違和感なくご子息の近くに配置できる人材でかつ魔法が使える人物のことです。式典の場では武器の持ち込みは景観を壊し、住民に不安を『えますから』

「はあ…」

「旦那様と奥様の周辺には、長年仕えた者を護衛に置いてるのですが、今回はご子息のお披露目という式典の目的もあり護衛の手が足りません。そこで不安はありますが、外部に悟られず護衛を強化す

るために内容を伏せたままギルドに依頼をさせていただきました

「その大切な役目を俺なんかが受けているんでしょうか…」

「時間がありません。それにこの依頼を受けたということは、こちらの条件をパスされているのでしょうか…であれば、あとは最善を尽くしていただぐだけです」

「ちなみに断つた場合は…?」

「式典が終わるまで監禁させていただきます」

「そこですか…?」

「もちろん、報酬もはずみます。依頼書に書かれたのは偽装です。金貨3枚お支払いします」

「!?」

金貨3枚だと!?

報酬が6倍になりやがった。

ここで断つても明日いつぱい動けないし、魅力的な報酬を前に引き下がるのはもつたといないか。

「わかりました。お受けします」

「ありがとうございます。ではさっそくですが仕事に移っていただきます」

そうじつて執事さんは手元にあったハンドベルを鳴らす。

チコンチコンとこりゃ頭のあとで、部屋にメイドさんちがやつてくる。

「彼が例の新入りだ。一重におもてなししなさい。されど、依頼が終わるまで君の名前は『ミーシャ』だ」

「く？」

「さあミーシャさん、参りますよ」

疑問が頭から離れなこま、メイドさんに連行される。

「それでいつこいつケですか…死にたい」

メイドさん連行されて30分後。
メイド服を着用し、頭にはカツラをかぶり、いわゆる女装した姿の俺がそこにいた。

恐ろしことにメイドさん達のマイクによつて、パツとみただけでは男だとわからぬレベルまで偽装してこる。

マイク中に聞いた話では、俺の役目はメイドとしてドジ千戻と付かず離れずの距離を確保し護衛することらしい。

武器と防具の携帯はできず、有事の際は魔法頼みとのこと。
まあ危険があると決まったわけではないが、式典が終わるまでは気を抜かないよう釘を刺された。

「よくお似合こですよ、ミーシャさん」

「この屋敷のメイド長をやつてこむスザンナさん。」

明日までこの人が現場での俺の上司となる。

「今日は慣れるためにも、一日その姿でお過いしぐださい。メイドの仕事を任せるのは、まあ無理でしょ。ついで明日坊ちゃんを抱いて歩く必要があるので、今から顔見せに参ります」

「わかりました」

スザンナさんに連れられてやつてきた部屋には、赤ん坊をだく綺麗な女性が一人と傍に仕える数人のメイドがいた。

「奥様、こちらが新入りのメイドで名をミーシャと申します」

眠る赤ん坊を抱えたまま、奥様と呼ばれた女性がこちらを向く。

「そう、あなたが『新入り』の子ね。この子のお守りをよろしくね？」

正体を知るもの以外の前では喋るな、と言わてるためコクンと首を縦に振つて了承の返事をする。

今のところ俺の正体を知るのは、領主とその奥さん、執事にメイド長と、共に赤ん坊の世話をするメイドだけだ。

「ここでは喋つても構わないわよ。それあなた、赤ん坊を抱くのは大丈夫？」

「はい、奥様。知識としては知つております」

「あら、見た目は女の子なのにやつぱり声は男の子なのね」

言わないでください、恥ずかしいです。
と、抗議するわけにもいかずうなだれる。

「ふふふ。じゃあ試して明日の子を抱いてもらおうかしり。返をつけ
るのよ?」

そういうて赤ん坊をゆっくりと差し出す。

赤ん坊の抱き方は確か、肘を大きく使って頭と首をしつかり支える
ようにすればいいはず。

一般的な横抱きとなる形で赤ん坊を受け取る。

「もうわ、しっかりしてゐるわね。それなら明日も安心だわ」

「明日の式典でも、俺は何かやるんですか?」

「ええ、広場での披露の際にあなたが抱えて移動するのよ。私もある
人も近くにはいるけれど、来賓を迎えないといけないから息子に
構い続けるのが難しいわ」

「なるほど、そのための護衛ですか」

「もうよ、明日とこいつが無事に過いでせるよに頑張ってちょうだ
いね」

「わかりました」

腕の中で眠る赤ん坊の体温を感じながら、明日は何事も起きません
よつこと願わずにいられなかつた。

その日は、執事さんと明日の打ち合わせと赤ん坊の世話を一日が過ぎた。

オムツ代わりの無駄に吸水性に優れた謎の素材にお皿にかかつたり、使用人達との食事で居場所がなかつたり、自分の名前を呼ばれても誰のことかわからなかつたり…

そんなこんなで女装したまま就寝にいたる。
夜間レッスンという名前で、メイド服のスザンナさんの部屋に今日だけ相部屋にしてもらつてこる。
やつと心休まる場につれてほつとする。

「なんとか仕事をこなしてゐるようで安心しました。その調子で明日もお願いしますね」

「一日がこんなに長く感じるとは思ひませんでした」

「ふふ。じたな機会はもつないかもしませんよ」

事前に知つていれば一生なかつた機会ですけどね。

就寝前に、明日のリハーサルをかねて、人前での歩き方や礼などの作法について一通りレクチャーしてもらつた。
もつとも、にこにこして赤ん坊を抱き続けるだけの簡単なお仕事ですと言わればそれまでだが。

何事もなく夜は更け、そして迎える翌日。

「ああ起きなれど。今日は忙しくわよ」

メイド長にたたき起されたる。

時間は朝5時といったところか。

余った戦力を無駄にする気はないらしく、世話係として駆り出された。

赤ん坊の世話を交代で寝ずの番をしていた娘達と交代し、依頼の終了となる本日いっぱいまでこの子の世話をすることになった。

赤ん坊の世話はもつと手がかかるものだと思っていたが、いざ始めてみると急にぐずりだすことがなく落ち着いて世話することができた。

当然、お腹がすいたり、おしめを換えてほしいほしいときは泣き出しが、起きているときは抱きかかえていれば大人しくなっていった。

その様子を見た他のメイドには仕事を丸投げされるわ、メイド長からは就職しないかと打診がきたり、もちろん断つたが。

そんなこんなで午前を過ぎし、いよいよメインイベントがやつてきた。

街では朝からお祭り状態で、先日利用した市場などは大盛況のようだし、ギルドも街中の治安維持に一役買っている。

街の中央部に近いところには、こじこじた行事にも使える広場があり、そこで赤ん坊のお披露目があるので、領主と奥さん、執事以下護衛を引き連れて外出する。

このお祭りは、領主からの便宜が図られており、税も期間中は撤廃され、何事にも勝る盛り上がりとなっている。

仕事中でなければ、なけなしの路銀をぎりぎりまで使い込んでいたに違いない。

セツトされた会場に到着し、領主と奥さんが他の都市からの使者か

らお祝いを受けている。

やはり、大きな街となると他の自治領とも深い関係にあるのだろう。

正午を回ったあたりで、領主からの演説が始まった。

「本日は、我が息子のために集まつてくれてありがとうございます。諸君の祝福を受けて、きっと健やかに育つことだろう。その礼といつてはなんだが、今日は思う存分楽しんでくれたまえ」

広場にいっぱいに広がる声。拡声器でも使つてゐるのかと思ったが、どうやら執事さんが魔法を使って声を拡大してゐるらしく、領主のすぐ傍に控えているのが見えた。

2分ほどの領主の演説を受けて、住民達の盛り上がりも最高に達した。

あちこちで歓声があがつてゐる。

「では、これより息子のお披露目をしようと思つ」

奥さんに近寄り、抱えていた赤ん坊をゆっくりと渡す。

ここまで泣き出さず、大人しかつたので問題なかつたが、大勢の人 の前でても大丈夫だらうか。

赤ん坊を抱えた奥さんが、領主と並んで住民の前に出る。

周り中から、赤ん坊を祝う声が聞こえ、その混乱に備え護衛の者たちも目を光らせている。

人々が入れ替わり立ち替わり、祝言を投げかけては離れていく。

この街の人々に愛されていることがよくわかる光景だった。

幸せそうな笑顔を浮かべる領主夫妻、お披露目を終えようとしたところ解散かと思われたときそれは起こった。

「……！？危ない！！」

周辺の護衛の一人が声をあげる。

瞬間、領主に向かつて人ごみから短刀が投擲される。

「疾ッ！」

声に反応して領主に近寄つた執事さんが、手刀で短刀を叩き落す。その騒ぎに気づいた他の護衛が周辺を固め始める。

執事さんが彼らに指示を出し、不届き者を探すよう命じ、自身はその場に残つた。

執事さん強かつたんだな。

素手で刃物を防ぐとか真似できそうにない。

この波乱の最中、俺はどこにいたかといつと赤ん坊のお守りから解放され、後ろのほうでのほほんと祝言の様子を眺めていたのでこの騒ぎには参加しなかつた。

そして、人々の輪から一人足早に離れていく小柄な人影を見つけた。

追いますか、追いませんか？

そんなことは他の方にお任せします。

そうしてその場に残つていると、執事さんに声を掛けられた。

「そこになりましたか。予定より早いですが、屋敷に戻ります。あなたは」「子息の護衛を、旦那様と奥様は私が受け持ちます」

わかりました、と返事のかわりに大きく頷く。

急な騒動に泣き出した赤ん坊を奥さんから受け取り、あやしながら屋敷への道を歩く。

前を歩く執事さんの後を領主夫妻が、最後尾に赤ん坊を抱える俺。それに周辺を数人の冒険者の護衛が付いている。

周辺に睨みを利かせる執事さんがいれば、もう大丈夫じゃなかろうかと思いつつ、何が来ても対処できるように魔法による強化を始めておく。

『我が力は増大す・マッシュルインラージ』

小声で詠唱を済ませ、体に力がみなぎるのを感じる。少々メイド服がきつくなつた気がするが、裾の広い物を着ているので周りには気づかれないと。

ムキムキなメイド姿なんて想像したくない。

ワンサイズ上を頼んでおいてよかつた。

詠唱してから3分。

人が少なくなってきた通り。

そろそろ重ねがけの頃合いかなと思っていると、執事さんが振り返り、袖口から短刀を取り出し傍の路地に向かつて投擲する。すげー忍者みたい、と思った瞬間金属音が響き、打ち払われた短刀が転がつて路地の暗がりから男が現れた。

「ここまでの手練がいるとは予想外だったが、使えそうなのは一人か

顔を布で隠した長身の男性。

「…………」

背後に領主夫妻をかばいつつ、無言で短刀を構える執事さん。あの細身に何本仕込んでるんだろう..

「退屈してたところだ、尻拭いとはいえ少しは楽しませてもらおうか」

そういうて、男が片手を振るとドサリと人が倒れる音がして、護衛についていた冒険者が全員地に臥していた。

「これで邪魔な雑魚はいなくなつた、貴様を消すまで後ろには手をださんよ。さあ死合いといこう」

宣言とともに、武器を抜く暗殺者らしき男。

どこから出たのか、右手に一振りの刀、左手には3つに分かれた鉤爪を装着し、執事に対して殺氣をぶつける。

ところで、なぜ俺は無事かというと女装したせいなのか、非戦闘員とみなされたのか放置されているおかげだ。
確かに、武器も防具も持つてないからな！

普通に護衛していたら、傍にいる冒険者達のようになつていただろう。

なんだか人外の戦闘が始まリそうな気配を前に、夫妻に近寄つて、執事さんに変わつて励ます。

「大丈夫です、あんなに強い執事さんですからきっと勝ちますよ

それに最悪、以前使つた『アイシクルエッジ大量殺戮バージョン』を打ち込んで逃げる隙だけでも作つてみせる。

そう言って、抱いたままの赤ん坊を奥さんに預けた瞬間、背後で殺し合いが始まつた。

第一十一話 羅刹の行進（後書き）

書いてたら気持ちよくなつてきた。反省はしていない。
また異世界ライフを漫遊するつもりだったのに、ビックリしていつ
なつた！

ご意見、ご感想お待ちしています。特に作者が気づいてない矛盾の
ご指摘は助かります。では

第一十一話 進む舞台に 笑う鬼

一方的な宣言から、戦いが始まった。

そして、その光景は俺に信じられない事実をまざまざと見せ付ける。

それは、ただ凄かった…

下半身をバネにして飛び出す速度は、俺が反応できるようなものでなく。

振り下ろされる武器が鳴らす音は、空を裂くような勢いで。

そして、叩きつけられるブレッシャーに心を驚づかみにさせていた。その力は、同じ人間とは思えない。

俺だけが弱いわけではない。

俺が住む世界の皆が等しく、この世界では弱者に分類されるだろう。おそらく力の限界が違すぎるのだ、この世界で人が到達できるその限界が。

執事さんと暗殺者が交差するたび、俺の目には見えないが、幾度か応酬があるのだろう。

鉄と鉄を打ち合わせる音が響き、その音だけが何が起きているのか教えてくれる。

執事さんの振るう腕が霞み、止められるのは三叉の爪。

後にやつてくる斬撃を、短刀を手放した別の短刀で受け流す。

ときおり繰り出される体術は、素で受ければ骨が折れそうな速度で、それをお互いが華麗にかわしていく。

声を出すこともできず、その場に立ちつくしてこるのは俺だけでは

ないのだろう。

執事さんの実力を知るであろう、領主夫妻も同様に立ち竦んでいる。

殺し合いの行方は、永遠にわからないと思われたが、何度もかの打ち合いで暗殺者の爪が、執事さんの腕をかすめた。

そのまま、集中が途切れた執事さんの防御を掻い潜り、暗殺者の放つ回し蹴りが執事さんの腹部にクリーンヒットする。

「つ…ぐつ…ゲフッ、ゴホッゴホッ」

痛そう。

いや、あんなの受けた内臓がどうなるかなんて想像したくない。痛みをこらえて、膝をつぐが、まだ顔は前を向き武器を構える。力の差を知りながらも、なお戦おうとするのは、忠義のためか、ただ生き延びたいからか。

「なかなか磨き上げてあるな、『老人。経験が錆付いてあるのがちと残念だがな』

勝利宣言のように悠々と告げる暗殺者。

次、武器を振り上げたときが執事さんの最後だらう。

このままでは、そう、このままだたら。

何も、今までずっと意識が吹っ飛んでいたわけではない。

もつとも、赤ん坊の泣き声が聞こえてこなければ呆然としたまま、この戦いを眺めていたかもしれないが。

あいつを止めなければ、次は俺達の番だ。

狙いが俺達全員を殺すことかどうかは不明だが、碌な事じやがないはずだ。

あんな化け物相手にちんたら詠唱なぞしてては、アツと言つ間も無く、首と胴が離れてしまう。

執事さんが抑えてくれてている今しかチャンスはない。

さて、俺はこの場でいつたい何ができるのだろうか。

今使える攻撃手段は、兎にも避けられかねない初級の攻撃魔法『フアイアーボール／アイスエッジ』

素手で近寄るのは絶対に『遠慮願いたい付加魔法』『エレクトリックスキン』

何事にも力は必要、自己強化魔法『マッシュルインラージ』

旅のお供に『ライト』

使えるかわからない『キュアウーンズ』

そして、なんちゃつて改変魔法『アイシクルエッジ』

あとは、新しい魔法を作りだすくらい…

退くことは許されない、まず逃がしてもらえるかわからないし、何より一日世話を赤ん坊が俺の後ろにいるんだ。

この人達はもう他人じゃない。

この人達に何かあれば、俺の打たれ弱い心に大きな傷が残るのは明白。

故に

『汝が力は増大す・マッシュルインラージ』

「ん？ 貴様」

『汝が纏うは紫電の鎧・エレクトリックスキン』

「魔術師か！」

ただ一人、奴を打ち倒す可能性のある彼に、最大限のサポートを。

「ぐつ……君を雇ったのは正解だったよつだ」

痛みに耐えながらも、再び戦いに望もつとする執事さん。それを見て愉快そうに笑い出す覆面の男。

「あつはつは、これは面白ご。まさか女装している護衛がいるとは。見事に騙されたよ」

笑いをこらえるように、それでも自身の優位は揺るいでいないと伝えるように、放つプレッシャーは変わらず話続ける。

「どうやら」老体もまだやる気のようだし、これは面倒だね。先に『彼女』から潰しておこうか

途端

周囲の気温が下がったような

そんな感覚に襲われる。

首筋から汗が流れだし、寒気が止まらない。

布に覆われた顔から見える目に射抜かれて、すぐに逃げ出したい衝動に駆られる。

やっぱし、やっぱし、これはまずい。

おそらくこのままでは、殺され る

意識が遠のきそつになつたとき、執事さんが奴の視線を遮るよう立ちはだかる。

「私の記憶違いでなければ、私を消すまでは後ろに手出しあしないのではなかつたですかな？」

「ふふつ。いやあそつだつた、そつだつた。これではどうひらが年寄りかわからぬいか」

もう一度愉快そうに笑い、そして俺を襲つていたものが搔き消える。あれは、奴の殺氣なのだろう。

俺に向けられていないとさえ、あの重圧なのだ。とても耐えられたものではない。

「しかし、これ以上邪魔をされるとそれこそ面倒だ。約束を忘れてしまつべからうにね」

「ミー・シヤ。あとは下がりなさい、次は遅れをとりません

かつこよく決めたつもりですか、執事さん。

それ、めちゃくちゃ決まつてますよ。

こちらに向けた笑みを、今度は鬼氣とした表情で刺客を睨みつける。

「なるほど、確かに。先ほどよりは楽しめそつだ」

俺の魔法を受けた執事さんの体は、以前よりもバランスが取れた体形になり、その表面には紫電の閃光が弾ける。

「ええ、若い頃に戻つたようです。……今度はじめから参ります

そして殺し合いの第一幕が始まった。

第一十一話 進む舞台に 笑つ鬼（後書き）

とりあえずどんどん書いてから、後日修正するスタンスで。

ちょっとしたホラーなんですが、先日まで300人くらいだった読者（ユニークアクセスから推測）がなぜか2000人まで増えました。

下手な文章に嫌気が差して、さよならする方が大半だと思いますがそれでも読んでくれる人が増えると嬉しいものですね。

ご意見、ご感想お待ちしております。

なお、後書きスペースは数回すると爆発して消滅します。
そのほうが携帯で読む方の邪魔にならないと思うので。
主に最新話の後書きのみ、このような雑談を載せると思います。
それではまた。

第一一二話 眠れる獅子

昔、疑問に思つてゐたことがある。

ここにあるゲームがあるとしよう。

勇者は を唱えた、攻撃力が一倍になつた。

こういつたデータの世界では、魔法は結果だけが影響していた。もし現実に起つるなら、それは概念の魔法となるだろう。

しかし、俺が使つた魔法『マッシュルインラージ』は、何も攻撃力を上げる概念魔法ではない。

文字通り、筋力を強化する魔法である。

単純に考えれば、ステータスの項目にあるSTRが上昇し、物理的な能力が上昇するだけである。

しかし、その考えは間違いであることを知る。

繰り出されるのは疾風と見紛う一撃。

それは攻撃力が上がつたという結果が原因ではない。

踏み込みの速度、体が作り出すバネによる反発。

さつきまでとは比べ物にならない威力、剣筋となつて執事さんの短刀が、暗殺者に迫る。

暗殺者はそれをぎりぎりでかわし、返す刀を突きたてようとするが、それも俊敏な身のこなしで回避する。

攻撃だけない。

戦いにおける全ての力が向上している。

考えてみればその通りだ、今まで荷物運びにしか使っていなかつたが、あれは腕だけを強化していたわけではない。

人の体は全体でひとつの役割を果たす。

あの魔法は、腕から肩、腰、そして足にいたるまで作業に必要な力を強化していた。

故に、筋力を増せばいいと単純に考えて使つた魔法は、執事さんの能力を数段も引き上げる。

「体が軽い、とは比喩かと思つておりましたが、実感してみるとその表現はぴったりですね」

「ふうん。僕は『体が重い』と思つたことはないけどね」

「年をとれば嫌でもわかりますよ」

皮肉を返し、再び攻撃が繰り出される。

強化された身体を理解し、先ほど以上の速度で男を翻弄していく執事さん。

俺がかけた魔法は、それだけではない。

雷をまとった体が繰り出す体術は、防がれても少ないながらもダメージを伝える。

伝導率の高い武器であれば、それすらも電気の通り道になる。

その証拠に、短刀を鉤爪で受けるときに僅かながら眉を顰めている。

これなら勝てる。

実際、俺がやつたのは二つの魔法を掛けただけだが、の人外バトルに水を挿してやつただけで大金星だ。

と、浮かれたのが悪かったのかもしれない。

「ぐう…」

それから敵を圧倒していたはずなのに、動きが止まる執事たる。一体何があつたんだ。

「ふう…楽しい時間とこのは、長続きしないものですね」

「な、なに…？」

「よく持つたまつですよ、毒を受けながら戦ひのまつりこでしまわ。そろそろあきらめて死んでくれませんか？」

「ど、毒！？」

そんなもんいつの間に使いやがったんだ。
執事さんを見ると、片腕を支えてこる。
なぜ、こんなこと…

「まあ冥土の土産つてこいつのかな。ネタばらしすると、この爪はちゅつとした毒が塗つてあってね？まあすぐ戦えなくなつたらつまらないから、徐々に痛みが増していくのを使ってるんだけど」

それがようやく限界に達したんだ、といつ嘔葉を聞いて思い出す。

あの傷は、戦い始めてすぐ受けたものではなかつたか。

それはつまり、苦痛の中ずっと戦い続けていたというじと。

俺が援護したときには、すでに無視できない激痛だったのではないか…？

「執事さん…」

耐え切れず、声をあげて叫ぶ。
しかし、帰つてくるのは静止の声。

「下がつてなさいと、言つた、はずです」

動かなくなつた片腕をあきらめ、残つた腕に武器を構え、男と対峙する。

垂れ下がつた腕からは、ポタポタと血がたれて、地面に染みを作る。その色は、真つ赤ではなく、黒く濁つた色をしていた。

「…幕引きと参りましょ。騎士は破れ、王が倒れる。これが僕が送る物語です」

「すみませんが、それでは面白くない。騎士は勇敢にも刺客と共に散る、そつ変更してください」

それに無言で答え、男は命を刈り取るために刀を振るう。力ではまだ負けていない。

その刀をしつかりと短刀で受けている。しかし、その後姿はあまりにも弱い。

痛みが増すというのは、おそらく傷口が壊死していく毒なのだろう。神経毒であればすでに戦いは終わつていいだろ？が、このままでも詰みだ。

考えひ、俺。

INTの高さを生かすのは今しかないだろ？

俺の手持ちのカードでの現状の打破は、はつきりいつて…無理だ。ならば、作るしかない。

いくつもの案が浮かんでは、実行不可とされ消えていく。
奴に効く攻撃魔法が思い浮かばない。

では、支援魔法は？

肉体の強化は済んでいるため、あとは概念的な要素を強化するしかない。

それより重要なのは、回復か。

毒を取り除けば、まだなんとかなる、と思いたい。

INTの高さを生かしたのはいいが…

傷を癒すためには大きな制限がある。

俺という特異な存在ゆえの欠点、PIEが1、つまり信仰呪文を扱うことが難しいという欠点である。

なげなしの1点であるが、いつもやの30～40が一般人並という話であれば、この1点はあっても変わらない、「ミクズ同然な数値であろう。

存在する神様全員に軒並み拒否されても文句は言えそうにない。

しかし、これが可能性1%と同義であったとしても、あきらめるわけにはいかない。

「」で俺がやらなくて、誰が皆を守るんだ。

手出しだしたら殺す、という忠告なんて知ったこっちゃねえ。

やめなさい、という静止だつて今は聞かなかつたことにする。

放つておいたら人が死ぬんだ、少しくらい我が儘言つても許してくれる！

「神様、聞こえているならどうか助けてくれ！あるだけの魔力を持つていつてもいい。足りない分は後日請求してくれ！だから、頼む

！」

『彼の不浄を浄化し、大いなる癒しを『えええ・ピューリファイボデ
イ』

清浄化を示す言葉であるピューリファイ、そして望む効力を言葉にし
神に祈る。

瞬間、今まで感じたことのなかつた倦怠感に襲われ、膝をつく。
ドッと押し寄せた疲労に体がいうことをきかない。

しかし

ガキンッと

目の前に振り下ろされようとしていた刀を、両手の短刀で受け止める執事さんの姿が見えた。

「あれだけ虐めてやつたのに邪魔をするとはな。忠告を無視したそ
いつが悪いんだぜ？」

「もとより、口先だけの言葉など信用する必要はないでしょう。そ
れに、あなたの相手は私です」

外見ではわからないが、腕が動いているのを見ると、無事に傷が癒
えたのだろう。

これでもう、安心できる。

「執事、さん、負けないで、ください、ね

「ええ、あとまでは任せください」

その声を聞いて、安心してしまった意識がゆっくつと遠のいていった。

そして『氣を失う直前、懐かしい声を聞いた気がした。』

第一二三話 眠れる獅子（後書き）

困った困った。

実際にあんな化け物が田の前にいたら、魔法が使えても勝てる気がしません。

主人公の取った行動は、筆者も考えるものと同じレベルです。

もうこいつそ神様にあいつ殺してもらえばよくね？

とこうマジチートな囁きは、心に住む悪魔のもので耳を貸さないこよなくしましょう。

次回は、この場の締めにて一波乱の終わりに持つていければいいなと思います。

ご意見、ご感想お待ちしています。ではでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8462u/>

異世界で我が儘に

2011年12月5日19時19分発行